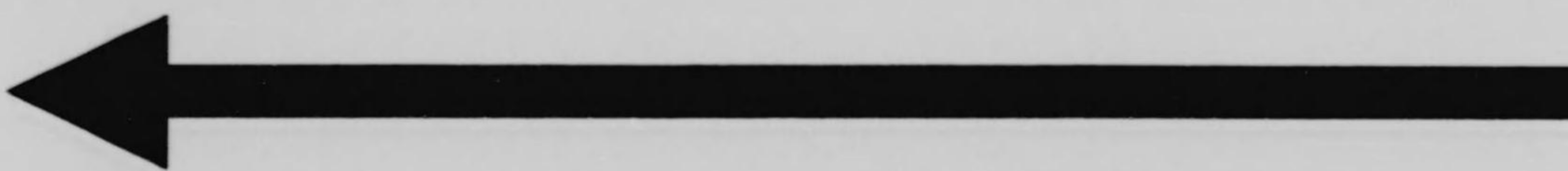


379
12

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 11 12 13 14 15

始



371
120



379-12_v



國譯禪宗叢書

第九卷

大正
11. 6. 16
内交

國譯禪宗叢書第九卷凡例

一、本叢書第九卷に所收の書は、義雲和尚語錄(二卷)、普濟禪師語錄(三卷)、月坡禪師語錄(二卷)、一休和尚狂雲集(二卷)の四部九卷なり。此の四部の書中、義雲禪師語錄、普濟禪師語錄、月坡禪師語錄は、共に曹洞派下の名著にして、狂雲集は一休和尚の名と共に臨濟門下にて、其の書名、人口に膾炙せり。今次國譯に際しては、義雲禪師語錄は正徳五年の刊本に據り、普濟禪師語錄は元祿八年の刻本に基づき、月坡禪師語錄は天和二年の印行本に従ひたり。而して狂雲集は寛永十九年の刊行本に基き、之れに近代出版に係る活字本を參考して、一々文字の異同を正せり。希はくば誤少からんか。

一、本叢書第八卷并に本卷に收むる所の曹洞宗に屬する書の國

國譯禪宗叢書第九卷 凡例
 譯は悉く前曹洞宗大學教頭山田孝道老師の手を假りて、其の業を卒へたり。茲に録して謝意を表す。

大正九年九月

編者誌す

國譯禪宗叢書 第九卷

目次

國譯義雲和尚語錄解題	一—二
國譯義雲和尚語錄	一—三六
義雲和尚語錄原文	一—五六
國譯普濟禪師語錄解題	一—二
國譯普濟禪師語錄	一—二〇
普濟禪師語錄原文	一—七二

目次

國譯月坡禪師語錄解題……………一——二

國譯月坡禪師語錄……………一——八三

月坡禪師語錄原文……………一——三七

國譯狂雲集解題……………一——三

國譯狂雲集……………一——一一二

狂雲集原文……………一——六五

國譯義雲和尚語錄

解題

義雲禪師は日本曹洞の鼻祖永平道元和尚四世の法孫、寶慶寂圓の法嗣なり。草薺にして洛の教院に難髪せしも、故あつて中頃衣を改め、寂圓に越の寶慶に調して弟子となる。隨侍親炙殆んど二十年、永仁三年世壽四十三歳にして入室得法す。正安元年菊月、圓の入寂するや、遺囑に依りて師席を董し、一住十有六歳。正和三年更に義演の遷化に遇ひ、同年請せられて永平寺に主たり、守塔又十有餘星霜なり。師や、知見聰明倫を絶し、道價内外に高し。二會の門庭、緇素踵を接し、常に千指に満たざることをなかりきといふ。

本録、上卷は正安元年越前寶慶寺の開堂より正和三年永平寺入院の上堂語、小參語、法語、偈頌、贊等を收め、下卷は其の拾遺にして、延文二年義雲和尚の法嗣曇希が校勘刊行せし義雲禪師寶慶永平二會の語録中、泄れて未だ載せざるものを集めて一卷となせしものなり。即ち出山道白、義雲和尚語録を再刊するの次、當時寶慶の住持龍堂和尚、室内を搜索して其の遺篇を拾ひ輯めて一卷となし、自序及び面山瑞方の跋を附して正徳五年刊行せしものなり。其の收むる所は上堂語、小參語、贊、偈銘、

正法眼藏品目の頌、並びに編者自ら撰する所の禪師の略傳等より成る。而して其の寶慶に於けるものは、侍者圓宗空寂の編に係り、永平に於けるものは、弟子曇希の集むる所なり。

早歲冠を掛け、萬緣俱に棄つ。② 澗飲木食、

氷懷藥志。③ 三天に趣向し、十地に④ 步驟す。

道群生を蔭ひ、徳品類に周し。赤手にして

洞上の孤宗を起し、談笑にも君臣を五位に措

く。若し願力に乗じて再來するに非ずんば、又

安ぞ⑤ 迦然として獨異なることを得ん。

永平住山雲和尚の⑥ 壽像、其の徒宗可⑦ 贊を請

ふ。

⑧ 泰定改元、歲甲子に在るの春

⑨ 靈隱山獨孤叟淳明題す

①冠を掛く。後漢書列傳に曰く「蓬萌字は千慶、北海都富の人、長安に之いて學し、春秋經に通ず。時に王莽其の子字を殺す。萌、友人に謂つて曰く、三綱絶ゆ、去らざれば禍將に人に及べんとすと、即ち冠を解きて東都の城門に掛け家族を將めて海に泛んで遼東に客たり。」

②澗飲木食。川の水を飲みて咽をうるほし、木の實を喰ひて飢を養ふをいふ。

③氷懷藥志。氷懷は胸中更に煩惱の熱氣なきをいひ、藥志は藥(き)はだしの苦きを喰ふが如き志を以て修行するをいふ。書言故事六に「清苦の名あるを氷漿の聲と云ふ」とあり。

④三天。一には世間天、一切刹土の諸大國王は人中に處すと雖も、天福を受くるが故にいふ。二には生天、一切衆生は其の善因に依りて或は欲界の天に生じ、或は色界の天に生じ、或は無色界の天に生ずるが故にいふ。三には淨天、聲聞、緣覺は諸の煩惱を斷じて

大神通を得、清淨無染なるが故にいふ。蓋し按ずるに義は住、行、向の三賢を含む、今は下の十地に對して三天といふものならん。

⑤步驟。驥は馬の疾く歩むをいふ。

⑥群生。衆生といふに同じ、上は天上より下地獄に至る十界の異生悉くを指す。

⑦品類。三界二十五有の品類のこと、一切萬物といふも同じ。

⑧迦然。超然と同じ、寥遠の貌、祈るために掲ぐる像の意。

⑨贊。贊は稱美なり、讚に作る、其の三體あり、雜贊、褒贊、史贊是れなり、但し今は雜贊にして意、褒美を専らにするなり。

⑩泰定改元歲甲子。元晋宗の曆號、本朝後醍醐帝の正中元年、西曆一三二四年に當る。

⑪靈隱山。杭州にあり、獨孤淳明禪師は徑山虎巖伏の法嗣、楊岐下十二世の孫。

國譯義雲和尚語錄序

或が云く、「拈華微笑、眞宗を默露し、面壁立雪、玄旨を密證す。言語道斷心行處滅、只だ後の來る者の本分を守らず、權唇を鼓動して禪と説き道と説く、所以に眞宗玄旨殆ど地を拂はんとす。亦怨ならずや」と。予云く、「實に所説の如し、然も未だ槩して言ふ可からず。夫れ佛祖の宗旨は専ら妙悟に在つて、必ずしも語黙に拘らず。苟も妙悟の田地に到るに及んで、語や默や同じく性源に歸して、始めより兩般無し。昔者、黃面老子、一大藏教を演出して、天上人間、龍宮海中、處として流通せずと云ふこと無く、而も末抄頭に於て自ら告示し

①義雲。略傳は卷末にあり。
②和尚。梵語に烏婆陀耶といひ、和闍、和闍、和上等に作る、親教師、力生等と譯す、阿闍梨と共に授戒の師たる者の名なりしが、中古以來單に高僧の尊稱に用ふ。
③語錄。祖師の語要を集めたるものをいふ、錄は記なり、但し是れは禪林のみに限るに非ず、宋朝以後には儒者にも何某語錄と稱するもの多し。
④序。文の一體、序は緒に通ず、即ち「はしがき」のこと。
⑤拈華微笑。拈華瞬目、破顏微笑の略、世尊一日靈鷲山に在つて、百萬の大衆に說法せらる、時、梵王、金婆羅華を獻

す、世尊百萬衆前に此の華を拈じて瞬目し給ふに、大衆其の意を會せず、時に摩訶迦葉座中に在つて破顏微笑す、世尊「吾れに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付す」と宣せらる。
⑥面壁立雪。傳燈達磨章に云く、「嵩山の少林寺に寓止して坐す、終日默然たり、人之を測ることなし、之を壁觀婆羅門といふ」と。五燈會元卷一、達磨章に云く、「其の年十二月九日夜、天大いに雪を雨らす、光(神光慧可)堅立して動かす明に及んで積雪膝を過ぐ云云」と。
⑦榊唇。榊は木の名、皮は弓に

て云く、「我れ四十餘年未だ曾て一字を説かず」と。又我が永平高祖云く、「言語道斷とは一切の言語を謂ふ、心行處滅とは一切の心行を謂ふ」と。佛佛祖の親言親口、譬へば蜜を食つて中邊皆甜きが如し。誰か一味上に安に濃淡を分たん。」
義雲禪師は、寂圓の嫡子、^①知見一時に高く、道聲千古に轟く。初め寶慶の法席を補して、

貼るべし、今榊唇といふは猶ほ榊唇といふが如し。
②黃面老子。釋尊を指すなり、蓋し如來は金色身の故にいふなり。
③末抄頭。抄は「なはり」と訓す頭は助字、最後の意なり。
④我四十餘年未だ曾て一字。楞伽經三、大般若經四百二十五等に出づ、佛、大慧に告げ玉ふ語なり。
⑤正法眼藏安居の卷に出づ。
⑥譬へば云々。四十二章經第三十八章に云く、「佛の言はく、佛道を學する者は、佛の言説する所、皆應に信順すべし、譬へば蜜を食ふに中邊皆甜きが如し、吾が經も亦爾り」と。
⑦寂圓。越前福山寶慶寺の開山、支那の人、天童淨和尚に依つて削染、時に智琛と名づく、乃ち和尚の族姪なり、高祖曾て天童に在りし時友とし

て好し、祖師東の日、師亦從はんと欲す、祖云く、「和尚老いたり、且く湯藥に事へ」と、紹定元年淨和尚示寂、師因つて商舶に乗じて來り、祖に深草に謁す、其の後興聖に永平に須臾も離れず、祖示寂の後、井和尚に隨ひ、後山を寶慶寺に開き、正安元年坐逝す、壽一百有餘歲なり。
⑧知見。智論二十六に曰く、「人に從つて讀誦し、分別籌量あるが如き、之を知と名け、自身得證する、是を見と名く」と。
⑨棠陰。棠は「くりんご」の木、棠陰は、くりんごの木の下といふことにて、寺の意なり。
⑩中興。中否にして再び興る之を中興といふ、今は中興祖の意。東漸略清規に云く、「道行崇重、功山門に被る者、之を準開山といひ、或は中興祖と號す。」

⑪老宗匠。老は尊稱、宗匠は宗師の意、俗間に於て和歌、俳諧、茶道等の師を「そやしやう」といふは、其の奥意を禪門に托したるに依りて、轉じて之を用ふるに至りたるならん。
⑫二會。寶慶及び永平の二會なり、會は集會の義。
⑬山僧。自己の謙稱、都市を離れたる僻閑なる山中に庵を結べる僧の意。
⑭梓行。板木に刻し發行する、と、蓋し梓は「あづき」の木、板木に用ふる材なり。
⑮謂々。淺短の貌。
⑯目耕。目にて耕すといふことにて、讀むの意なり、宋史に云く、「王韶家貧し、卷を執つて輟まず、家人其の田を耕さざるを謂る、韶云く、我れ常に目耕す」と。
⑰是れ獨り楞伽を云ふや。上の

妙に先師の脈を續ぎ、後に永平の業陰に坐して、能く高祖の道と興す。當時四方推して洞上の中興と稱す、謂つ可し、傑然たる老宗匠と。二會の語録幸に未だ磨滅せず、我が門の光輝豈に怡悦せざらんや。寶慶今の住山龍堂和尚、遠く一本を寄せて、山僧が序して以て梓行せんことを乞ふ、盛意譚々ならず。我れ得て辭せず、卷を開いて目耕し、覺えず編を終ふ。句句黙露の眞宗を發し、文文密證の玄旨を吐く。古人云く、「佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す」と。是れ獨り楞伽を云ふや。漫に秃筆を染めて之が序を爲ると云ふ。

佛語心云々の文は楞伽經の所説なり、今正山斯く云ひて、本録も亦然る所以を明すなり。
秃筆。穂先のきれし筆、轉じて自作文章の謙辭。
正徳乙未。正徳は中御門帝中の曆號、乙未は同五年、西紀一七一五年に當る。
正山。名は道白、月舟宗胡の

法嗣、夙に宗門の衰頽を憂ひて之を再興せんとす。初め諸方の大刹より請ぜらるゝも、總て應ぜざりき、延寶八年加州大乘寺に請ぜられ、先師の後席の故を以て喜んで住す、去りて後山城の靈峰に遷り、源光菴を營む、蓋し本序文は靈峰在菴中の筆に成る、元祿十二年、興聖の梅峰と共に江

戸に出て、一師印證の復古を計り、大いに法系の紊亂せるを改めんとす、前後四十年にして其の志を成す。正徳四年八月十九日寂す、壽八十。然れば本序文は示寂の翌年の筆となる、これ何かの誤りならん、未考。
艸堂。茅屋といふに同じ、謙退の辭。

維れ時 正徳乙未の季夏祥旦

正山老納欽んで洛北鷹峯の艸堂に序す

國譯義雲和尚語錄

住越州 薦福山寶慶禪寺語錄

侍者 圓宗 空寂 編

師、正安元年己亥十一月二十一日に於て當山に就いて開堂、拈香、祝聖罷つて、上堂、云く、「百川大海に向つて到る、到りれば異名なし。一心萬境に隨つて轉ず、轉じて後本位に住す。鏡を將て像を鑄れば、鑑照することを得ず。像を將て鏡を鑄れば、光明自ら新なり。主は圓外に出でずして、遍身の手を招いて往來を接し、賓は途中に受用して、通身の眼を活し、今古を鑑す。且く道へ、

國譯義雲和尚語錄

薦福山寶慶禪寺。越前の國大野郡上庄村にあり、弘長辛酉の年、藤原下野守智圓沙彌開基す、開山は寂圓禪師なり。
侍者。師長の左右に常侍して其の命に順ひ、給侍輔佐する役の名。これに五種あり、五侍者といふ。
正安元年。正安は後伏見帝の曆號、同元年は西紀一二九九年に當る。
開堂。法堂を開き講經演法することをいふ。必ずしも新に入

院せる住持に限りていふには非ざれど、現今にては新任入院開堂を特稱するに至れり。
拈香。拈は「つまむ」と訓ず、香をつまみて焼くこと、持香に同じ。
祝聖。聖は聖主の略にて、天子のことをいふ。祝は祝禱の義にて、天子の聖壽無疆を祝禱することなり。
上堂。堂は法堂の義にして、演法のために住持が法堂に入るといふ。

① 大衆賓主相對するが如きんば、什麼の手眼をか具せん。還つて會すや。② 觀面呈し難し。向の上の機、家風萬古、人の爲に施す。③ 上堂、廓爾として靈なり、本光自ら照す。④ 寂然として應ず、大用現前す。⑤ 木馬風に嘶いて今時の歩を運ばず、泥牛海を出でて空劫の春を耕破す。諸人相委悉すや。⑥ 玉人手を招く處、復妙廻途に在り。⑦ 半夏上堂、身は浮雲に似たり、心は清風の如し。眼に無影樹を看、耳に沒絃琴を聽く。半夏已に過ぐ、過來底の身今什麼の處にか在る。⑧ 兄弟但だ見聞に墮し去るが如きは、則ち第二義門に向つて模様を作す。⑨ 作麼生か是れ第一義諦。良久して云く、「翡翠踏躡す荷葉の雨、鶯鷺衝破す竹林の煙。」

- ① 主は主人、或は師家の意に用ふることあり。
- ② 關外は關(しきぬ)外、即ち家門外の意。
- ③ 遍身は全身のこと。
- ④ 賓は客人、或は學人を指すことあり。
- ⑤ 通身は全身と同じ。
- ⑥ 大衆の大半は多の義、多衆の人と云ふこと。叢林にて四方より集り來れる雲水の衲僧を總稱して、大衆と云ふを當とす。
- ⑦ 觀面は面前と云ふが如し。
- ⑧ 向上は向下の對、又は絕對平等の境地。
- ⑨ 機は機用のことにて、宗乘の意なり。
- ⑩ 家風は一に宗風とも云ひ、一宗を丰標する風儀を云ふ。
- ⑪ 廓爾は無量礙の貌、佛性の義。
- ⑫ 本光は本來の光明と云ふこと、自己具有の靈性を指す。
- ⑬ 寂然は寂靜の貌。
- ⑭ 大用は大なるはたらき、即ち機用のこと。
- ⑮ 木馬は泥牛と同意にして、思慮分別を離れたる無心無作の意なり。
- ⑯ 泥牛は泥にて造りたる牛なり、沒蹤跡斷消息の意。
- ⑰ 空劫は四劫の一、壞劫の二十小劫終りて、世界全く空に歸し、更に次の成劫に至る間を云ふ、此の間また二十小劫あり。
- ⑱ 玉人は玉の如く皎潔なる人を云ふ。
- ⑲ 復妙云々は本來の妙處のことにて退歩返照の意。
- ⑳ 半夏は結制九旬安居の半、即ち入寺禁足の日より四十五日目の日を稱するなり。
- ㉑ 無影樹は無形の樹なり、聲色外の形容。
- ㉒ 沒絃琴は絃のない琴なり、雨竹風松是れ自然の大音樂なり。

上堂、世尊、密語あり、迦葉覆藏せず。死中に活あり、空に礙へられず。活中に死あり、物に礙へられず。有是れ有にあらす、無是れ無にあらす。芭蕉和尚道ふ、「爾に拄杖子あらば、我れ爾に拄杖子を與へん。爾に拄杖子無くんば、我れ爾が拄杖子を奪はん」と。畢竟作麼生。心地諸種を含む、普雨悉く皆生ず。既に華情を悟り已れば、菩提の果自ら成る。

中秋上堂、乾坤の眼を開いて更に眼に當るの境なく、水天の光を放つて終に物に應ずるの照を作す。船子絲綸を垂れて、直下に釣り得て船に載せて歸る。雲巖掃帚を擎げて、驀頭に拈起して空に對して拂ふ。拂子を豎起して云く、「而今將ち來つて雲上座が手裡に在り、

- と聽取することなり。
- ① 兄弟は法門の兄弟にて、共に本師を同じうするを云ふ。又一會の僧を雲兒水弟と云ふ。
- ② 形式的の動作をいふ。
- ③ 作麼生は支那の俗語にして、生は助辭、作麼は「何」と同じく、如何、如何に、如何にせん等の意に用ひらる。
- ④ 第一義諦は第二義門に對する語なり、第二義門は客觀的事實を稱し、第一義門は主觀的理想を云ふ。
- ⑤ 翡翠は鳥の名、和名はせび。
- ⑥ 鷺鷥は鳥の名、和名はさぎ。
- ⑦ 密語とは世尊秘密附屬の語のこと。
- ⑧ 迦葉は印度相承の第一世なり。摩訶陀國の人、姓は婆羅門、名は迦葉波(Kasyapa)、飲光と譯す、初めは婆羅門に出家せしも、多子塔前に於て世尊に遇ひ、遂に佛弟子となり、終身十二頭陀を行じ、十大弟子中、頭陀第一と稱せらる。
- ⑨ 芭蕉和尚は支那鄆州芭蕉山慧清禪師なり、仰山の孫にして、南塔の光涌に嗣せり。
- ⑩ 拄杖は僧の携ふる杖のことなり、禪僧の之を携ふる所以は、行脚の時危に乘じ、險を渉るに力を扶くるが爲なり。昔佛の之を許されたる由縁に二あり、一には老瘦無力の者、二には病身の者。
- ⑪ 心地とは、心は一切萬法を現出すること恰も大地の草木百穀を生ずるが如くなるが故に喩へて云ふなり、禪宗にては各自の本心を指す。
- ⑫ 普雨は雨のこと。
- ⑬ 華情は花の心。
- ⑭ 菩提は梵語、智、道、覺等と譯す、佛の正覺智のことなり。
- ⑮ 乾坤の眼。靈十方界是れ沙門の一隻眼と云ふ語なり。意相

還つて是れ什麼物をか拂ふ。大衆委悉せんと要すや。⑤本來無一物、何の處にか塵埃を拂はん。」

⑥開爐上堂、舉す、永平初祖云く、「火爐今日大いに口を開き、諸經次第の文を廣説す。

寒灰と鐵漢とを鍊り得て、心々片々目前に般なり」と。師云く、「深く冷灰を撥いて小火を看る、幕頭に開示して眞文を轉す。炭を點し柴を添ふ意なきに似たり。陝府の鐵牛鍊り得て般なり。」

⑦上堂、朝打三千、佛祖證せず。暮打八百、狸奴悉く知る。⑧順行や、達磨西來九年面壁し、逆行や、庭前の柏樹枝葉堆を成す。⑨一念萬年、鏡を以て像を鑄るが如し。萬年一念、像を以て鏡を鑄るに似たり。甚と爲てか

恚麼なるや。大衆還つて會すや。良久して云く、「丙丁童子來求火、天上の斗星廓として空を照す。」

⑩佛涅槃上堂、常寂にして照あり、無功中に位を辨じ、顯赫として靈なり、自位中に功を立す。⑪綿密々の處、回互傍參す。⑫明歷々の時、孤圓絶跡す。⑬諸禪德、但だ釋迦老子、今日の夜半に至つて、般涅槃に入るが如きんば、還つて出沒應變底の通理ありや。良久して云く、「唯一堅密身、一切塵中に現す。」

同じ。

⑭船子云々とば、圓悟擊節の上、船子の頰に、「千尺の絲綸直下に垂る、一波纒かに動けば萬波隨ふ、夜靜かに水寒うして魚食まず、滿船空しく月明を載せて歸る。」

⑮直下は當下に同じく、其の儀、或は直にの意なり。⑯雲巖掃地の公案なり。作務も一色の辨道にして第二頭に涉らざることを示す。⑰麴頭は麴直、麴地等と同じく直にの意なり。

⑱本來無一物云々とば萬法の眞相は妄想分別の外にして、執着すべき一物もなきを云ふ。故に拂ふべき煩惱の塵埃をも認むべからずと云ふ。⑲開爐は陰曆十月一日(陽曆十一月一日)に至れば、僧堂其の他各寮舎に爐を開きて煖を取る、是を開爐と云ふ。此の

日住持人、大衆を率ゐて佛前に於て開爐の式を擧ぐ、之を開爐の上堂と云ふ。

⑳擧は擧示なり、人に示すこと。㉑永平初祖は道元禪師承陽大師のこと。

㉒寒灰と鐵漢とは情識分別を滅盡したる學者と、其の心の堅固なること鐵の如き學人とを云ふ。

㉓眞文は世尊金口所説の法文を指す。又は眞實無相の法文をも云ふ。

㉔陝府の鐵牛とは、大明一統志に河南府の鐵牛は陝州城外黄河の中に在り、頭は河南に在つて尾は河北にあり、世に傳ふ、禹鑄て以て河患を鎮むと、意は今日禹王の手をからず、直に爐中より此の熱鐵牛を得べしとの火爐語なり。

㉕朝打暮打とは、朝に三千を打ち、夕に八百を打すと云ふこと。

㉖丙丁は五行の火なり、一句の意は火を以て火を求むると、即ち自己を以て自己を覓むるに喩ふ、他に向つて求むれば遠うして遠しの反對なり。

㉗佛涅槃は釋尊の涅槃會なり、毎年二月十五日に行はる、三佛會(誕生、成道、涅槃)中の一。

㉘常寂は常住不變の眞理を指す。

㉙無功は功勳(修行の效果)のあらはれたることの對、或は大功、功々等と云ふ。

㉚位は人々本具の主人公あることを信じて、之に歸向する位を云ふ。

㉛顯赫は最もあきらかなる形容。

㉜自位とは自性本然の位のこと。

㉝綿密々は目に見えぬ修養不斷の形容。

所にあらす。所以に南嶽博を磨し、東平鏡を破る。謂つべし無功の時功を立し、無位の處位を排すと。大衆是の如き手段を會せんと要すや。良久して云く、「三級浪高うして魚龍と化す、癡人猶ほ辱む夜塘の水。」

佛生日上堂、塵に處して曾て塵に染まらず、水を以て如何が水を洗はん。一性本然として來去を絶す。萬德圓成して諸縁に合ふ。所以に降神誕生の身を現し、灌沐清淨の體を示す。七步周行、歩々方に迷はず。天上天下巍々として獨り尊と稱す。諸禪德作廢生か是れ我が佛降生灌沐底の道理。良久して云く、「摩耶漆桶忽然として脱し、難陀鼻頭竊地に穿つ。」

解夏上堂、一もまた不住、箇箇圓成、異

の回互傍參とは甲乙彼此互に交參迭入すること。
② 明歷々とは分明なること、自己の境界の不曾藏なるに云ふ。
③ 孤圓跡跡は秋月の長空にありて絶對孤迥なるが如き意なり。
④ 諸禪徳とは會下の諸禪人を云ふ。
⑤ 夜半とは釋尊の入滅が夜半なりし故にいふ。
⑥ 般涅槃は梵音マリニルソーナ (Parinirvana)、滅度、圓寂等と譯す、涅槃に同じ。
⑦ 出沒應變は自由自在なる機用のこと。
⑧ 唯一堅密身とは世尊の常住金剛不壞の身のこと。
⑨ 一切塵中は日用光中喫茶喫飯左之右之無般といふこと。
⑩ 一隻眼は活眼のこと、雙眼は何人も具する所なり、更に左

右に偏せざる一眼を云ふ。
⑪ 無量の寶刹とは無數の大伽藍と云ふこと。
⑫ 一微塵とは天眼にあらざれば見るに能はざる程の微細なる塵のこと。
⑬ 露堂々は明歷々と同意。
⑭ 本地の風光とは各自本具の心性のこと。又本來の面目、本分の田地なども云ふ。
⑮ 情識計較は凡夫の妄分別のこと。
⑯ 南嶽博を磨すは、南嶽讓と馬祖道一との問答なり。
⑰ 東平は仰山寂禪師のこと、馮山の法嗣東平に住したるが故にいふ。
⑱ 無位は眞箇解脱の人のこと。
⑲ 三級云々以下は龍門の故事なり。魚が龍に化して去りたるを知らずして、癡人は夜中潛に魚を搜尋すと云ふ意。
⑳ 佛生日は四月八日に佛世尊降

もまた無間、法々無礙。把定すれば則ち凡聖人畜同居して一拳を成すが如く、放行すれば則ち東西南北位を分つて五指を豎つに似たり。兄弟、孟夏窟籠を構へ、初秋布袋を開く。中間九句作廢生か履踐せん。還つて奇特の事ありや。良久して云く、「坐臥經行我が事にあらす、清風明月自ら相宜し。」
上堂、博を磨して鏡

誕の日なり。
① 塵は塵界のことにて、娑婆世界を指す。
② 水は元清淨なるが故に、水を以て此を洗ふこと能はざるを云ふ。
③ 本然は本來、又は天然と同じ。
④ 萬徳とは如來の三十二相、八十種好等の福徳相のこと。
⑤ 諸縁とは善惡是非等吾人の相對の諸の前後なり。
⑥ 降神とは佛誕生の時、諸天龍神の出現を云ふ。
⑦ 灌沐とは如來の清淨身に香湯淨水等をそそぐこと。
⑧ 七步云々とは佛誕生の時、前後左右へ七脚づゝ玉足を運び給ひした云ふ。
⑨ 方とは四方即ち前後左右を指す。
⑩ 天上云々とは、佛誕生の時、右手を以て天を指し、左手を以て地を指し、天上天下唯我

獨尊の語を宣し給へり。是れ即ち天地間に於て最尊最勝者たるの意を示されたるものなるを云ふ。
① 摩耶は一に摩訶摩耶と云ふ、梵音マヤー (Maya)、極妙、大智母、天后等と譯す、淨飯王の后にして世尊の母、佛出生の後七日にして歿せり。
② 漆桶とはうるしをけのこと、今は凡胎に喩ふ。
③ 難陀は梵音ナンダ (Nanda)、跋難陀、梵音ワパナンダ (Dharmata) と兄弟にして八大龍王の中なり、世尊降生の時、天甘露を雨らして供養せり。佛法の守護神なり。
④ 解夏は一或は「げち」とも云ふ、夏安居の制を解くことなり。時は七月十五日の早天に於て此の式行はる。
⑤ 箇々圓成とは、蠢動含靈本來

① 法々無礙とは、森羅の萬象獨露現成なるが故に。
② 把定は取つて動かざるの義。
③ 放行は收束することなく、自由任すこと。
④ 兄弟は一會の衆僧を指す。
⑤ 窟籠とは束縛の意、一夏の安居禁足を指す。
⑥ 履踐は修行上の所得のこと。
⑦ 塵界は三界と同じ。
⑧ 蒲團は坐禪の時用ふる敷物にして、其の形圓なり、中に蒲又はパンヤを入れて作るが故に此の名あり、我が國に於て夜具寢具等を蒲團と稱するは其の義を失せり。
⑨ 記得。奉示と同意なり。
⑩ 嚴陽は趙州の法嗣。
⑪ 趙州は支那山東省曹州鄆郡の人、姓は郝、幼にして本州匡廬院に剃髮し、南泉普願に參じて契悟す、黃檗、寶壽、鹽官、夾山等を歴訪し、後趙州觀音

と作せば、魔則ち作佛す。鏡を以て像を鑄れば、光何の處にか歸せん。盡界を拈じ來つて蒲團上に坐し、蒲團を放下して盡虚空に掛く。記得す。嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何。」州云く、「放下着。」尊者曰く、「一物既に不將來、箇の甚麼をか放下せん。」州云く、「恁麼ならば即ち擔取し去れ」と。師曰く、「這箇の道理を委悉せんと要すや。佛子此の地に住すれば、則ち是れ佛の受用、經行若しくは坐臥、常に其の中に在り。」

上堂、山に登らば須らく其の頂に到るべし、到らざれば宇宙の寛きことを知らず。海に入らば須らく其の底に徹すべし、徹せざれば滄浪の深きことを測らず。諸兄弟、法に入つては須らく其の通塞を辨すべし、辨せざれば脱

院に住し、大いに北方に南嶺の禪風を鼓吹せり。乾寧四年十一月寂、壽百二十、眞際大師と諡す。

① 一物云々とは空無一色の消息を云ふ、乃ち父母未生以前、一機未發已前に承當して我執法執を去り、虛無空寂の境に至ること。(從容錄第五十七則の公案なり)。

② 放下着。放下は手より物を放ち捨ること、一物も執することなきを云ふ。着は助辭。

③ 擔取は荷ふこと、放下の反対なり。

④ 山に登らば……滄浪の深きを測らず。大慧正法眼藏一に大珠和尚の語として擧げたり。永平廣錄四の上堂等にも此の語あり。

⑤ 宇宙。上下四方を宇といひ、古往今來を宙といふ。

⑥ 滄浪。滄海に同じ、青海原のこと、漢は海の遠く香にしてくらき鏡の義。

⑦ 通塞。消息と同じ。

⑧ 脱落。「もれける」といふこと、吾が身心此の儘にして我慢我見悉く無くなれる説。

⑨ 洞山。洞山悟本大師のこと、雲巖曇晟の法嗣、此の因縁傳燈十五及び會元十三に見ゆ。

⑩ 闍梨。阿闍梨の略、梵語、阿遮利耶、阿祇利に作る、軌範師又は正行と譯す。元來は弟子、僧俗の學解行爲を糾正指導して、其の師範たるべき大徳の稱なれども、禪門にては僧の代名詞として、現今俗稱の尊公、貴公の意に用ふ。此の場合に決して阿闍梨とは云はず、單に闍梨といふと知るべし。

⑪ 西天。支那、日本より西方にある天竺國の意にて、印度のことをいふ。

落の道を得ず。記得す、洞山僧に問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「遊山し來る。」山曰く、「還つて頂に到るや否や。」僧云く、「到る。」山曰く、「頂上還つて人ありや否や。」僧云く、「人なし。」山曰く、「恁麼ならば即ち闍梨頂に到らず。」僧云く、「若し頂に到らずんば争か人なきことを知らん。」山曰く、「闍梨何ぞ且く住せざる。」僧云く、「某甲住することを辭せず、西天に人の肯はざるあらんと。」師曰く、「這箇の道理委悉せんと要すや。」

① 一片の白雲谷口に横はり、幾多の歸鳥か盡く巢に迷ふ。

上堂、永平初祖云く、「吾が佛、諸の弟子に謂つて曰く、「吾れに四念處あり、所謂身は是れ不淨と觀じ、受は是れ苦と觀じ、心は是れ無常と觀じ、法は是れ無我と觀す」と。永平も亦四念處あり。身は是れ皮袋と觀じ、受は是れ鉢盂と觀じ、心は是れ墻壁瓦礫と觀じ、法は是れ張公酒を喫すれば、李翁醉ふと觀す」と。師曰く、「釋迦老子に同じからず、永平師翁に同じからず、山僧も亦四念處あり。且く道へ、大衆作麼生か是れ身念處。盡十方世界眞實人體、作麼生か是れ受念處。大海元衆流を辭せず、作麼生か是れ心念處。」

山河大地日月星辰、作麼生か是れ法念處。説似

① 一片の白雲……盡く巢に迷ふ。類聚卷一に、洛浦安禪師の語として出づ。僧問ふ、「百千諸佛に供養するは一無心道人に供養するに如かずと、未審し百千の諸佛何の過か有る、無心の道人何の徳か有る。」師云く、「一片の白雲谷口に横はり、幾多の歸鳥盡く巢に迷ふ。」

② 歸鳥。塔に歸る鳥をいふ。

③ 弟子。門人、門弟、徒弟に同じ、學は師の後にあるが故に弟といひ、解は師に依りて生ずるが故に子といふ、即ち教を受くるもの、稱。

④ 四念處。四念住又は四意止ともいふ。三十七品菩提分法の一、心念を一點に集注し、之に依りて雜念の起るを防ぎて眞理を得るに勉むる方法をいふ、心、受、身、法は是れなり。身念處とは身體の不淨を觀す

一物即不中、諸の心數に涉らず、向上の一句又作麼生。良久して曰く、「一念無念、念々不住、參。」

上堂、一毫衆穴を穿ち、大地遮欄なし。

古今本向背なし、縱奪更に休歇せず。或時は

佛土に遊び、或時は魔宮に入り、或時は平坦路上を過ぎ、或時は荆棘林中に臥す。且く

道へ、現前の大衆、而今卓立する處、是れ平坦路なりや、是れ荆棘林なりや、試みに道へ看ん。

若し會得せば、汝に一隻の行脚眼を許さん。

若し然らずんば、寒暑ありて君が壽を促め、鬼神ありて君が福を妬まん。

上堂、山を隔て、煙を見て、是れ火なることを知り、壙を隔て、角を見て、是れ牛なることを知る。春は自ら百花明々、誰か疑はん本來

るをいひ、受念處とは領受の好惡の事は悉く苦なりと観するをいひ、心念處とは心の生滅無常を觀するをいひ、法念處とは一切諸法皆無我なりと觀するをいふ。

鉢盂。單に鉢とも盂ともいふ、應量器のこと。比丘世の檀施を受くるに資身の用具なり。

張公酒を喫すれば李翁醉ふ。此の語雲門廣錄室中語要部等に見ゆ、張も李も支那に於ける姓なり。八公酒を飲めば、熊公醉ふ」といふ程の語。

師翁。師の師を稱していふ。義雲の師は寂圓、その師は道元禪師なれば、今永平師翁とは道元禪師を指すなり。

盡十方世界眞實人體。此れ玄沙の語、會元八慧球寂章禪師章に出づ。

大海元衆流を辭せず。戰國策に云く、「太山は土壤を讀らず、故に能く其の大を成す、河海は細流を擲ばず、故に能く其の深きに就く、王者は衆庶を御けず、故に能く其の徳を明かにす」とあり。

山河大地日月星辰。鴻仰の語、會元第九に出づ、正法眼藏身心學道の卷等にも之を引けり。

説似一物云々。五燈會元の公案なり。南嶽、曹谿に六祖に參す、祖問ふ、「甚麼の處より來る、」曰く、「嵩山より來る。」祖曰く、「其物か、恁麼來、」師、無語、遂に八載を経て忽然として省あり、乃ち祖に白して曰く、「某甲箇の會處あり、」祖曰く、「作麼生、」師曰く、「説似一物即不中、」祖曰く、「還つて修證を假るや否や、」師曰く、「修證は無きにあ

もの、即ち認識の根本の意なり。

森羅。森羅萬象の略、天地の間に森羅羅列なる一切の現象をいふ。

境。六識認識の對境をいふ。

體悉。體得悉知の意、即ち自己の身心に徹して明了に領悟すること。

萬古碧潭云々。同案蔡十支談轉位結句なり。

撈摝は水中に没入して物を取ることなり。

閉爐。閉爐に對す、僧堂其の他諸寮内の火爐に蓋をして閉鎖すること。閉爐は陰曆二月朔日、今は三月一日に之を行ふ。

世界の潤きが如く古鏡の景に同じ。これ雪峰の語因縁なり、會元七玄沙章に出づ。眼藏古鏡卷に之を引けり、雪峰云く、世界潤きこと一尺、古鏡

心、秋は自ら清風、風颯須らく、祖師道なることを悟るべし。虚空

是れ根、森羅是れ境。根と境と猶ほ鏡上の痕の如し。明鏡元

瑕なし、畢竟作麼生か體悉せん。良久して

曰く、「萬古碧潭空界の月、再三撈摝して始めて應に知るべし。」

閉爐上堂、有時は口を開いて炎熱を吐き

有時は頂を覆ふて寒灰を鬪る。世界の潤きを

らす、染汚は即ち得ず。」

心數。心心所法をいふ、慮知念覺といふも同じ。

一毫衆穴……木向背なし。圓悟錄一に類似の語句あり。

遮欄。欄は「てすり」のこと、輪廓即ち「かこひ」の意なり。

佛土。佛の住み玉ふ國土の義。

荆棘林。いばら、からたちの類の叢生せる林の意、煩惱妄想の邪見に喩ふるを常とす、人觸るれば忽ち傷く。

一隻の行脚眼。一隻は「片方」の義、雙眼は何人も具する所、更に左右に偏せざるの意にて一隻眼は一種の卓見卓識のこと。行脚とは本師の膝下を離れ、善友良師を尋れて諸國を遊行し、山川を跋渉するをいふ、即ち修行のことなり。今一隻の行脚眼とは活修行眼といふ程の意なり。

寒暑有りて以下の二句。黃龍慧南の語。

鬼神。二義あり、一は人の死したるをいひ、二は極めて自在力を有するものをいふ。後者に又二あり、一は善鬼神にして善法を護持し、國土を守護する梵天帝釋龍王等、二は惡鬼神にして夜叉、羅刹等の如き惡行を恣にして人畜を害する者をいふ、今はその惡鬼神なり。

山を隔て……牛なることを知る。涅槃經第十七相貌見を釋するに此の語あり、蓋し影を見て形を知り、小分に依りて全分を知るをいふなり。

颯々。風の聲なり。

祖師道。又單に祖道ともいひ、祖師の教をいふ。佛道といふも同じ。

根。六識の所依となりて六識を起し、對境を認識せしむる

が如く、古鏡の量に同じ。且く道へ、大衆而今
什麼の圖をか現成す。良久して曰く、「夜半靴
を穿ち去り、天明に帽を戴いて歸る。」

上堂、^①橋木の質、^②死灰の心。^③眼睛露塵、

鼻孔業垂。^④把定すれば萬象象なく、^⑤放行す
れば全手手なし。^⑥動靜の二相了然として生ぜ

す。既に恁麼に無生なることを得たり。甚と

爲てか諸人而今上堂、^⑦立地、^⑧箇の什麼の法をか

聽き、^⑨箇の什麼の心をか證契す。還つて委悉せ

んと要すや。良久して曰く、「^⑩動容古路に揚り、

悄然の機に墮せず。」

佛涅槃上堂、^⑪向上二千餘、^⑫白、^⑬花萎み風悲し

む。^⑭直下一念萬年、^⑮雲慘み水咽ぶ。不傳の一

路、^⑯千聖も奈何ともせず。付屬有在諸人、^⑰便宜

を得たり。所以に道ふ、若し滅度と道はば、

す。楞嚴六の語、云く、「初め
閑中に於て、流を入へして所
を亡す、所入既に寂にして動
靜の二相了然として生ぜず。」

無生。世間生滅の相を離れた
るをいふ。

立地。露地の上に立つて聽法
するをいふ。

動容以下の二句。香嚴閑禪師
擊竹悟道頌中の二句なり、云

く、「一擊所知を忘す、更に修
持を假らず、動容古路を揚ぐ、

悄然の機に墮せず云々。」會元

九師の傳に出で、眼藏溪聲山

色の卷に引用せり。

悄然。静かなる貌。

白は西天の曆時にして一年を
一白と稱す。

便宜。便利の義にて自由の
意。

所以に道ふ。類聚の遷化門に
云く、「世尊涅槃會上に於て手
を以て胸を壓て衆に告げて云

弟子眷屬にあらず、非滅度と謂はゞ、弟子眷屬

にあらず。大衆釋迦老子と相見せんと要す

や。拂子を豎て、云く、「相見了や。畢竟作麼

生。」良久して云く、「^①迦葉曾て雙足を禮す。」

結夏上堂、^②九句の繩、^③墨長短にあらず、

曲直縱横功業新なり。木馬泥牛混雜する處、

風に嘶き月に吼えて力耕親し。諸禪德、^④摩竭

の掩室、^⑤少林の面壁、^⑥什麼の意旨かある。良

久して云く、「^⑦一粒荒田にあり、^⑧耘らざるに苗

自ら秀づ。」

上堂、^⑨諸聖の慕ふべきなく、^⑩己靈の重んず

べきなし。虚空即ち是れ色、^⑪大地卻つて塵に非

す。薰風林岳に生じ、^⑫梅雨簷頭に滴るが如きは、

卻つて色塵と爲さんや、^⑬卻つて虚空と爲さんや。

古人云く、「^⑭雨何れより來り、^⑮風何の色をか作

潤きこと一尺、世界潤きこと

一丈、古鏡潤きこと一丈、時

に玄沙火爐を指して云く、火

爐潤きこと多少ぞ、峰云く、

古鏡の潤きが如し、玄沙云

く、老和尚の脚眼、未だ地に

點ぜざる在り。」

夜半以下の二句。永平録四に

出づる上堂語なり。

橋木は生意なきをいひ、死灰

は心起らざるをいふ。莊子齊

物論に云く、「形は固に橋木の

如くならしむべし、心は固に

死灰の如くならしむべし。」

眼睛露塵。眼睛は「目の玉」の

こと、露塵は字彙に「迅雷な

り」とあり。

把定。把住に同じ、放行に對

し取つて動かざるの義、俗に

「取りきめる」といふこと。

放行。把住に對す、「はなち

やる」の義。

動靜の二相了然として生ぜ

く、汝等善く我が紫磨金色の

身を製せよ、瞻仰取足して後

悔せしむること勿れ、若し我

れ滅度すと謂はゞ吾が弟子に

非ず、若し我れ滅度せずと謂

はゞ、亦吾が弟子に非ずと、時

に百萬億の衆悉く皆契悟す。」

相見。對面すること。

迦葉曾つて雙足を禮す。菩薩

處胎經に云く、「佛涅槃の日、

迦葉最後に至る、佛雙足を示

す云々」と。此の因縁、後分

涅槃經卷下に詳かなり。

結夏。又結制ともいふ、夏期

九句を一夏といふ、一夏安居

の制を結ぶをいふ、普通四月

十五日より七月十五日に至

る。

九句の繩。九句は九十日、

繩墨は制規、規約のこと。永平

廣錄八結夏小參に云く、「慈航

和尚云く、九十の梵期明日よ

り始む、繩墨外邊を以て行く

こと莫れしと。

摩竭の掩室とは、摩竭は往昔

中印度の國名なり。諸佛要集

經に云く、「四部の弟子各佛處

に詣り、法を聞かんと欲すと

雖も、專精なること能はず、

五濁を追覓し、以て事業を爲

す、佛阿難に告げたまはく、

我れ因沙舊窟に入りて宴坐す

ること、三月なるべし、若し

人爾所に來到せば、汝當に是

の如く説くべし、教法は過ふ

こと難し、了義も亦難し、人

身得難し、經道は希有なり、

如來、世の興りて劫數なるに

出づと。乃ち室を掩ふて三月

出でず、意は眞實の法は口舌

言語を以て説示すべからざる

ことを云ふ。

少林の面壁。五燈會元一に云

く、「達磨、嵩山少林寺に寓止

し、面壁して坐す、終日默然、

人之を測る無し、之を塵觀婆

す」と。大衆、試みに斷じ看ん。若し道ふことを得ずんば、^①拄杖子代つて一轉語せん。卓一下して云く、「色空而今什麼の處にかある。」^②新舊、維那に謝する上堂、^③鉗鎚掌握の中に轉じて、有を摧き無を摧き、佛祖舉唱の處に來つて、模を作し様を作す。朝打三千、進前して功を成し、暮打八百、退後して位に就く。然も恁麼なりと雖も、新舊絶待、前後際斷、甚と爲てか箇の通路あらん。良久して云く、「偏正會て本位を離れず、無生那ぞ因縁を語るに涉らん。」

上堂、^④松は自ら直く、棘は自ら曲れり。日暖かにして霜を銷し、月冷かにして露を結ぶ。^⑤一靈常住の性、什麼の處に於てか見得せん。^⑥是法平等、無有高下、是れ心一齊。何の曲直

① 一粒。傳燈十六樂音の章に云く、「僧問ふ、如何なるは是れ本來の事、師曰く、「一粒」と、其の意知るべし。
② 語聖以下の二句。傳燈青原傳中に石頭希遷の語として見ゆ。己靈は自己の性靈の義、常一主宰の一物を自己身中に求むること。
③ 古人云く。事苑三に、「劉禹端公、雨を雲居山に求めて感應あり、遂に雲居僧に問ふて云く、雨何より來る、居云く、端公の問處より來る云々。」又「西禪の東平、官員と坐するの次、西禪云く、風何の色をか作すや、官無語云々。」「響實此の話を頌して云く、風作の色をなし、雨何れより來ると。」祖英集の上に見ゆ。
④ 拄杖子。子は助辭、僧の持つ杖のこと。

⑤ 一轉語。進退維谷まりたる處に至つて、自由に身を轉廻するの一語、又は一語にて他をして轉迷開悟せしむる語句をいふ。
⑥ 色空。色とは質礙の義にして總て有形的物質をいふ、空は空無の義にして、何物も存在せざる處、即ち實體なく自性なきをいふ。
⑦ 維那。維は綱維の義にて、僧衆を統ぶるをいひ、那は梵語羯磨陀那の略にして知事、授事と譯す、僧衆の雜事を司り及び之を指授する義にて、梵漢兼舉の名なり。日本禪林にては六知事の一にて、重大なる役なり、舉唱、同向等も掌る。
⑧ 鉗鎚。鉗は金を狭むもの、鎚は金鎚のこと。嚴治屋にて嚴を鍛へるには、鐵を火に焼き、金狭みにて之を狭み、金

かあらん。諸禪德、^①者箇の道理を委悉せんと要すや。良久して云く、「深山大小石頭滑かなり、綠水白雲流不流。」

上堂、心は覺知にあらず、^②蕩々乎として大虚の如し。法は見聞を離る、^③巍々乎として倫匹なし。高うして窮むべからず、深うして到り難し。然も恁麼なりと雖も、把れば則ち掌握の中を出でず、^④放てば則ち塵刹の外に遍し。大衆者箇の道理を體悉せんと要すや。良久して云く、「無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識なし。」

冬至上堂、^⑤浮虚境上、^⑥暑運推し移り、^⑦枯木岩前、龍吟忽ち起る。陽曲初めて報じ、^⑧蟄類密かに動く。然も是の如くなりと雖も、實際の理地、一塵を受けず。^⑨建化門頭、模を作

臺の上に載せ、金鎚を以て打つて鍛ふるなり。今は師家が學人を鍛錬する手段に喩ふ。
① 前後際斷。前後際斷の念を斷絶すること、一切對待の念を裁斷するをいふ。
② 偏正以下の二句。宏智錄中に往々之れ有り、蓋し古語也。偏とは偏頗の意にて起滅變幻極りなき差別の現象界をいひ、正は平等の義にて平等一如の本體界をいふ。
③ 松は直く棘は曲れり。以下の四句は天真妙契の現成公案を明すなり。棘は「いばら」なり。首楞嚴第五に云く、「現前種々の松は直く棘は曲れり、鶴の白き鳥の玄きも皆元由を了す。」
④ 一靈常住の性。丹霞敲鉢の吟の句、靈妙なる佛性を指す。
⑤ 是法平等、無有高下。此れ金剛經の文なり。

⑥ 者箇。者に此の義、遺蹟と同じく「この」の意なり。
⑦ 深山大小石。會元は歸宗道詮禪師草の語因縁、僧問ふ、九峰石中遺つて佛法有りや也た無なや、師云く、有り、曰く、如何なるか、是れ九峰山中の佛法、師曰く、石頭大底は大、小底は小。
⑧ 蕩々乎。廣遠の貌。
⑨ 巍々乎。高大の貌。
⑩ 塵刹。塵は微塵、刹は國土の義、極めて微細なる國土の意、又多般の國土の義。正法眼藏看經の卷に「若田若里の流布あり、塵刹の演出あり、虚空の開講あり」と。
⑪ 無影樹下以下の二句。南陽慧忠國師の法嗣耽源山應真禪師の頌中の句、云く、「湘の南潭の北、中に黄金有つて一國に充つ、無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識無し。」

し様を作す。畢竟如何が體取せん。良久して云く、「死中に活し得たり。」

雪に因つて上堂、千差の岐路を踏断して、方に

直下に承當することを得たり。他を瞞す

ること一點も得ず、自己の家郷に遊踐す。恁麼

の時に當つて、法々位を離れず、歩々方に迷は

ず。彼此同じく、槃迦羅眼を開き、自他等しく

知見香を具す。既に恁麼の田地に到ることを得

て、還つて同見同般底の證據ありや也た否や。

良久して云く、「謂ふことなかれ。吾が家寶貝な

しと。満床盡く撒す雪の珍珠。」

佛成道上堂、擧す、古徳云く、「瞿曇

眼睛を打失する時、雪裡の梅花只だ一枝、而今

到る處荆棘と成る。卻つて笑ふ春風、繚亂と

して吹く」と。師云く、「梅樹歳寒うして自ら時

①冬至。二十四氣の一、陽曆十二月廿二日頃。

②浮虚境。日月運行の地をいふ、宏智録四冬至上堂の語。

③昇運。暑は日影のこと。會元九、鴻山上堂の語。

④枯木龍吟。龍吟は枯木に風の吹いて鳴る聲のこと、死中活を得るに喩ふ。傳燈十一香嚴智閑の語。

⑤建化門とは化門を建立することなり、乃ち衆生教化の門を開き、一切衆生を救済化導することを云ふ。

⑥直下。當下に同じ、直ちにの意。

⑦承當。自ら會得領悟するをいふ。

⑧槃迦羅眼。梵語、斫羯羅或は斫羯羅に作る、金剛又は堅固と譯す、意知るべし。

⑨吾家寶貝なし。石頭草庵歌の語、云く「吾れ草庵を結んで

寶貝なし、飯了從容として睡快を圖る。」

⑩満床盡く撒す雪の珍珠。此の語古尊宿語録に見ゆ。揚岐會禪師上堂に云く「揚岐乍住寸屋壁疎、満床盡く撒す雪の珍珠。」

⑪佛成道。佛成道會の時、三佛會の一、臘月八日なり。釋尊菩提樹下に坐し、諸魔を降服して廓然大悟、一切智を得、無上道を成じ玉ふをいふ。

⑫古徳。天童如淨禪師を指す、師臘八上堂に以下四句の語あり、高祖亦眼藏梅華眼睛繚亂に此の語を引き玉ふ。

⑬瞿曇。梵語又喬答摩といふ、地最勝と譯す、大地上即ち地球上にあつて最勝なるの意、釋尊の稱。

⑭繚亂。まづはりみだるゝ、と。

⑮陽春の曲。文選の中に見ゆ。

あり、芳心偷に綻ぶ舊年の枝。春に先つて漏泄す陽春の曲。黄面自ら鐵笛を横へて吹く。

歲旦上堂、擧す、宏智禪師云く、「歲朝坐禪、

萬事自然、心々絶待、佛々現前。清白十分江

上の雪、謝郎滿意釣魚の船。師云く、「年朝禪

を會す、衲子泰然、萬物慶あり、十方目前。

山上同じく看る梅と雪。江邊月を載す謝郎の

船。」

新舊兩班に謝する上堂、尋常一面の古鏡

を用つて、胡漢現じ來つて曾て妨げず、賓主舊新

異轍なし。驀頭に相見して各承當す。

上堂、青皇令極つて、綠陰花尚ほ香し、赤

帝位新たにして、薰風氣火を合む。時節不言恁

麼に代謝す。且く大衆に問ふ、空劫已前の

高尙なる歌なりといふ。

①黄面。釋尊の稱、釋尊は金色身なるが故にいふ。

②宏智禪師。明州天童山に住す、字は正覺、宏智は諡號なり、字は正覺、宏智は諡號なり、鄞州丹霞の子淳に就いて法を受け、眞歇清了と並び稱せらる、宋の紹興二十七年寂す、壽六十七、語録六卷あり、就中頌古最も有名なり。

③清白とは清廉潔白なること、後漢の楊震の故事より出づ。

④曹洞宗は只管打坐して悟を求めず、佛を求めざる宗風なるが故に、清白家とも稱せり。

⑤謝郎は玄沙の師備を指す。支那青原下の僧にして、姓は謝氏、少時釣魚を事とせる故事あり。

⑥衲子。衲僧に同じ、衲は衲衣の義、子は者の義、即ち衲衣を著せる者の意にして、専ら禪僧のことをいふ。

⑦兩班。班は列の義にして兩班に同じ、東序及び西序のこと、東序は知事、西序は頭首の坐位なり、今は兩班といひて直ちに兩班の人をいふなり。

⑧古鏡。雪峰の語因縁、會元七支沙傳に云く、雪峰上堂に云く、此の事を會せんと要せば、猶ほ古鏡の臺に當るが如し、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す云々。

⑨青皇、赤帝。青皇は青帝又は東帝といふ春を掌る神なり、赤帝は炎帝ともいふ、夏を掌る神なり。尙書註に云く、「天に五帝有り、謂く青帝、赤帝、白帝、黃帝、黑帝なり、青帝は東方の帝、赤帝は南方の帝なり。」

⑩代謝。文選註に云く、「來るを代と曰ひ、去るを謝といふ、夏歳きて秋來る、故に代とい

⑤ 公案子、恁麼に改轉すや也た無しや。聲色邊に向つて眼を著くること莫れ。豈に見ざらんや、風穴和尚因に念眞の二上座俱に方丈に詣る。穴、眞に問うて曰く、「如何なるか是れ世尊不説の説。」眞云く、「鶉鳩、樹頭に鳴く。」穴曰く、「汝許多の癡福を作して何の用ぞ。」乃ち念を顧みて曰く、「云何」と。念云く、「動容古路に揚る。悄然の機に墮せず」と。穴、眞に謂つて曰く、「渠が語を聞くや」と。師云く、「大衆、首山、風穴に契ふ底の意旨を會せんと要すや。」良久して云く、「鄺中隱形の術ありと雖も、争か似かん全身の帝郷に入らんには。」

結夏上堂、我れ住すれば則ち汝も同じく住し、我れ行かば亦汝も共に行く。諸佛の要機を拈打得して而して結制し、祖師の心印を拈

ひ、秋來つて夏退く、故に爾と曰ふ。」

⑥ 空劫已前。空劫は前に註するが如し、空劫已前とは朕光以前、父母未生以前といふに同じ、天地の開くる以前の意。

⑦ 公案子。子は助字、公案は中峰の山房夜話に云く、「公案は乃ち公府の案牘に喩ふ、牘や法の所在にして王道の治亂實に焉に係る、夫れ公は乃ち聖賢の牘、其の轍を一にし天下其の途を同じうするの至理なり、案は乃ち聖賢、理たるの文を起す、凡そ天下を有する者は未だ嘗つて公府なくんばならず、公府有る者は未だ嘗て案牘なくんばならず、蓋し取つて以て法となし、天下の不正を斷たんと欲すればなり。」

⑧ 聲色邊。聲色とは色聲香味觸法の六塵の中初めの二を擧げ

て、他の四を攝す、一切萬境の意なり。

⑨ 風穴和尚。支那河南省汝州風穴寺延沼禪師、南院慧顛の法嗣。

⑩ 念眞二上座。念は汝州首山の省念禪師、眞は汝州廣慧の眞禪師、共に風穴の法嗣。上座は上席の義にして、沙門中の老宿の尊稱なれど、今は阿毘達磨集異門足論の法性の上座にして、出家して具足戒を受けたるもの、稱。

⑪ 方丈。方一丈の居室の意にて、寺院住持の居處をいふ。

⑫ 鶉は鳩なり、「いへば」となり。

⑬ 鄺中。城邑中なり。

⑭ 諸佛の要機。要機は要妙なる支機の義にして、妙法といふ程の意なり。

⑮ 拈打。打は助字、得るの意。

⑯ 結制。結夏に同じ、九旬安居

提して而して護生す。山高うして雲の倚ることを礙へず。父の如く子の如し。谷虚にして聲に應ずる響あり。弟たり兄たり。既に恁麼に和同することを得て、還つて什麼の行履かあらん。良久して云く、「瓊樹寸々の寶、梅檀片片馨し。」

上堂、父母は我が親にあらず、諸佛は我が道にあらず。箇中の意を識らんと要せば、父少にして子老いたり。記得す、南泉云く、「王老师、十八上に作活計を解す。」趙州云く、「老僧十八上に破家散宅を解す」と。師云く、「父子二老の解處如何が辨取せん。南泉は臂長うして衫袖短し、鬼神に覷見せらる。趙州は身貧に心儉にして卓錫の處なし。薦福は然らず。十八上已前發心發足、十八上已後大悟放行。正

の制を結ぶこと。

① 祖師の心印。祖師の證得せられたる心印のこと、佛の證得せられたる佛心印に對す、但し此の二決して別なるに非ず、人心本來具有の妙心をいふ。心印とは、宗鏡錄に、「佛祖の法中は昔心を以て印となして、萬法を楷定す」といへり。

② 拈提。拈は「つまむ」、提は「ひつまぐ」と訓す。

③ 護生。安居禁足して昆蟲等を殺さざること。

④ 如父如子。洞山錄に云く、「青山は白雲の父、白雲は青山の兒、白雲終日青山に倚つて相知らず」とあり。

⑤ 行履。日用の行狀全體をいふ、行は躬行、履は履踐の意なり。

⑥ 瓊樹。瓊は美玉、梅檀は雲南瓜哇等の熱帶地方に産する香木の名、抜類十五珍寶門に云く、「大嶺禪師に問ふ、如何なるは是れ一切處清淨、師云く、瓊枝を截れば寸寸是れ寶、梅檀を拆げば片々皆香。」

⑦ 父母以下の二句。傳燈第一伏歇密多の偈に見えたり。

⑧ 父少子老。妙經五卷涌出品に出づる語。文句第九、眼藏轉法華卷等に引用す。

⑨ 南泉。池陽南泉の普願禪師、馬祖道一の法嗣、次の語は正宗贊に出づ。

⑩ 王老师は南泉の俗姓王氏なりしを以て、常に自ら王老师と稱せり、後人南泉を呼ぶに王老师を以てすること此れより起る。

⑪ 十八上。根、境、識の十八界をいふ。

⑫ 趙州。支那直隸省趙州觀音院從諗禪師、南泉普願の法嗣、次の語宗門統要第六に出づ。

當十八上^①一切智々を解す。且く問ふ、大衆、古人の解處と薦福の悟處と、是れ同か是れ別か、試みに斷じ看ん。拂子を拈弄して云く、「如今薦福が手裡に一箭あり、諸人の十八上に向つて發せんと欲す。還つて的當を要すや。」拂子を堅起し、又擲下して云く、「虎を射て未だ了らざるに、便ち石を射る。」

上堂、萬機休罷、千聖不携、一言に相契ふ古今一揆。暗中に眼を著け、明裡に身を藏す。位を借つて功を明す、體、用處にあり。功を借つて位を明す、用、體處にあり。所以に道ふ、「君、臣位に臨むに猶ほ凝然を帶ぶ、子、父に就く時尙ほ孝養を存す。玉關未だ透らざれば、正に一色に迷ふ。寶印全く提げて、那の文彩をか露さん」と。還つて委悉せんと要すや。傍

①鬼神に觀見せらる。觀見は窺ひ見る事。傳燈八南泉傳に云く、「師明日遊を莊舎に取らんと擬す、其の夜土地神先づ莊主に報す、莊主乃ち預め爲に備ふ、師到り、莊主に問ふ、争てか老僧が来るを知つて排辨すること此の如くなる、莊主云く、昨夜土地報じて道く、和尚今日來ると、師云く、王老師修行力なく、鬼神に觀見せらる。」

②薦福。寶慶寺の山號、義雲禪師の自稱なり。

③一切智。佛陀所有の智慧にして能く一種の智慧を以て萬有の眞髓、唯一無二なるを知り、又能く萬有箇々差別を知りて遺すところなきをいふ。

④虎を射て未だ了らざるに便ち石を射る。史記及び前漢書列傳に出づる故事に據る。「西漢の李廣北平に出でて獵す、山

中の石を見、以て虎と爲し石を射る、……之を視れば石なり、因つて更に之を射るに遂に入る能はず。」

⑤萬機休罷千聖不携。萬機は心の作用なり、休罷も「やむ」なり、一切の思慮を悉く休止すること、聖は佛祖のこと、千聖とは三世歴代の佛祖をいふ、佛の一字も心田の汚れ、更に心に留めざるを不携といふ。傳燈十一「香嚴禪師に問ふ、諸聖を慕はず、已靈を重んぜざる時如何、師云く、萬機休罷、千聖不携、永平廣錄中にもあり。

⑥位を借つて以下四句。普燈第三に出づ、「芙蓉道楷和尚、上堂に云く、呼んで一句となす、已に是れ宗風を埋没す、曲げて今時と爲す、遂に通じて消耗す、所以に功を借つて位を明す、用、體處に在り、

觀の者は晒ひ、當局の者は迷ふ。

上堂、衆流大海に投じて、鹹淡味同じく、四夷一朝に歸して、君臣道合す。所以に四種主賓を分ち、五位偏正を列す。然も是の如くなりと雖も、正を立すれば則ち正の外に偏無し。五位俱に正中來、偏を立すれば則ち偏の外に正無し、萬物各偏中至。道ふことを見ずや、我れ人に逢ふては則便ち出でず、出づれば則便ち人の爲にせん。我れ人に逢ふては則便ち出でん、出でては則便ち人の爲にせずと。良久して云く、「偏正曾て本位を離れず、無生那ぞ因縁を語るに涉らん。」
上堂、白雲は山を以て父と爲し、明月は水を假つて家と爲す。未審し稍僧何を以てか父と爲し、何を以てか家と爲さん。道ふことを

位を借つて功を明す、體、用處に在り。

①君臣位に……文彩をか露はさん。安智小參の語、同錄五に出づ、但し小異。

②凝然。不動の貌。

③一色。一色邊の意、法身邊といふに同じ、差別の相を混したる平等の境界をいふ。

④四夷。四方の「えびす」のこと、東夷、南蠻、北狄、西戎。四種は臨濟下の四賓主のことなり、一に、賓、主を見る、二に、主、賓を見る、三に、主、主を見る、四に、賓、賓を見る。實は學人、主は師家なり。

⑤五位偏正。洞山悟本大師所位の偏正五位なり、一に正中偏、二に偏中正、三に正中來、四に偏中至、五に兼中到なり。偏とは偏頗の意にて、起滅變遷極りなき差別の現象

界をいひ、正とは不正の意にて、平等一如の本體界をいふ。

⑥正中來。無想無念の境に到達したる所に於て、更に一切諸法の作用を顯現するをいふ、丹露禪師は之を枯木に華開くが如しといへり。

⑦偏中至。差別歷然たる現實界にありて、而もよく寂然不動の理想境に逍遙するをいふ、丹露禪師は之を評して芳叢鬱ならずといへり。

⑧道ふことを見ずや。會元十一「鎮州三聖慧然禪師上堂に云く、我れ人に逢ふては即ち出でん、出づれば則ち人の爲にせずと、便ち下座す、興化に云く、我れ人に逢ふては則ち出でず、出づれば便ち人の爲にせず。」

⑨白雲は山を……家と爲す。宏智錄一に出づ、「生々代々輪廻

見すや、從佛口生、從法化生と。既に恁麼なることを得たり、甚となしてか道ふ、返本還源事轉た差ふ。本來住することなければ家と名けず、畢竟如何。十二時中、不依倚一物。

上堂、感應道交、山呼び谷響く。因果絶待、果熟し花開く。菩提本樹なし、明鏡亦臺にあらず。毎常に異類を行す、又且つ好し輪廻するに。見すや、古徳の道く、「煩惱海中雨露と爲り、無明山上雲雷と作る」と。此に於て薦得せば、鏝湯爐炭も吹いて滅せしめ、劍樹刀山も喝して摧けしむ。

上堂、春來、薔荷の花を弄し、冬至銀椀の雪に吟す。古徳云く、「心は萬境に随つて轉ず、轉處實に能く幽なり。流に随つて性を認得すれば、喜も無く亦憂もなし」と。山に入りて

報を招引するが如し。
①菩提以下の二句は、六祖慧能の偈。

②異類を行す。異類とは己と類を異にする義にて、今は六趣を指す、發願利生の大乗の菩薩が、成佛得脱の後、涅槃の本城に安住せず、生死の迷界に却來して六道に轉廻し、機に應じ感に趣いて一切の有情を濟度するを云ふ。

③古徳の道く。次の二句は十玄談回機頌の句なり。

④煩惱海。煩惱は菩提に對す、一切衆生を迷はし惱ます然にして、心身を苦むる惡傾向をいふ、障、蓋、漏といふも皆同じ、今は海に喩ふるなり。

⑤無明山。無明は明に對す、眞理に闇きこと、即ち吾人の煩惱妄想は般若の智慧を味ますが故に、眞理を明むること能はず、されば煩惱の根本を無

の跡、窮り無し、寂々惺々眞照の機味まさず、雲は山に倚つて是れ父、箇の中功功に就く、月は水に在つて家と爲す、直下住に所住なし。」
⑥道ふことを見すや。次の二句は法華譬喻品の文なり。
⑦返本以下の二句は、十玄談破還鄉曲の頌なり。
⑧十二時中、不依倚一物。黃檗の語、會元三、南泉傳に云く、「師、黃檗に問ふ、定慧等學明見佛性と此の理如何、檗曰く、十二時中、不依倚一物。」
⑨感應道交。兩者の心互に通じて相融合するをいふ、衆生の感と佛の應と融合するが如し。

①虎兇を畏れざるは獵夫の勇なり。水に入りて蛟龍を避けざるは漁者の勇なり。白刃前に臨んで、死を見ることが生もの如くなるは將軍の勇なり。如何なるか是れ衲僧の勇。寒時は寒殺閻梨、熱時は熱殺閻梨。還つて遊戯自在の處ありや、也た無しや。百尺の竿頭、進一步退一步。

上堂、十五日巳前、月、萬像を吞却して、琢して一顆の寶珠と成る。十五日巳後、月、萬像を吐却して、鑄て幾多の明鏡を得たり。古徳云く、「心月孤圓、光萬像を吞む。光境を照すに非ず、境亦存するに非ず、光境俱に忘す、復た是れ何物ぞ」と。師曰く、「大衆光境俱に忘する時に當つて、如何が領略せん。淨智圓明、智の外に冥智の境なし、心境絶待、境外に照境

の跡、窮り無し、寂々惺々眞照の機味まさず、雲は山に倚つて是れ父、箇の中功功に就く、月は水に在つて家と爲す、直下住に所住なし。」
⑥道ふことを見すや。次の二句は法華譬喻品の文なり。
⑦返本以下の二句は、十玄談破還鄉曲の頌なり。
⑧十二時中、不依倚一物。黃檗の語、會元三、南泉傳に云く、「師、黃檗に問ふ、定慧等學明見佛性と此の理如何、檗曰く、十二時中、不依倚一物。」
⑨感應道交。兩者の心互に通じて相融合するをいふ、衆生の感と佛の應と融合するが如し。

の智なし。又道ふことを見ずや、賓主存する時、全く是れ妄、君臣合する處、正中の邪し。還つて委悉せんと要すや。木馬、泰山の頂に嘶き、泥牛海上の田に耕す。参。

當山初祖三十三回忌。隆座、師此の時永平に在り、齋に當山に赴く。香を拈じて云く、「此の 一瓣香、胸襟より拈出す。恩に酬いと欲すれば、恩還つて怨の如し。怨に報せんと欲すれば、怨亦恩に似たり。恩を超え怨を越ゆ是れ一本分。上、日月星辰の爲に光彩と作り、下、萬木百草の爲に靈根と作る。爐中に 蒸向して、先師當山初祖に供獻して、用つて 法乳の恩に酬ゆ。座に就いて乃ち云く、「萬機休罷、一物長に靈なり。太虛寂爾、霹靂轟々。未審し先師平生是れ甚の 心行ぞ。吉祥孤

家が説法する時、高座に降るをいふ。

② 一瓣香。瓣は片なり、一ひらの香のこと。

③ 燕向。燕は焼なり。

④ 法乳の恩。佛祖の恩徳の、世の小兒が慈母の乳に依りて成長するが如く、佛弟子は佛祖の教法に依りて慧命資益し来るが故に、法乳といふ。

⑤ 太虛寂爾。太虛は大虚空のこと、寂爾はさびしき貌。

⑥ 霹靂轟々。霹靂は迅雷のこと。

⑦ 未審し。未だ審かならずと訓み、疑ひ且つ問ふの語なり。

⑧ 心行。心やりといふことにて、思慮分別、或は俗にいふ了簡の意。

⑨ 吉祥孤雲嶺の風月。吉祥は永平寺の山號、今は永平道元禪師を指す、孤雲は孤雲懷辨師のこと、今初祖及び二祖の家風といふ意を風月に擬へていふなり。

⑩ 西來三周の棹。達磨、震旦に緣熟し、行化時至るを念ふて、重溟に汎び寒暑を三周して南海に達るといふ、今はそれをいふなり。

⑪ 拾遺。のこれるを拾ふこと。

⑫ 二祖。孤雲懷辨禪師のこと。

⑬ 某甲。名字の代りに用ふる語、余、我等の自稱に同じ。

⑭ 印す。印可證明の意、師家が學人の所説を點檢し、正當なるを信認し證明するをいふ。

⑮ 作禮拂袖。作禮は禮拜すること、拂袖は袖を拂ふことにて、怒つて立ち去る時の氣勢なり。

⑯ 頌。梵語伽陀の譯、元來支那に於て頌といへば、聖王明王の盛徳を頌揚する韻文をいひ、印度の經論中にある韻文又多く佛徳を頌讚せるものなるより、之を頌となせども、雜じて一般に禪門にて法意を明せる詩を頌又は偈と稱するに至り。

⑰ 新豐の曲。新豐は洞山悟本大師所住の山の名なり、これより洞山特地の佛法を音曲に擬へて新豐の曲とはいふなり。

雲嶺の風月をして、萬福深岳林の巖扉を排かしむ。此の風、西來三周の棹に隨つて滿ち、此の月南海一葦の船を逐うて來る。正恁麼の時、去來の路に涉らず、阿誰か敢て 拾遺せん。擧す。先師曾て永平に在りし時、二祖に問うて云く、「如何なるか是れ師子吼の 一音。」祖曰く、「更に外に出でず」と。師云く、「甚としてか出でざる。」祖曰く、「百獸腦裂す。」師云く、「恁麼ならば太だ益無きに似たり。」祖曰く、「一人も恩を承けざるなし。」師云く、「某甲會得す。百獸皆師子吼を作す。」祖曰く、「如何が恁麼に會す。」師云く、「萬曲是れ一聲。」祖印して曰く、「汝能く觀音入理の門に達す」と。師 作禮拂袖して嘯き去る。頌に云く、「師子吼ゆる時衆獸喪す。死中に活を得て卻つて和同す。一聲奏出す。新豐の曲。觀自在門此れより通す」と。上堂、心々異心なし、一心一切法、念々異念にあらず、一念是れ萬年。

寶慶寺語錄終

住 吉祥山 永平禪寺語錄

侍者 曇希 編

師、正和三年甲寅十二月初二日に於て入院す。

山門、金鶏曉を報じ、解脫門開く。依然として歩を引く、脚下風雷。

佛殿、世尊に密語あり、長舌唇を離れず。迦葉覆藏せず、家國茲より富めり。安樂兜率、左方右邊。

據室、一尺の水一丈の波、中に於て能く巴歌を唱ふ。毘耶の小神通を勘破し了れり。詩如の閑座今什麼にか在る。縦横擬議を容

① 吉祥山は永平寺の山號なり、越前吉田郡志比谷村にあり、初め波多野雲州太守義重井に左金吾禪門覺念等相謀つて市野山の東、余松の西に一寺を建立し余松峰大佛寺と稱す、後寛元四年六月十五日大佛寺を改むると共に、余松峰を改めて吉祥山となす、高祖進院の日、山中瑞氣霏然たり、故に山を吉祥と號すと。
② 永平禪寺、曹洞宗の大本山なり、道元禪師の開山に係る。
③ 曇希、義雲唯一の法嗣、永平及び寶慶に住す。
④ 正和。本邦人皇九十四代花園帝の曆號。
⑤ 山門。寺院に於ける總門をいふ、山門の制は左右中の三門を並列して一門を作るが故に三門とも書く。
⑥ 解脫門。一切の束縛を離れ、苦惱を脱したる自由無礙の處のこと。解脫の境に入るを門に入るに喩へて門といふ。
⑦ 佛殿。佛菩薩の像を奉安する堂なり、法堂の前にあるを通制とす。
⑧ 世尊。佛十號の一、釋尊の異稱なり、蓋し佛は三體を圓具

れず、亦是れ 葛藤舊窠。陸座、祝聖罷つて、又香を拈じて云く、「此の香佛々の鼻孔を穿鑿して、混沌未分の靈薰を通じ、祖々の髓皮を包容して、兒孫繁茂の根帯を全うす。爐中に燕向して、薦福開山圓和尙大禪師に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

提綱、(問答錄せず) 半路にして 新豐の吟を作し、驀頭に空劫の身を轉す。谷は聲に應ずるの響を含み、山は寂を愛するの人に屬す。腦後に踵を繼いで故を温ね、目前對を亡じて新しきを知る。孤輪高く耀いて 寰中夜ならず。五葉凋ますして 劫外の春に逢ふ。若し又此に於て薦取せば、懷甕の愚も是れ外にあらず、桔槔の巧も必ずしも親しからず。動容本來の地を出でず、誰か清空に向つて客塵を拂は

して世間を利するが故に、世間善く之を尊重するが故に此の語あるなり。
① 密語。密は秘密の密に非ず、親密の密なり、説く所悉く宇宙の眞理諸法の實相と一體無二なるが故にいふ、又能説所説能所なきが故にいふ。古徳の偈に、「世尊に密語あり、迦葉曾て藏さず、一夜落花の雨、滿城流れ香し」とあり。
② 安樂兜率、左方右邊。永平寺佛殿の本尊は三世佛の故に斯くいふなり、安樂は過去佛阿彌陀如來の居處西方安樂世界の事、兜率は未來彌勒菩薩の居處なり。
③ 據室。新命の住持、方丈室に據るをいふ。
④ 巴歌。西漢書註に云く、「巴は巴人なり、高祖初めて漢王と爲るに、巴俞の人を得、井に懸徒にして善く聞ふ、之と三

ん。祖々此に於て大佛事を作し、佛々此に於て大法輪を轉す。山僧此に於て開堂演法す。作麼生か佛祖と相見せん。明月空に満ちて天水淨し、弟兄俱に合同船に在り。復た擧す、百丈因に僧問ふ、「如何なるか是れ奇特の事。」丈云く、「獨坐大雄峰」と。天童淨和尚拈じて曰く、「大衆動著せず、且つ者の漢を坐殺せしむ。

はれざる貌にて、天地未開の様子をいふ。
① 靈薰。靈は神なり、不思議の意、薰は薰氣なり。
② 根蒂。根は木なり、花の根を蒂といふ、今は根底といふ程の意。
③ 提綱。提要、又は提唱ともいふ、宗師上堂して大衆に宗旨の綱を提示すること。勅修清規開堂に、「住持、垂語、問答、提綱」とあり。
④ 新豐の吟を作す。洞山所作の新豐吟を作すといふ意には非ず、今は只だ古曲を奏すると云ふ程の意に見るべし。
⑤ 對。對待又は對境の義、俗に「相手」といふ程の意。
⑥ 孤輪。月のこと。
⑦ 寶中。猶ほ寶内といふが如し、天子の畿内のこと。
⑧ 劫外の春。劫外とは成住壞空の四劫といふこと、陰陽不到

の春光、即ち常住不變の別天地の意。
⑨ 懷箋。結棹(はれつるべ)、莊子天地篇に曰く、「子貢南の方楚に遊んで晋に反る、漢陰を過ぐるに、一丈の人將に圃畦を爲らんとす、隣を鑿つて井に入れ、甕を抱いて出で灌ぐを見る。子貢曰く、此に機有り、一日百畦を灌ぐ、力を用ふることも甚だ寡うして功を見ること多し、夫子欲せざるか、圃を爲る者、仰いで之を見て曰く、奈何ん、曰く、木を鑿つて機を爲る、其の名を棹と爲す、圃を爲る者忿然として色を作して笑つて曰く、吾れ之を吾が師に聞けり云々。」
⑩ 法輪を轉す。說法すること、輪は車輪の義、車輪の運轉する時は、能く一切の物を撞破す、佛祖の說法能く衆生の邪見を破するに喩ふ、又車の轉

するや、物を運載して此より彼に至らしむ、佛祖の說法能く衆生をして聖境に入らしむるに喩ふ。
⑪ 百丈。百丈山懷海禪師、馬祖道一の法嗣、天童に移過して喫飯す、此の句如淨錄下卷に見ゆ。
⑫ 奇特。奇は不思議、特は特別義、奇異特妙といふこと。
⑬ 獨坐大雄峰。大雄峰は百丈山のこと、獨り大雄峰に坐するの意にて、獨立尊貴の様子をいふ。
⑭ 天童淨和尚。支那浙江省寧波府鄞縣天童山長翁如淨禪師のこと、道元禪師の師なり。
⑮ 淨慈。淨慈寺のこと、支那浙江省杭州城外西湖畔にあり、如淨禪師天童住山迄此に居る。
⑯ 鉢盂。應量器のこと、比丘世の禮儀を受くるに資する用具

今日忽ち人あつて、淨上座に如何なるか是れ奇特の事と問はゞ、只だ他に向つて道はん、甚の奇特かあると。畢竟如何。淨慈の鉢盂天童に移過して、喫飯す」と。師曰く、「即今人あり、山僧に奇特の事を問はゞ、他に對して道はん、一枝の藤、人を打つに力あり、一瓶の水受用窮りなしと。」

上堂、十方壁落なし、從來遮欄を絶す。四面亦無門、這裡是れ入處。眼睛を瞎却して、七佛諸祖と相見し、言理に分明にして燈籠。露柱と談論す。恁麼の時に當つて、頑石點頭し、草木現瑞す。見すや、僧、仰山に問うて曰く、「法身還つて說法を解すや也た無しや。」山云く、「我れ説くことを得ず、別に人の説き得るあり。」僧曰く、「説き得る底の人甚れの

たり、食器。
① 十方以下の四句、宏智廣錄一に見ゆ、小卷に云く、兄弟十方壁落無く、從本來もと遮欄なし、四面亦門無く、祇だ者裡是れ入處。
② 這裡。這は「此」と同じ、這裡は「こゝ」といふ程の意なり。
③ 瞎却。瞎は盲目の意、却は助字、盲目にするといふこと。
④ 七佛。過去七佛のこと、一毘婆尸佛、二尸棄佛、三毘舍浮佛、四拘留孫佛、五拘那含牟尼佛、六迦葉佛、七釋迦牟尼佛なり、前三を過去莊嚴劫の三佛といひ、後四を現在賢劫の四佛といふ。
⑤ 露柱。法堂佛殿等にある九柱のこと。
⑥ 頑石點頭。十八賢傳に云く、「道生虎丘山に入り、石を衆めて徒となし、涅槃經を講ず、……群石皆點頭す」と。

① 仰山。支那江西省遂州仰山慧寂禪師、鴻山靈祐の法嗣、此の問答傳燈十一仰山章に出づ。
② 法身。法身に三意あれど、今は生身の菩薩に對して肉體の繫縛を離れ、靈覺を體とせる菩薩をいふ。
③ 杖子。子は助字、寢具の杖のこと。
④ 鴻山。支那湖南省長沙府寧鄉鴻山の靈祐禪師のこと、百丈懷海の法嗣。
⑤ 寂子。仰山を指す、仰山の名は慧寂なればかくいふなり。
⑥ 越山云々の二句、雲巖重顯の語。祖英集下送僧に云く、「春風颺々として花正に飛ぶ、紅霞碧靄高低を籠む、越山日暮少林の客、應に聽くべし子規の深夜に啼くことを。」但し今は永平寺越州にあるが故に、義雲禪師自らのものとしての

處にか在る。「山乃ち、杖子を推出す。瀧山聞いて乃ち云く、「寂子劍刃上の事を用ふ」と。且く道へ、永平門下還つて恁麼に説得し、恁麼に聞得すや。良久して云く、「越山日暮少林の客、應に聴くべし。子規の深夜に啼くことを。」

上堂、當山初祖衆に示して云く、「向上の一路、玲瓏八面、當陽の要機、全身擔ひ來る。是は乃ち金鉢掩ひ難し、非は乃ち玉石俱に焚く。擬議して進まざれば、盡界粉碎す。總に不恁麼、又且つ如何。」良久して云く、「是非娘生の口に掛けす、自ら傍觀の短長を論するあり。大衆、初祖の道處を會せんと要すや。一條の拄杖天地を拄ふ。更に阿誰をかして短長を論せしめん。」

頌出なり。

- ① 子規。ほととぎす、禽經に、「江左に子規と曰ひ、蜀右に杜宇と曰ふ」といへり。三四月の間に於て夜啼き旦に達るといふ。
- ② 向上の一路。言語思慮の及ばざる最上の一路といふことにて、向上宗乘の事、或は向上極則の事など同意なり。
- ③ 玲瓏八面。玲瓏は珠の朗らかに透き通りたる貌、四方八面通達無礙なるをいふ。
- ④ 當陽の要機。當陽は「天子朝に臨むをいふ」とあり、今は當面といふ程の意なり、要機は要妙なる支機の義にして、妙法といふ程の意なり。
- ⑤ 不恁麼。今は不是の意。
- ⑥ 娘生の口。娘は母の通稱、父母所生の口といふも同じ。
- ⑦ 靈。神妙不可思議の義。
- ⑧ 明々。明かなる貌、了々も同じ。

- ⑨ 祖意。教意に對す、祖師意の略、祖師とは支那禪宗の初祖達磨大師を指す、達磨西來の意旨といふこと、達磨の西天より支那に來るや、經論に依らず稱念せず、只管打坐するのみ、是に於て教外別傳の説あり、教家と宗意を異にするものとす、然し今はそれ程深き意味には非ず、百草に對して祖師といふ程に見るべし。
- ⑩ 龍龜居士の句に、「明々百草頭、明々たる祖師意」とあり。
- ⑪ 頂相。上半身の肖像畫のことなれど、今は相貌、形相と云ふ程の意なり。
- ⑫ 風月等の二句は、宏智上堂の語なり、同錄一に出づ。
- ⑬ 古渡。古ぼけた渡場の意。
- ⑭ 雲門。支那廣東省韶州府曲江縣治雲門山文偃禪師、雪峰義存の法嗣。此の示衆は雲門廣

上堂、一物長へに靈なり、萬戸俱に透る。百草本明々、祖意自ら了々。天普く覆ふて人々頂相圓なり。地普く載せて箇々脚跟平かなり。此に於て薦得せば、一も也た不是、二も也た不成。什麼の處に向つてか唇皮を鼓せん。還つて會すや。良久して云く、「風月清寒なり。古渡の頭、夜船撥轉す瑠璃の地。」復た擧す、雲門衆に示して云く、「爾若し未だ箇の入處を得ずんば、三世の諸佛汝が脚跟下に在り、一代藏教汝が舌頭上に在り、且く葛藤の處に向つて會取せよ。」師曰く、「韶陽老漢恁麼に道ふと雖も、未だ免れず。奴を認めて郎と爲すことを。永平門下、者の活路のある有り、爾若し實に未だ箇の入處を得ずんば、更に草鞋を買つて行脚せば好し。」

上堂、擧す、曹山因に僧問ふ、「眉と目と還つて相識るや也た無しや。」山云く、「相識らす。」僧曰く、「甚としてか相識らざる。」山云く、「同じく一處に在るが爲なり。」僧曰く、「恁麼ならば即ち不分なりや。」山云く、「眉且つ是れ目にあらず。」僧曰く、「如何なるか是れ目。」山云く、「端的にし去る。」僧曰く、「如何なるか是れ眉。」山云く、「曹山卻つて疑ふ。」僧曰く、「和尚什麼とし

錄垂語の部に出づ。

- ① 韶陽老漢。韶陽は韶石山の南に在り、此れ即ち雲門所住の地、故に雲門を指すなり、老は老大の意、漢は人のこと、老年書宿の人を尊稱するに用ひ、又老耄の意にて輕蔑の語にも用ふ。
- ② 奴を認めて郎と爲す。奴は奴僕、郎は郎君の義、從僕を認めて主人と作すといふことにて、識神を認めて佛性となし、煩惱を認めて菩提と作す如きに喩ふ。
- ③ 行脚。善友良師を尋ねて諸國を遊行し、山川を跋涉すること。
- ④ 支那江西省撫州曹山本寂禪師、洞山真价の法嗣、此の問答は山録及び傳燈十七に見ゆ。
- ⑤ 端的。端は正、的は明白の義、正確分明の意なり。

てか卻つて疑ふ。」山云く、「若し疑はずんば即ち端的にし去らん」と。師頷して曰く、「弟兄本是れ一家の兒、眼を青巒に著けて兩眉を展ぶ。誰か識らん曹山端的の處、經行坐臥相疑はず。」

上堂、目前の機、肘後の印、曾て間隔なし。即今分明、然も恁麼なりと雖も、揚眉胸目すれば、即ち眉目に熱瞞せらる、談玄說妙も亦玄妙に汚染せらる。若し又寂に住すれば、還つて通身を縛す。空を解すれば空自ら窠窟を作す。大衆作麼生か行履して、恁麼の偏坑に墮せざることを得去らん。還つて會すや。良久して云く、「動容古路に揚る、悄然の機に墮せず。」復た擧す、曹山因に僧問ふ、「時節恁麼に熱す、什麼の處に向つて廻避せん。」山云く、「鑊湯爐炭裡に廻避せよ。」僧曰く、「鑊湯爐炭裡如何か廻避することを得ん。」山云く、「衆苦も到ること能はず」と。師曰く、「曹山恁麼に道ふと雖も、未だ免れず外に向つて馳走することを。若し人有つて、永平に時節恁麼に熱す、什麼の處に向つて廻避せんと問はゞ、他に對して道はん、須らく日下に向つて廻避すべしと。又炎々たる日下如何か廻避することを得んと問はゞ。」良久して云く、「時節若し至れば、佛性現前

① 弟兄本是れ一家の兒。弟兄今は眉と目とを指す、南嶽の語。傳燈南嶽章に曰く、「師入室の弟子總に六人有り、師各々印可して云く、汝等六人同じく我が身を證して各々一路に契へり、一人は吾が眉を得て威儀を善くす、一人は吾が眼を得て顯明を善くす、云々。」
② 經行。本義は坐禪の時、坐風を防ぎ或は睡眠を除くため、僧堂内の單間を一定の時間に徐徐に歩むことなれど、一般歩行の義にも用ふ。
③ 機。發動の義、縁に遇ふて發動する可能性をいふ。
④ 肘後の印。印は心印なり、喩の語、古は百官の印は皆組んで之を穿ち腰に佩び、或は入をして時に繋げしむ、故に肘後といふ。
⑤ 揚眉胸目。胸は目を動かし、「めくばせ」すること。眉をあ

せん。」

上堂、眞說機に對せず、眞機説を待たず。所以に大人大用を具し、大機大智を具す。且く道へ、諸禪德、畢竟作麼生か是れ大人大機底の作略、還つて委悉すや。靈羊角を掛けて、絶跡亡蹤。復た擧す、當山の初祖曰く、「古人扇子を拈起して云く、「任爾あれ千般の巧、終に兩様の風なし」と。山僧は即ち然らず、任爾あれ千般の巧、更に見る萬様の風と。」師曰く、「雲上座、半句を加へて古人虧闕の處を補はんと欲す。任爾あれ千般の巧、終に兩様の風なし。涼を招くと。月を翫ぶと、只だ一輪の中にあり。」

げ目を見はることをいふ。
① 談玄說妙。玄は黒くして赤色を帯び幽遠なる色のこと。玄は幽にて、「かすかにして微妙なる義、上は覆ふの義、幽なるものを覆へば更に幽にして暗くなるなり。轉じて眞理の意にも用ひらる、妙は年弱くして纖く美しきこと、轉じて微妙の義となり、更に轉じて神妙不可思議の義とす。今談玄說妙は宇宙玄妙の道理を談示すること。
② 佛性。佛陀たるべき心性の義にて、人々本具の自性に外ならず、教家にては性得佛性説、修得佛性説、有情有性説、非情有性説等ありとも、禪門にては身心一如と談するが故に、内外性相を論ぜず、非情有情の區別をなさずと知るべし。此の二句、涅槃經にあり。

③ 諸禪德。禪德は參禪の大徳の意にて、禪僧を尊敬していふ語なり。
④ 作略。活作用のこと。
⑤ 靈羊角を掛く。靈は靈に作り、又俗に鈴に作る。説文に云く、「靈羊は大羊にして、細角圓繞、蹙文有り、夜は角を木上に掛けて以て患を防ぐ」と。又爾雅註に云く、「羚羊は羊に似て大なり、角圓くして銳し、好んで山崖の間に在り」と。今は脚地に觸れず、没蹤跡無羶癢の作用に喩ふるなり。
⑥ 古人云々。これ高祖上堂の語なり、廣錄一に見ゆ。古人は承天運禪師なり、禪林類聚鏡扇門に出づ。
⑦ 千般。色々といふこと。
⑧ 雲上座。義雲禪師自らの稱なり。
⑨ 月を翫ぶ。南越志に曰く、「古

情、是れ我が真箇の漢、方に護生を解す。禁足や、歩々妄に移さず、護生や、心々妄に動せず。所以に道ふ、「大圓覺を以て我が伽藍と爲す、身心安居 平等性智」と。佛々此に到つて歸を同じうし、人々此に住して法爾たり。還つて委悉せんと要すや。一輪の皎月大圓覺、刹海三千鐵一團。歩々空を點じて、朕跡なし、人喚んで我が伽藍と爲す。

上堂、途中に相過ぎて、蓋を傾け、直下頭を回せば關を阻つ。向去茲より、普請し去り、卻來此れより來端を悉かにす。拄杖を拈じて劃一劃して云く、「過去の諸 如來、此の門已に成就、現在の諸 菩薩、今覺して圓明に入る。未來衆 學人、當に是の如きの法に依るべし。所以に道ふ、「湘の南潭の北、中に黄金あつて

詩に云く、犀は月を蔽ふに因つて紋角に生ず」と。今按するに、犀牛角子の縁に因つて、此の語有るならん。

① 乾坤。乾坤は天地のこと。
② 法界。法界は世界といふ程の義。

③ 禁足。結制九旬安居の間は之を禁足といふて安居の僧は其の道場の外に出づることを禁するなり。蓋し印度に於ては此の安居は雨季に限られ、雨期に於ては蟲類最も繁殖するが故に、門外に出で誤つて蟲類を殺す等のことならんため、又此の安居九十日間は、一向に辨道修行の時節なるを以て、一切の外出を禁せしものならん。眼藏安居卷に「窟に以れば薰風野に扇ぎ炎帝方を司る、法王禁足の辰に當る是れ釋子護生の日」といへり。

④ 蓋を傾く。孔子家語註に、「傾蓋は車を駐むるなり」とあり。
⑤ 直下。當下に同じく、直ちにの意。

⑥ 應利。刹は國土の義、應利は多般なる國土の義なり。
⑦ 有情。識情有するもの、意にて、一切の生類をいふ。
⑧ 大圓覺以下の文は、圓覺經圓覺菩薩章に出づ、大圓覺とは廣大圓滿の覺、即ち佛智をいふ。
⑨ 伽藍。具には僧伽藍、又は僧伽藍摩といひ、衆園と譯す、即ち衆僧の住する莊園、後世轉じて寺院の建築物たる殿堂を呼ぶに至れり。
⑩ 平等性智。如來四智の一、凡夫の第七識の我見を轉じて、此の智慧を得、以て自他平等の理を證し、常恒に大悲大慈の化益を行するなり。
⑪ 朕跡。朕は物の生する「きざし」にて、跡は「あと」かたと訓じ、已に形に露はれたること、二字にて物の形跡といふこと。

一國に充つ。無影樹下の合同船。瑠璃殿上に知識なし」と。復た擧す。世尊一日 阿難と行く次、一の塔廟を見て便ち作禮す。阿難問うて曰く、「是れ何人の塔廟ぞ。」佛言はく、「是れ過去の諸佛の塔廟なり。」阿難曰く、「過去の諸佛は是れ誰の弟子ぞ。」佛言はく、「過去の諸佛は是れ我が弟子なり。」阿難曰く、「應に當に是の如くなるべし」と。侍從して便ち行く。師云く、「佛に逢ふては則ち佛を拜し、牛に騎つて更に牛を覺む。還つて委悉すや。橋を過ぐれば村酒美なり、岸を隔て、野花香し。水は竹邊に向つて縁に、月は松頂に當つて涼し。」
上堂、鶴自ら長し、之れを截れば鶴にあらす。鳧自ら短し、之れを續がば鳧にあらす。須らく信すべし、十方佛土中、唯一乘法な

① 蓋を傾く。孔子家語註に、「傾蓋は車を駐むるなり」とあり。
② 直下。當下に同じく、直ちにの意。
③ 普請。大衆を普く請じて勞役作務すること。
④ 如來。佛十號の一、梵語多陀阿伽度の譯、如は眞如の義、即ち眞如より現はれ來りし覺者の義、又如去來の義にして、如々不動にして、凌遠世界に來りて衆生の根機に應用するが故に如來といふ。
⑤ 菩薩。具には菩提薩埵といひ、覺有情と譯す、覺智を求むる有情の義にして、諸佛の覺智を得んとして修行する大士に名く、即ち上菩提を求め、下衆生を教化する悲智の二願を具し、自利利他の行を全うする修行人なり。
⑥ 學人。佛道を參學修行する者を云ふ。

⑦ 湘の南、潭の北。以下の四句は魯巖十八則無礙塔の語の耽源の頌なり、湘南は湘水の南のこと、湘水は湖南省にありて、洞庭湖に注ぐ川の名、潭北は潭州の北のこと。
⑧ 世尊一日云々。此の因縁は法苑珠林五十敬塔部、又會元一に見ゆ。
⑨ 阿難。具には阿難陀、佛十大弟子の一、佛成道の年に生れ、世尊五十五年より二十年間侍者となりて東西の化導に隨行し、入滅の際も其の左右に居りたり、迦葉の法を嗣ぎ第三祖たり。
⑩ 塔廟。塔は梵語半塔婆の略、廟は半塔婆の譯、故に單に塔といふも同じ、舍利を安置する處をいふ。
⑪ 佛に逢ふては云々の二句。永平廣錄上堂語に見ゆ。
⑫ 十方佛土中、唯一乘法。法華

ることを。若し復た擬議せば、是法住法位、世間相常住。

上堂、性海澄々清うして底に徹し、一波纔に動いて萬波隨ふ。龍魚活路更に外なし。裏許曾て死屍を宿せしめず。

監寺に謝する上堂、虚空の邊際なうして、大方を覆ふが如く、日月の光明を轉じて、日夜を分つに似たり。只だ是れ事に觸れ私なし、何ぞ更に物の辨せざる有らん。進んでは將軍の太平を致し、退いては師子の返擲を解す。玄則丙丁の因縁、楊岐挾路の相見も亦是れ分外にあらず。良久して云く、「金繩拽轉す泥牛の鼻、半夜馳せ來つて海上に耕す。」

上堂、虚空自ら虚空の邊量を知らず、大地自ら大地の廣狹を測らず。自己の三昧是れ自己の

所覺にあらず、他人の靈性豈に他人の心機に落ちんや。然も恁麼なりと雖も、魚は水に在つて命を得、鳥は空に遊んで身を保つ。且く問ふ、大衆、衲僧什麼の處に在つてか身心を保持し去らん。良久して曰く、「百尺の竿頭、一進一退。」

上堂、本際の智是れ隱顯にあらず、空劫の身因縁に屬せず。然も恁麼なりと雖も、楊岐挾路の相見。會元十九楊

經方便品の句、云く、「十方佛土中、唯だ一乘の法有り、二も無く亦三も無し。」十方は東西南北四維上下なり、佛土は佛の住み給ふ國土の義、但し佛の教化を受くる國土を悉く佛國土といふを通説とす。今は大千世界の中といふ程の意、乘は車乘にて、佛の教法に喩ふ、教法一を載せて涅槃の岸に運べば乗と名く、唯だ一つの教あるのみといふ意。

是法住法位、世間相常住。法華經方便品の句、云く、「是の法、法位に住すれば世間の相常住なり、道場に於て知り已つて、導師方便を説く。」法位とは眞如なり、法位に住すとは十界三千の諸法悉く眞如に住するをいふ、然るに眞如は常住なり、故に世間の相も亦常住なるなり。

性海。一佛性海の義、差別生

死を河に喩へ、平等一如の涅槃を大海に喩へたるなり。

澄々。清き貌。

死屍。死骸のこと。此の句、涅槃經大海八不思議、華嚴經海八德經等に見ゆ。

監寺。又監院ともいふ、禪院六知事の一なり、住持に代つて一寺院の總ての寺務を監督する役名。故に禪院に於ける凡ての役中最も重大なるものなり。

虚空。空中のこと、廣大にして一物も無く少しの障礙も無きに喩ふ。

玄則丙丁の因縁。碧巖第七則評唱、則監院の如き、法眼の會中に在つて未だ曾つて參請入室せず、一日法眼問うて云く、則監院何ぞ來つて入室せざる、則云く、和尚豈に知らずや、某甲背林の處に於て蘭の入頭あり、法眼云く、汝試み

經方便品の句、云く、「十方佛土中、唯だ一乘の法有り、二も無く亦三も無し。」十方は東西南北四維上下なり、佛土は佛の住み給ふ國土の義、但し佛の教化を受くる國土を悉く佛國土といふを通説とす。今は大千世界の中といふ程の意、乘は車乘にて、佛の教法に喩ふ、教法一を載せて涅槃の岸に運べば乗と名く、唯だ一つの教あるのみといふ意。

在と。

金繩拽轉等の二句。宏智録一に出づ、上堂語なり。

三昧。梵語又は三摩提、三摩地等に作り、定、正受、止息、正見等と譯す、心を一境に住せしめて不動ならしめ、心を正しくして妄念雜慮なきをいふ。

靈性。靈妙不可思議なる心性のこと。

本際の智。本際は本來又は本有といふに同じ、人々本來具有の智をいふ。

或る時は一頭兩角の水牯牛となる。傳燈八南泉傳に云く、「師、將に順世せんとす、第一座問ふ、百年の後什麼の處に向つてか去らん、師云く、山下に一頭の水牯牛と作り去らん云云。」

或る時は八臂三目の上天子となる。眼藏有時の卷に曰く、

に我がために舉げよ見ん、則云く、某甲問ふ、如何なるか、是れ佛、林云く、丙丁童子來求火、法眼云く、好語恐らくは隨錯つて會せんことを、更に説くべし看ん、則云く、丙丁は火に屬す、火を以て火を求む、某甲の如きは是れ佛、更に去つて佛を求むと、法眼云く、監院果然錯り會し了れり、則不憤、便ち去る、法眼云く、此の人回らば救ふべし、若し回らずんば救ひ得ず、則中路に到つて自ら付つて云く、他は是れ五百人の善知識豈に我を贖すべけんや、遂に回つて再び參す、法眼云く、爾但だ我に問へ、我れ汝が爲に答へん、則便ち問ふ、如何なるか、是れ佛、法眼云く、丙丁童子來求火、則言下に於て大悟す。」

有る時は、一頭兩角の水牯牛となり、有る時は八臂三目の上天子と作る。青黯々の處靴を穿ち去り、明歴々の時帽を戴き来る。恁麼の消息未だ往來の機を免れず。作麼生か是れ本來一段の光明。良久して云く、「鳥は無影樹に棲み、花は不萌枝に發く。」復た擧す、玄沙因に僧問ふ、「三乘十二分教は則ち要せず、如何なるか是れ祖師西來意。」沙云く、「三乘十二分教、總に不要」と。師曰く、「且く問ふ、大衆這の一則の公案、作麼生か領略せん。若し三乘十二分教の内に就いて覓めば、金屑貴しと雖も眼に落ちて翳と成る。若し三乘十二分教の外に向つて求めば、野鹿渴に臨んで陽炎を逐ふて走る。人あつて永平に三乘十二分教は則ち要せず、如何なるか是れ祖師西來意と問はば、

①「有る時は三頭八臂、有る時は丈六八尺。」
②上天子。自在天身のこと。此觀十に云く、「摩醯首羅天は此に自在といふ、色界の頂天三目八臂なり。」
③鳥は無影樹云々の二句。安智錄四上堂語に見ゆ。「鳥は無影樹に歸して宿し、花は不萌枝上に在つて開く。」
④玄沙。支那福建省玄沙山宗一大師、雪峰義存の法嗣。此の問答は傳燈十八に出づ、眼藏佛教の卷にも引用せり。
⑤三乘。三乘、一に聲聞乘、二に緣覺乘、三に菩薩乘なり。乘は運載の義、此等三種の機類は、各自迷界を出づるに四諦十二因緣六度中、各自に適する教法に乗るが故に斯く云ふなり。
⑥十二分教。十二分經又は十二部經ともいふ、佛陀の所説を

十二種に分類せるものなり、一に修多羅(契經)、二に祇夜(應頌)、三に和伽羅(授記)、四に伽陀(偈誦)、五に尼陀那(因緣)、六に優陀那(自記)、七に伊帝目多(本事)、八に闍多那(本生)、九に毘佛略(方廣)、十に阿浮達磨(未曾有)、十一に阿婆陀那(譬喻)、十二に優婆提舍(論議)なり。
⑦祖師西來意。祖意と云ふも同じ、前注を見よ。
⑧公案。公府の案牘なり、公界定むる所の法式案文をいふ、天下是れに依りて訴訟の事項を處理す、今禪門に於ける古來佛祖の機緣相契ふの因緣、或は宗綱の開示等、此れ後人の法を是非判斷するの所以なるが故に、喩へて公案といふなり。
⑨金屑云々の句。本願儀論に出づ、又會元十一臨濟章にも見

他に對して道はん、祇だ這の三乘十二分教、總に三乘十二分教にあらずと。」

⑩正旦上堂。乾坤衲僧の鼻孔より出入して平穩に、日月佛祖の眼睛を、抉出して清明なり。所以に道ふ、「天地と我れと同根、萬物と我れと一體」と。億萬斯年今日に於て成じ、百千の國土是の處に在りて現す。釋迦老子此に於て一乗の法を説き、達磨大師此に於て五葉の春を敷く。諸人還つて看るや、元正啓祚、萬物咸新なり。
⑪上堂、記得す、臥龍因に了院主に問ふ、「先師云く、盡十方世界是れ箇の眞實人體。爾還つて僧堂を見るや。」主曰く、「和尚眼花することなかれ。」龍云く、「先師遷化、肉猶ほ煖かなること有り」と。永平聊か第二義門に向つて

えたり。云く、「王常侍曰く、金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成ると。」
⑫野鹿云々の語。宋譯楞伽經二又會元四に出づ。云く、「長慶の大安禪師曰く、若し作佛を欲せば、汝自らは是れ佛なり、佛を擔ふて傍家に走る、渴鹿の陽燄を逐ふが如くに相似たり、何時か相應し去らん。」
⑬正旦上堂。正月元旦、上堂して演法するをいふ。
⑭抉出。点くり出すこと。
⑮所以に道ふ。次の二句、肇師涅槃無名論妙存品に出づ。
⑯元正云々の語。類聚歲時門に出づ。云く、「鏡清の符禪師に僧問ふ、新年頭還つて佛法有りや也た無なや、師云く、有り、曰く、如何なるか是れ新年頭の佛法、師云く、元正啓祚、萬物咸新なり。」祚は福の義なり。

⑰臥龍。支那福州臥龍山安國院慧球寂照禪師、玄沙師備の法嗣、此問答は傳燈廿一出づ。
⑱院主。寺主、又は院宰ともいふ、寺院の事務を主宰する者の意にて、監寺の舊名なり。後住持を尊崇するを以ての故に、監院又は監寺と改む。
⑲僧堂。具には聖僧堂といひ、又雲堂、禪堂、遷佛場とも稱す、大衆の常に起臥し坐禪辨道する處なり。
⑳先師遷化。先師は玄沙を指す、遷化は化度を他界に遷すの義にて、僧の死をいふ。
㉑第二義門。第一義諦に對す、建化門に同じく、向上の平等邊より、向下の差別門に却來して種々の手段を弄し、衆生の惑障を斷じ、迷妄を破して成佛得悟の道を示すといふ。
㉒眼裡云々。此れ智門祚禪師の語、會元十五、智門祚曰く、

註脚を下さん。先師道く、「盡十方世界是れ箇の眞實人體、還つて僧堂を見るや。拂子を立てて云く、「這箇は是れ永平が拂子、那箇か是れ眞實體。和尚眼花することなかれ、眼裡筋なれば一世貧し。先師遷化、肉猶ほ煖かなることあり、水は竹邊より流れ出で、縁に、風は花裡より過ぎ來つて香しし。」

上堂、擧す、青原、石頭に謂つて云く、「人悉く道ふ、曹溪に消息ありと。頭曰く、「人あり、曹溪に消息ありと道はず」と。原云く、「大藏小藏何れよりか得來る。」頭曰く、「盡く這裡より去つて諸事總に關せず」と。師曰く、「青原は只だ大家日月の照すことを知つて、自己眼睛の明かなるを覺らず、石頭は家裡寶貝の貴きを見ると雖も、争か識らん 崑崙靈玉の多

情塵を瞥起して妄見を生ず、眼裏筋に無ければ一世貧し。水は竹邊云々。此の二句、宏智録一上堂及び同四に在り、便家類篇上に出づ。

曹溪。支那廣東韶州府の東南三十里雙峰下にあり、今は寶林寺慧能禪師を指す、黃梅弘忍の法嗣、青原の師、石頭授業の師なり、達磨正傳の禪、師に至つて大成す。

消息。音信なり。大藏小藏。藏は舍の義にして佛一切の教を舍藏するの意、大藏は菩薩藏のこと、即ち五千四十餘卷の經文、小藏は聲聞のこと、即ち八百四十卷の經文をいふ。

崑崙。崑崙山のこと、支那の西方にあり、亞細亞最大山脈の一、パミルの東境葱嶺より起り、西藏と新疆との間を東走して河南省に至る、東崑崙は秦嶺と稱し、東端に近く、五嶽中の華山、嵩山あり、中崑崙は南山と呼び、南方より支脈東北走して賀蘭山、陰山となり、興安嶺に連る、支那の古史に所謂崑崙山は南山の南部を指すと云ふ、崑崙山の玉を産するとは、史記、正義其他多くの書の文に見ゆ。

きことを。大底は大、小底は小、者裡是れ什麼の處在ぞ。闕と説き不闕と説く。良久して云く、「一夜落花の雨、滿城流水香しし。」

上堂、擧す、僧、首山に問ふ、「一切衆生及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此の經より出づと、如何か是れ是れ此の經。」山云く、「低聲々々。僧曰く、「如何か受持せん。」山云く、「染汚すること莫れ。」宏智禪師拈じて曰く、「來つて此の經を問ふ、低聲々々、大千卷、塵中より出で、三世佛、口裡より生ず。天一を得て以て清く、地一を得て以て寧し。空、無依谷に盈たす。摩訶般若波羅蜜。落日、漁樵太平を歌ふ」と。師曰く、「永平、二老の舌頭を借らず。重ねて此の義を宣せんと欲す。」良久して云く、「舌相廣。大此の經を轉す。」近く聞いて

靈錄六に黃龍智明和尚の語として見ゆ、又覺寶足庵和尚、世尊密語の話の判語なり。首山。支那河南省汝州首山省念禪師、風穴延沼の法嗣、此の話は傳燈十三、會元十一に見ゆ。

以て一切事理の正邪を辨別する心作用、波羅蜜は譯して度といふ、般若の智慧を以て事理を辨へ一切の苦惱を度するの義。漁樵。漁者樵者なり。舌相廣大云々。放光般若經舌相光明品に云く、「世尊廣長舌を出して、三千世界に普徧す云々。」

深澗水に聲なし。百千の妙義誰か解すること
許さん。風梧桐に入つて秋始めて成る。」

上堂、天地の間に處して、而して天に先ち地
に先つ、是れ什麼物ぞ。佛祖の氣を稟けて、而
して佛を超え祖を越ゆ、是れ什麼人ぞ。一杖子
を挿んで、寶王刹を建て、一微塵に坐して大
法輪を轉す。恁麼の時に當つて微塵是れ小にあ
らず、大千是れ大にあらず。所以に教中に云く、
「是法平等無有高下」と、大衆還つて會すや。拂
子を豎起して云く、「是れ什麼の法ぞ。」

上堂、本性一靈の光明、時と發起し、通身
⑤ 回互の手眼、觸處相宜し。眼處に聲を聞いて
明歷々、耳處に色を見て淨躰々。石人汝に似た
らば、能く巴歌を唱へん、汝石人に似たらば、
須らく雪曲を和すべし。塵々清淨智を發し、處

いふ、以て其の小を知るべし。
⑤ 回互。回は「めぐる、互は「た
がひに」と訓み、甲乙彼此互
に交參渉入すること。六根と
六境とが互に入り合つて能く
眼に色を見、耳に聲を聞く、
更に六根の間、又互に入り合
つて眼に聲を聞き、耳に色を
見るなり。

⑥ 石人汝に云々。會元六、洛浦
元安禪師の云く、「石人の機汝
に似るや、巴歌を唱ふるを解
し、汝若し石人に似ば、雪曲
も亦和すべし。」巴歌は卑賤の
歌、雪曲は陽春、白雪とて、
向上の歌曲なり。

⑦ 圓王。圓覺王のこと、圓覺は
梵名、圓摩羅、夜摩盧迦等に
作る、雙王、遮止等と譯す、
冥官の名なり、雙王とは妹は
「Siti」と云ひ、兄妹共に地獄
の王となり、兄は一切の男性
を審判し、妹は一切の女性を

審判するの義。蓋し之は印度
吠陀時代の神が佛教に混入せ
られ、幾多の變化を経て、今
日の思想に至りしものなら
ん。

⑧ 鐵牀洋銅。法苑珠林第十二卷
に、問地獄經を引く。曰く、
「十八王十八獄あり、其の中第
八鐵牀十八洋銅と。」

⑨ 宿生。前生、過去生といふに
同じ。

⑩ 辨道。道業を成辨するの義、
辨道の方面に二あり、一は向
內的、二は向外的、その向內
的とは坐禪の儀則に従ひ、正
身端坐して内觀自省するをい
ふ。其の向外的なるに更に三
あり、一は參師問法にして、
正見を具する正師に就いて親
しく辨道の用心を參究するこ
と、二には或從經卷にして明
窓淨几の下に靜坐して、先哲
古賢の經典を讀み、自ら古教

處普門の境に入る。諸人這箇の道理を委悉せんと要すや。古渡風清し一片
の秋、月色江光冷にして相照す。

三月旦上堂、大衆を召して云く、「時常に人を催すことあり、人豈に虚
しく時を度らんや。或は水中に軀を亡じ、或は火裡に命を失す。及刀に腸
を割き、箭鋒に骨を透す。病患老少を擇ばず、閻王寧んぞ貴賤を問はん
や。剛ひて微纖の罪犯を質して、供するに鐵牀洋銅を以てす。宿生
の善種に依つて箇の人身を得たり。般若の良因に答へて、祖師門下に投す。
今日若し空しく過さば、幾劫にか又相逢はん。寒氣已に去り、熱時未だ來
らず。⑪ 辨道時最も宜し、空しく光陰を度ること莫れ。」

上堂、擧す、僧 九峰に問ふ、「祖々相傳當に何事をか得べき。」峰云く、
「釋迦の慳、迦葉の富。」僧曰く、「如何なるか是れ釋迦の慳。」峰云く、「物
の人に與ふるなし。」僧曰く、「如何なるか是れ迦葉の富。」峰云く、「國內の
孟嘗君。」僧曰く、「未審し相傳底の事如何。」峰云く、「百歳の老兒、分夜の
燈」と。師曰く、「妙明の田地、纖塵點じ難し。鬧市門頭、相逢ふことを妨
げず。暗裡に身を轉す平坦の路、明中頂を覆ふ 等閑の人。大衆還つて

睡心すること、三に專上靜修
又事上練磨にして、事々物々
に接して練磨の功力を積むを
いふ。但し此等のもの各別
は非ず、畢竟相關のものな
れば、一を以て他を捨つべき
に非ず、内外相應して初めて
辨道の實を完うすべきなり。

⑪ 九峰。九峰道慶禪師、石霜の
法嗣、此の語は會元六、同師
傳中に載す。
⑫ 孟嘗君。史記評林七十五に其
の傳有り、門下に三千の賓客
を養ひ、貴賤を計らず、皆上
中下三等に分ちたりといふ。
⑬ 等閑の人。等閑は無事の意な
り。
⑭ 泥融して云々。此の二句杜甫
の詩、杜詩集註十五に之れ出
づ。
⑮ 驚鷺。「をしどり」なり。
⑯ 解脫門。一切の束縛を離れ苦
惱を脱したる自由無礙の處の

體悉すや。泥融して燕子飛び、沙暖かにして
鴛鴦睡る。」

解夏上堂、縛解不到の處、大解脫門開く。

從聽あれ炎暑の去ることを。誰か冷風の來るを
礙へん。未だ曾て軌則を存せず、何ぞ更に安排
を用ひん。此に於て薦取せば、木馬奔迭、石牛
懷胎。還つて委悉すや。身を轉じ、透出す竹
竿の路、眼を開いて、掀翻す甕裡の天。

知事に謝する上堂、叢林輔弼の柄を執つ
て、大家平穩の功を樹つ。事々圓通觀自在
尊と手を把つて行き、門々隔てず、香積如來供
を送り來る。然も是の如くなりと雖も、未だ楊
岐挾路の相見を假らず。何ぞ毘耶城の野狐通
を用ひん。還つて委悉せんと要すや。良久して
云く、「盧陵米價高し。」

こと、解脫の境界に入るを門
に入るに喩へていふ。此の二句、
如淨錄上に出づ、但し竹竿を
竿頭に作る。

掀翻。掀は手を以て高く上ぐ
るをいふ、即ち「はげかへす」
の意。

知事。各自其の役に就きて其
の事を知(つ)かざどる意にし
て、禪門に於ける寺院には六
知事あり、都寺、監寺、副寺、
維那、典座、直歲是れなり。

叢林。和合衆の安居同學する
處に名く、即ち大樹の叢生し
て林となるが如く、僧侶の衆
合せる意なり。

大家。大衆の意。

圓通觀自在尊。圓は性體周遍、
通は妙用無礙の意、觀自在は
梵語阿婆盧吉低婆羅の新譯、
舊譯には觀世音といふ。菩薩
の名、常に大悲大慈を以て十

方國土に遊び、衆生を化益
す、南海普陀洛島に居すとい
ふ。衆生の其の名號を稱ふる
を聞きて、ために解脫を得せ
しめ、三十三身を現じて說法
度生す。尊は尊者、梵語阿利
耶の譯、又聖といふ、尊ぶべ
き人の意。

香積如來。維摩經八香積佛品
第十に云く、「時に維摩詰即ち
三昧に入り、神通力を以て諸
の大衆に示す、上方の界分、
四十五河沙の佛土を過ぐるに
國あり、衆香と名く、佛を香積
と號す今現在す、其の國の香
氣は十方諸佛世界人天の香に
比するに最も第一となす、彼
の土には聲聞辟支佛の名ある
ことなく、唯だ清淨の大菩薩
のみ、…是に於て香積如來
衆香の鉢を以て香飯を盛滿し
て化菩薩に與ふ、時に彼の九
百萬の菩薩俱に愛を發して口

中秋上堂、蒲團功就つて、三昧より起つ、
大用現前世間を照す。夜半正明、之を望めば

光に礙へらる。天曉不露、之を觀れば眼に瞞せ
らる。直に得たり。沙門。一隻の眼睛子を開い
て、神境通徹の大機關を活することぞ。
慈麼の田地に到つて還つて奇特ありや。良久し
て云く、「鯨は海水を呑み盡して、露出す珊瑚
の枝。」

九月朔上堂、明歴々の處跡を匿し、穩密々の
間身を轉ず。天言はすして日往き月運ぶ。地
言はすして山高く海深し。稍僧言はすして凡を
超え聖を超ゆ。拄杖言はすして與奪縱橫。只
だ樹凋み葉落ち、體露金風の如きは是れ言か
不言か。良久して云く、「橋は流れて水は流れ
ず。」

く、我れ娑婆世界に至つて、
釋迦牟尼佛を供養せんと欲
す。

毘耶城の野狐通。維摩詰を指
す、野狐通とは野狐神通のこ
と、眞實に非ざるをいふ、人
を欺き誑かす者に喩ふ。

盧陵米價高し。僧、青原に問
ふ、如何なるか是れ佛法的々
の大意、原云く、盧陵の米作
廢の價ぞ。

三昧。今は禪定坐禪をいふ。

夜半正明…天曉不露。此れ
寶鏡三昧の句なり。

沙門。梵語舍羅摩擊の訛、又
桑門、沙門那に作る、勤息、
止心、出家人等と譯す、出家
して佛道を修する者の總稱。

一隻の眼睛子。一隻眼といふ
に同じ、前註を見よ、子は助
辭。

神境通徹。六神通の中の神境
通よりもじりたる語にて、自

山自在の意なり。

機關。工匠機巧の事をいふと
古書に註せられ、自然に動作
を起す機械といふことなれど
も、師家が學人を接待する巧
妙の手段作略をいふなり。

鯨は海水云々。是れ希上人、
盧同に酬ゆる詩の句、碧巖六
則の鈔、從容錄六の頭に全詩
出づ。

天言はすして云々。論語九、
陽貨篇に曰く、「子曰く、天何
をか言ふや、四時行はれ萬物
生ず、天何を言ふや。」

只だ樹凋み云々。碧巖二十七
則、「僧靈門に問ふ、樹凋み
葉落つる時如何、門云く、體
露金風。」

體露金風。山體露はれ金風吹
くの意にて、秋の景色なり。

橋は流れて云々。傳燈二十七
善慧大士の傳に偶に曰く、空
手にして動頭を把り、歩行水

上堂、擧す、僧、雪峰に問ふ、「^①聲聞人の見性は夜月を見るが如く、菩薩人の見性は晝日を見るが如しと。未審し和尚の見性如何。」峰打すること三下。其の僧後に、巖頭に問ふ、頭打すること三掌。^②雪竇拈じて云く、「病に應じて薬を設け、且く三下を與ふ。若し令に據つて行せば打すること幾多かすべき。」師曰く、「永平が見性、聲聞に同じからず、菩薩に同じからず、三大老漢に同じからず。諸人眼を著けて見取せよ。」拄杖を卓すること三下して乃ち下座す。^③蘭月旦上堂、乾坤の内、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す。^④肇法師然も慙慙に道ふと雖も、只だ月を語り月を指すことを解して、未だ指話俱に忘すること能はず。永平は然らず、乾坤宇宙一拶に拶破して、具眼の人を

牛に騎る、人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず。」
^①僧、雪峰に問ふ云々。佛果擊節第五十五則に出づ、雪峰は義存禪師。
^②聲聞人の見性は云々。涅槃經師子吼品に曰く、「十地の菩薩の所見の佛性は夜、色を見るが如く、如來の所見は晝、色を見るが如し」と、今此の文を轉換し將ち來つて問頭となすなり。
^③巖頭。巖頭全義禪師、證號は清嚴大師、德山宣鑑の法嗣。
^④雪竇。雪竇重顯のこと、智門光祚の法嗣。
^⑤三大老漢。雪峰、巖頭、雪竇を指す。老は老大の意、漢は人のこと。老漢は老年者宿の人か尊稱するに用ふ。
^⑥蘭月。蘭は臘に同じ、十二月のこと。
^⑦乾坤の内云々。寶藏論空有品に、「夫れ天地の内宇宙の間、中に一寶あり形山に秘在す。」此の文も勝天王般若經三法性品第五より來る。
^⑧形山。五蘊四大をいふ、即ち吾人の色身のこと。
^⑨肇法師。羅什門下四哲の一。
^⑩細にして問隙なく云々。寶鏡三昧に曰く、「細には無間に入り、大には方所を絶す、毫忽の差、律呂に應ぜず。」
^⑪毫釐。韻會に云く、「蠶の吐く所を絲といふ、十絲を一毫となし、十毫を一釐となす云云。」
^⑫律呂。通考に、「趙氏慎曰く、律は法なり、言は陽氣と陰氣と法をなす、呂は助なり、言は陰氣陽を助け氣を宣ぶ、總じてこれを言へば、陰陽皆律と稱す、故に三十二律といふ云々。」
^⑬萬里に崖洲を望む。猶ほ、「遠

して疑猜なからしむ。拄杖を卓すること一下して云く、「還つて見るや、梅花と白雪と、色を同じうして香を同じうせず。」
 上堂、是の法は計較の到る所にあらず、吾が心淨穢に礙へられず。^①細にして問隙なく、大にして方隅を絶す。^②毫釐も之に差へば、律呂に應ぜず。直下承當本奴婢なし。但だ有ることを知るが故に、狸奴白牯修行地に進み、有ることを知らざるを以て三世の諸佛法王城に迷ふ。若し此に於て勝負を論せば、^③萬里に崖洲を望む。正當恁麼の時如何か著手し去らん。良久して云く、「聊か拄杖を將つて滄溟を撓して、魚龍をして水の命たることを知らしむ。」
 (永平寺語錄終)

① 小 參

寶慶 冬至小參。陰も也た去處なく、陽も也た來由を沒せん。短長の時劫に涉らず、豈に始終の羅籠に拘らんや。備我れを怪しむこと莫れ、

うして遠し」といふが如し、崖洲は瓊洲府、三州の一、京師に至る九千四百九十里なりといふ。
^①聊か拄杖を將つて云々。傳燈二十一慧球禪師上堂に云く、「一隻の折筋を以て大海を撓し、彼の龍魚をして水の命たることを知らしむるが如し。會すや、若し智眼之を審諦するなくんば、さもあらばあれ百般の巧妙なるも究竟となさず。」
^②小參。小參は大參に對す、大參は結堂に於ける上堂にして専ら宗旨を擧揚す。小參は多く住持方丈に於て一山の大家に對して家訓を教誨するないう。
^③冬時。二十四氣の一、陽曆十二月二十二日頃。史記、「日冬至則一陰下藏一陽上舒」と。唐の雜錄に、「宮中以女功一撥二日之長短、冬至後比二常日、増

風 凜々として竹を破る。吾れ爾に隠すことなし、雪 皚々として松を壓す。所以に道ふ、一時節若し至れば、其の理自ら彰る。拂子を堅起して云く、者箇は是れ、三祇劫の本際、一刹那の中央、其れ或は擬議せば劫を隔つることある。畢竟如何。良久して云く、夜半鳥兒頭に雪を戴く、天明に啞子抱頭して歸る。

除夜小參。廓爾として靈なり、本來光明自ら照す。寂然として應ず、特地に大用現前す。向去底は泥牛海に入つて消息を没し、卻來底は木鷄曉を唱へて元樞を發す。前後際斷、古今無諍三昧に住す。來去蹤なく、風煙古渡頭邊に横はる。殘臘已に極り、新歲未だ到らず。中間如何が足を借らん。還つて委悉すや。千光照さず。空王殿、夜半の烏鷄雪を帯びて飛

一線之功こと。
①時劫。時劫は時間といふ程の意。劫は名義第三に、劫筈、大論に秦に分別時節といふ、雜阿含經第三十四に云く、譬へば鐵城の方一由旬なるが如き、高下亦然り、中に滿つるの芥子あり、百年に一芥子を取、其の芥子を盡すも劫猶ほ竟らず。又云く、大石山の不斷不壞にして方一由旬なるが如き、若し士夫あり、迦尸劫貝を以て百年に一拂し、之を拂ふて已まず、石山遂に盡くるも劫猶ほ竟らず」と。
②經籠。羅は「あみ」、籠は「かご」のこと。
③凜々。清寒の貌。
④皚々。霜雪の白き貌。
⑤所以に道ふ。禪林類聚水火門に、「百丈云く、佛性の義を議らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし、時節若し至れば其の理自ら彰る。」北本涅槃經師子吼品は之と小異なり。
⑥三祇劫。三阿僧祇劫の略、阿僧祇は梵語無數と譯す、數を極むるとも知る能はざる大數の意なり。即ち三祇劫は三無數劫のことにして、菩薩が佛果を得る迄に經玉ふ修行の年時なり。
⑦一刹那。刹那は梵語、念と譯す、印度に於ける時の最小單位なり、極めて短き時間といふ。一彈指に六十五刹那ありといふ、以て知るべし。
⑧夜半鳥兒云々。此の語、禪類一間法門に出づ、谷山有緣禪師西來意の問に答ふる語なり。
⑨除夜小參。此の小參は、次の入院小參と前後す、永平に在つての除夜小參なるを以てなり、除夜は又除夕とも云ふ、大晦日の夜なり。

ぶ。復た擧す、趙州因に僧問ふ、「兩鏡相向ふ、那箇か最も明かなる。」州云く、「汝が眼皮 須彌山を蓋ふ。」當山初祖拈じて曰く、「或は人あつて永平に兩鏡相向ふ、那箇か最も明かなると問はば、他の爲に拄杖を拈じて道はん、者箇は是れ拄杖子と。他又此れは是れ 長連床上學得底、佛祖向上什麼とか道はん」と道ふて、拄杖を擲下して下座。師曰く、「今夜山僧に兩鏡相向ふ、那箇か最も明かなるやと問はば、即ち道はん、一段の光明古今を照すと。」
永平 入院小參。法は法に隨つて行し、法幢は隨處に建つ。一出六出、藥山の師子。異類同類、青原の麒麟。自家の鑰子を拈起して向上の玄關を打開す。恁麼の時に當つて祖宗の爐鞴、魔を鍊り佛を鍊る。鑊湯消融、本

⑩廓爾。雲晴れ空廣き貌。
⑪前後際斷。前後際の念を斷絶すること、一切相對的の念を截斷して不思議不思議となるをいふ。
⑫無諍三昧。法性の真理たる一切皆空の理を證し、自他是非の差別の相を混すれば、よく法性の理に隨順して違すること無きが故に、諍ふところなし。之を無諍三昧といふ。
⑬千光照さず云々。此の二句は如淨錄に出づ、緣西堂に謝する上堂の結句なり。
⑭空王殿。空王は佛の總名なれど、今は過去の一佛の名なり、空劫に出現する佛。空王殿はその佛の在處にして今は空無に喩ふ。
⑮須彌山。梵に蘇迷盧といひ、妙高山と譯す、印度の古説に依れば、一世界の中央に須彌山あり、周圍に七金山八海を有し、一切の生類皆之に依りて生息し、日月諸天また之に依りて廻轉すといふ。
⑯長連床。僧堂の單位のこと、蓋し單位は長くして五六人乃至十人位づつ一床に坐する床なるが故に、長連床といふなり。
⑰入院。入寺に同じく、新命の住持初めて其の寺に入るをいふ。
⑱法は法に云々。此の二句、宏智録一に出づ、小參語なり。
⑲法幢。道場之標幟にして印度に於ては大法を人に宣傳する師が、其の標幟として門頭に建つるものなり。
⑳一出六出藥山の師子。禪類四獅象門に、雲巖展禪師因に藥山に問ふ、聞く汝師子を拈すること會せりと、是なりや否や、師云く、是、山曰く、幾ばくをか弄得し出す、師云

分の鉗鎚、自を鍛ひ他を鍛ふ。面目儼爾、既に
恣麼の手段を得、作麼生かの當ならん。道ふ
こと莫れ鯤鯨羽翼なしと。今日親しく鳥道より
回る。復た擧す、^①藥山因に僧問ふ、「祖師未だ
此の土に到らず。此の土に祖師意ありや也た否
や。」山云く、「有り。」僧曰く、「已に祖師意あらば
又來つて什麼が作さん。」山云く、「有るが爲の所
以に來る」と。師の頷に曰く、「^②劫前の消息
誰人にか屬す。五葉の聯芳、芬馥新なり。^③少
林眞の妙訣を識らんと要せば、一聲の鐵笛、陽
春を奏す。」
結夏小參、虚空を擘破して、九句の窠窟を構
へ、^④圓覺を打開して、大地の有情を接す。馬
牛を驅つて自己一片の田地を耕し、凡聖を會し
て空劫已前の規綱を張る。^⑤所以に道ふ、「十方

く、六を弄得し出す、山曰く、
我れ亦弄得す、師云く、和尚
幾ばくを弄得し出すや、山
曰く、我れ一を得し出す、師
云く、一即六六即一と。傳
燈十四雲巖章にも出づ。
① 青原の麒麟。會元五青原章に
云く、石頭青原に問ふ、曹溪
大師選つて和尚を識るや否
や、師曰く、汝今吾を識るや否
や、曰く、識る、又争か能く
識得せん、師云く、衆角多し
と雖も一麟走る。
② 爐鑪。鍛冶工の銅鐵等を鍛練
する爲に用ふる火爐、風を起
す「ふいこ」のこと。師家が學
人を陶冶する手段に喩ふ。
③ 饒湯。饒は大鼎なり、故に饒
湯は熱湯の意。
④ 道ふこと莫れ云々。宏智上堂
の語、同録一に見ゆ、但し事
實は莊子逍遙遊篇に出づ。云
く、「北冥に魚有り、其の名を

鯤となす、鯤の大き其の幾千
里なるを知らず云々。」
⑤ 藥山。支那湖南省澧州藥山惟
嚴禪師、石頭希遷の法嗣、此
の話は會元五藥山章に出づ。
⑥ 劫前。空劫以前の意、天地の
開くる以前のこと。
⑦ 芬馥。香氣盛なる貌。
⑧ 少林。支那河南省河南府登封
縣の四十里嵩山少林寺、達磨
面壁の地、今は達磨大師を指
す。
⑨ 陽春。楚國の歌曲の名、高尙
なる詩を稱す。
⑩ 圓覺。如來の覺性をいふ。圓
とは満足周備して此の外更に
一法無きをいひ、覺は靈明靈
照にして、諸の分別念想無き
ないふ。
⑪ 所以に道ふ。以下の四句龍居
士の偈なり、龍居士は支那唐
代の人、姓は龍、名は蘊、字
は道玄、襄陽の人、世々儒を

同聚會、箇々學無爲。此れは是れ 選佛場、心空 及第して歸る」と。且
く問ふ、龐老者裡階梯を立せず、及第底是れ什麼。若し又心地本來空なる
ことを證せずんば、争か平等性智に安居せん。此に於て薦得せば、偏に及
第を許す。然も是の如くなりと雖も、同共一法の中、何ぞ更に揀擇を作さ
ん、還つて委悉すや。争ふに足らず、讓るに餘りあり。記得す、^①當山初
祖結夏小參に、擧す、^②慈航禪師道く、「參禪の人第一に鼻孔端正、次に眼
目清明、其の後は 宗說俱到を貴ぶ」と。祖云く、「大衆鼻孔端正の道理を
會せんと要すや。若し也た會得せば、鼻孔を穿破し了れり。眼目清明を會
せんと要すや。便ち是れ傍觀の人に、^③木樵子に換卻し了らる。宗說俱到を會
せんと要すや。」拂子を以て禪床を撃つこと一下して云く、「宗も也た到り、
説も也た到る。向上又方便のある有り。慈航又云く、「^④九十の長期明日
より始む。繩墨外邊を將つて行くこと莫れ」と。永平今夜此の兩句を續い
で禁足の規繩を爲さん。九十の長期明日より始む。繩墨外邊を將つて行く
こと莫れ。草鞋拄杖、都盧脱して、但だ愛す罽雲の活眼睛」と。師曰く、
「山僧、尊韻を續いで重ねて此の義を宣す。祖宗の機要正に分明、繩墨規を

以て業とす、貞元の初石頭希
遷に謁して禪旨に契ひ、後馬
祖に參じて法を嗣ぐ、留まる
と二年、爾來機鋒頗る迅捷、
震且の維摩と稱せらる。
① 選佛場。佛祖を遷作する道場
の義にて、僧堂をいふ、蓋し
僧堂は坐禪を修し、坐禪に依
つて作佛する處なるが故にい
ふなり。
② 及第。選佛場に對していふ
語、心空及第は見性悟道の義。
③ 當山初祖云々。永平廣錄八に
見ゆ。
④ 慈航禪師。慶元府天童山慈航
了朴禪師、育王介議の法嗣。
會元十八に出づ。
⑤ 宗說。宗通、説通のこと、能
く宗旨を悟るを宗通といひ、
能く説法をなすを説通とい
ふ。
⑥ 木樵子。菩提樹の實なり、數
珠の珠に用ふ。

爲して只麼①に行く。雲青山に倚つて子は父に歸す。豁②開す鐵眼と銅睛と。

解夏小參、大功轉する處、縛を解き黏を去る。三期満する時、拄杖を擔起す。人より傳へず、誰をしてか千聖を慕はしむ。是れ自得にあらす、何ぞ更に己靈を重んぜん。一葉空に飄つて林岳體露れ、大洋月を涵して珊瑚光を映す。正恁麼の時、九十日の飯錢を還し了るや也た未だしや。若し未だ還し了らずんば、偏が拄杖子を奪はん。若し又還し了らば、偏に本分の草料を與へん。恁麼に相應じ得れば、時虚しく度らず、觸處自在ならん、還つて體悉すや。滿頭の白髮岩谷を離る、半夜雲を穿つて市廓に入る。復た擧す、歸宗に因に僧辭す。宗云く、「什麼の處に向つてか去る。」僧曰く、「諸方に五味禪を學し去らん。」宗云く、「吾が者裡只だ一味の禪あり。」僧曰く、「如何なるか是れ和尚一味の禪。」宗便ち打す。師曰く、「這箇の一椀子如何か透得し去らん。凡を打し聖を打する家風顯示、一片に打成す禪本無味。」

爲して只麼①に行く。雲青山に倚つて子は父に歸す。豁②開す鐵眼と銅睛と。

①九十。安居九句のこと。
②都盧。都ての義、一切残らずの意なり。

③尊顯。永平高祖の顯なるが故に尊敬して斯くいふ。

④只麼。「斯の如し」といふ意、恁麼といふに同じ。

⑤三期。長中下の三期のこと。圓覺經圓覺菩薩章に云く、「即ち道場を建つ、當に期限を立つべし、若し長期を立てば百二十日、中期は百日、下期は八十日。」

⑥千聖。聖とは佛祖のこと、千聖とは三世歴代の佛祖をいふ。

⑦料。牛馬の日々食する「かひば」のことなり、今は自分の接得、即ち棒喝を與ふるの義に用ふ。

⑧滿頭の云々。此の二句、空谷六十八則投子和尙拈語の末句なり、又宏智錄一に見ゆ。

法語

①禪人に示す

生を佛法流布の處に受け、法を祖師②單傳の門に聽く、廣大劫の際最も稀なり。此の生空しく過すべからず、是の法豈に開明せざらんや。中に就いて坐禪の一行は、三昧中の王三昧なり。祖師西來餘事を務めず、面壁打坐のみ。偏直に須らく回光返照底の智を亡じ、頭に迷ひ影を認むる底の愚を翻して始めて得べし。道ふとを見ずや、三級浪高うして魚龍と化す。癡人猶ほ屏む夜塘の水。」此に於て薦取せば、世人の愛處を愛せず、諸聖の證階を望まず、塵中に混せず、威音世外の歩を擧し、凡聖を超越して從上祖宗の風を弄す。旂を勉めよ旂を勉めよ。

國譯義雲和尚語錄

①歸宗。支那江西省南康府廬山歸宗寺智常禪師、馬祖道一の法嗣。此の話、會元三に出づ。

②五味禪。一味禪の對、種々の雜解妄解の混合せる禪のこと、即ち純粹なる佛祖相傳の禪に非ざるをいふ。

③一味の禪。純一無雜の最上乘の禪、即ち眞の佛法をいふ。

④一椀子。子は助字、概は「くさび」と訓ず、一著子と同じ。

⑤法語。佛家に於て演說する所のものは皆法語なり。

⑥禪人。參禪の人をいふ、即ち禪門に歸入し、坐禪を修する人。

⑦單傳。單は單獨、傳は相傳の義、教外別傳の宗は他の教家の如く種々の法門を論ぜず只だ打坐の一法を修して見性成佛する、之を直指單傳の法といふ。

⑧王三昧。三昧中の王たる三昧

といふこと、即ち最勝の三昧を王に喩へたるなり。

⑨回光返照。自己を反省すること、凡夫顛倒して猥りに聲色等の前境を逐うて狂走し、或は他の言句に隨つて妄計す、是れ外に向つて物を求むるなり、故に聲色を見聞し、思慮分別する所の者、これ何物ぞと之を内に反求することはいふ。但し今は惡き意味に用ひて、思慮分別のことを云ふが如し。

⑩三級浪云々。此れ碧巖集第七則、慧超問佛の話の句なり、云く、「江國の春風吹き起らず、鷓鴣鳴いて深花裏に在り、三級浪高うして魚龍と化す、痴人猶ほ屏む夜塘の水。」これ龍門の故事なり。支那河南省龍門縣に龍門山あり、夏の禹王其處の瀑布を三段に切

同

吾が胸中宛も虚碧の如し、更に語句の人
に與ふべきなし。飯に逢ふては飯を喫し、粥に
逢ふては粥を喫す、困じ来れば眼を合し、健か
なれば則ち經行す。其れ或は文字を要せば、
如々の文字萬象の上に顯露す。其れ或は心要を
求めば、祖々の心要全く懶が動靜にあり。既に
那邊にあつて恁麼の事を擔荷し、這裡に卻來し
て恁麼の道を履踐するものなり。名も也た得ず、
狀も也た得ず。所以に道ふ、「從來共に住して
名を知らず、任運に相將ゐて只麼に行く。古
より上賢猶ほ識らず、造次の凡流豈に明むべ
けんや」と。聖諦すら尙ほ爲さず、何に況ん
や世話をや。洞山、衆に示して云く、「千人萬
人の中にあつて、一人に向はず、一人に背かざ

り落して水を排除し、黄河の
氾濫を防ぎたるが故に禹門と
いふ、俗説に、毎年三月三日
に鯉が其の瀑を廻りて龍門を
透過すれば、角を生じて龍と
なりといふ。今已に鯉は龍と
化し去りたるを知らず、痴人
は龍門の漚壺に鯉を搜索する
は愚の至りなることをいふ。
威音世外。威音は威音王如来
の略、太古の佛名なり、威音
世外は威音王以前、又は空劫
以前、天地未開以前といふに
同じ、世外は横に約し、以前
は縦に約するの差あるのみ。
従上。これまでの意。
虚碧。碧空と同じく大空のこ
と。
如々。不變不動の義。
所以に道ふ。以下の四句、會
元五藥山章に出づ、云く、「山
一日石上に在つて坐する次、
石頭問うて云く、汝這裏に在

つて何をか作す、曰く、一物
も爲さず、頭曰く、恁麼なら
ば即ち閑坐なり、曰く、若し
閑坐ならば即ち爲さん、頭曰
く、汝爲さすと道ふ、箇の甚
麼をか爲さざる、曰く、千聖
も亦識らず、頭偈を以て讚し
て曰く、從來共に住して名を
知らず、任運に將ひて只麼に
行く、古より上賢猶ほ識らず、
造次に凡流豈に明らむべけん
や。」
任運。時運に任ずの義。
造次。急遽尙且の時、即ち暫
時の意。
聖諦すら尙ほ爲さず。諦は眞
實の義にて、佛道といふ程の
こと、佛法には眞諦と俗諦と
ありて、眞諦は非有の理を明
し、俗諦は非空の理を明す、
而して此の眞俗二諦を融鑠し
たる眞俗不二となりたる所を
聖諦といふ。その佛法最上の

る底、是れ什麼人ぞ」と。雲居、衆を出でて
云く、「某甲、參堂し去らん」と。此れ則ち吾が
家の家珍なり。謾に抛却すること勿れ。朝に
西天に往いて參取し去り、暮に東土に歸つて問
著し來る。問ひ來り參じ去つて、月深く年久し。
者裡に卻來して須らく洞山雲居に相逢ふことを
得去るべし。若し又相逢ふことを得ずんば、長
連床、上三二十年、心を墻壁に著けて辨取せよ。

佛祖贊

觀音

流に隨つて脚跟を點じ、幾煙雲をか踏斷す。
海島碧岩の裡、快かに入理の門を占む。童

位すら求めず、凡聖の階級に
隨せず、一物に依倚せざる語
脫自在の境界をいふ。
世諦。俗諦即ち世俗法のこ
と、世間萬般の差別の事相を
いふ。
雲居。支那江西省南康府建昌
縣西南三十里雲居道膺禪師、
洞山悟本の法嗣。
參堂。堂は僧堂なり、僧堂に
歸るをいふ。
西天。支那日本より西方にあ
る天竺國の意にて印度のこ
と。
海島碧岩の裡。稽古略三に云
く、「慶元府の海中に補怛路迦
山あり、乃ち觀音示現の地な
り。」又一統志四十六に云く、
「補陀山は寧波府昌國縣の海
中に在り。」
童子。善財童子のこと、華嚴
入法界品に委し、善財南方に
往き、先づ德雲比丘に參じ、

次第展轉して終に普賢菩薩に
參じて、一切佛刹微塵數の三
昧門を得、斯の如く百十城を
經、五十三の知識に參す。
涅す。涅は水中の黒土をい
ふ、涅すは黒く染むること。
攪す。攪は亂なり、撓なり、
手動なり。
布袋。唐の明州奉化縣布袋和
尚、名は契此といふ、髮額禪
腹、言語恒なく、隨處に睡る。
常に杖を以て布袋を荷ひ、物
を見れば乃ち乞ひ、少許を分
けて袋に入る、自ら長汀子、
布袋師と號す、後梁の貞明三
年三月示寂、辭世の偈に彌勒
眞彌勒、分身千百億、時々時
人に示す、時人自ら識らず。」
兜率。世以て慈氏の垂迹とな
す。又却史多、兜率陀等に作
り、妙足、止足、知足等と譯す、
欲界六天の第四、須彌山の頂
上十二萬由旬の處に在り、内

子艱ること莫れ百城の歩、大千の春は箇の花園にあり。瓶中の蓮々底の水、^①涅すれども染ます。攪すれども渾らず。

布袋

烏藤擔起す大千界、行けば則ち同じく行き休すれば共に休す。兜率の法音、噴地に成す。這邊那畔、放^②に優遊す。

永平初祖

^③捷俊たる奇相、博大の心量。曹溪の淵源を吸盡して性海に湛へ、太白の拄杖を奪取して扶桑に返る。鼻孔端しうして衝天の氣あり。眼瞳重つて人を射るの光を具す。一花五葉春、日暖かに、嶺月洞風秋夜涼し。

永平二祖

肝膽眉目に彰れ、乾坤寸心に斂む。^④洞水の派を湛へて眼睛碧海の如く、吉祥の踵を繼いで頂毛雪林に似たり。寶鑑の萬象を含むが如く、虚空の鉞を掛けざるに同じ。閃電の威光舒又卷。儼として、猊座に居して雷音を震ふ。

寶慶初祖

全相の妙、通身の照、洞山頂上の眼睛を奪ひ得て、吉祥堂奥の心要に透徹す。塵々三昧の座床に據り、刹々常説の曲調を暢ぶ。拂柄を拈弄して殃兒孫に及ぶ。雲を打し水を打す好一場の笑。

自贊

聖も也た慕はず、凡も也た疎んせず。^⑤曲豕に身を倚せて未だ箇の言路に涉らず。^⑥龜毛横に握つて能く、卦爻の圖を質す。衣薄うして、洞峰の風骨に徹し、年邁いて、嵩岳の雪顛を侵す。鐵樹を攀ちて紅血を注ぐに堪へたり。^⑦天堂に處して妙娛を受くるに倦し、朝三千暮八百、喫粥了洗鉢盂。

同

面容醜にして彼の欺瞞を受く。一世貧にして物の人に與ふるなし。拂子毫頭眼睛綻ぶ。佛魔驗み了つて齊隣を絶す。吉祥峰の月孤り耀き、^⑧蘆萄林の花春を累ぬ。

外の二院あり、内院には彌勒菩薩住して説法すと。

①噴地。噴は鼻を鼓するなり、氣を吐くなり、噴地は「たちまち」の義。

②優遊。適意自由の貌。

③捷俊。捷は敏捷の義、俊は秀でたること、千人に勝るを俊といふ。

④太白。如淨禪師を指す、天童山一名太白といふが故なり。

⑤永平二祖。孤雲懷奘禪師、京都の人、姓は藤原氏、九條相國爲通の曾孫、幼にして出家、經論を精究すると多年、竟に終局に非ざるを知りて轉錫、適々道元禪師の歸朝に會ひ参問再びして淺草に許され、遂に空奥に入つて嗣法す、道元禪師の永平寺を開くに當りて大いに力を盡す、建長五年永平に住す、文永四年退隱、弘安三年示寂す。

⑥洞水の派。洞山悟水大師より出てたる支流の意。

⑦吉祥。道元禪師を指す、吉祥は永平寺の山號。

⑧猊座。又獅子座ともいふ、佛陀は人中に於て最尊なること猶ほ獅子の百獸中に於て王なるが如し、故に佛陀の坐し玉ふ座を獅子座と云ふ、これより佛教の大徳の座を獅子座、又は猊座といふに至れり。猊は猊狔なり、獅子の屬。

⑨塵々三昧。一微塵一毛端の微塵の中に、能く正定に入りて大法輪を轉するをいふ。

⑩刹々常説。草木國土説の説法をいふ。

小佛事

戒善大姉 起龜

有を離れ無を離れ、戒を以て心地と爲す。男にあらす女にあらす、善を以て莊嚴と爲す。既に有無を離れ男女を越ゆ。其の間に生滅ありや也たなしや。生は大地と共に來り、死は虚空と同じく去る。所以に道ふ、「生とも也た道はず、死とも也た道はず」と。甚としてか恁麼なる。從來生死相干らず、而今什麼の處に向つて去るや。足下雲生す。

戒智大姉 下火

無相の大戒を皮肉と爲し、不思議の智を心肝と爲す。本是れ一如、何ぞ内外に涉らん。六十七年、夕電影を收め、一靈の眞性。老蚌珠

を合む。那邊眞常の門に趣向し去らんと要せば、先づ須らく丙丁童子に相見し了るべし。相見底の道理作麼生。忽地本第二人なし。盡空俱に是れ煙雲の跡。

思達 上座下火

思付絶する時寂滅の本路に達す。根塵脱する處圓通の妙機を開く。風吹いて花自ら散しく、水涵して月自ら流る。杳々として路を鳥道に借り、緊々として身を裡頭に轉す。火を以て圓相を打して云く、「者裡是れ好便宜、祖佛曾て回避せず、回避せざる底の事又作麼生。塵箇の性火三昧に入る。」

慈元侍者下火

慈門廣大にして開閉時あり。虚空大地是れ本元たり。所以に道ふ、「萬法一に歸す、一何の

① 卦爻の圖。易の算木及び其の變化の有様、暗に重離六爻、偏正回互の宗旨を指す。

② 洞峰。洞山のこと。

③ 嵩山。嵩山少林寺達磨大師を指す、劍掛刀山も曾て恐れざる作用。

④ 天堂。六道中の天上界のこと。

⑤ 朝三千、暮八百。朝打三千暮打八百の略、朝に三千を打し、夕に八百を打するといふとにて、吾人の朝より暮に至る迄、進退動止、無聖礙なるをいふ。⑥ 薜蘿林。薜蘿、又は薜波といふ、金色花樹、其の花香氣あり、遠く薫す。

⑦ 小佛事。佛教の祭祀法會を一般にいふ、小法事といふも同じ。

⑧ 大姉。在家女人の法名の人に附する文字、深く佛法を信ずる善女の意なり。

⑨ 起龜。舍内に安置せる龜を茶毘に附せんとして送り出すをいふ。

⑩ 所以に道ふ。碧巖五十五則、「道吾と漸源と一家に至つて弔慰す、源、棺を拍つて云く、生か死か、吾云く、生とも也た道はず、死とも也た道はず云々。」

⑪ 足下雲生す。思ふまゝに足の下より雲を生じて、それに乘じて飛行すること。法に於て自由自在を得たる人の境界をいふ。

⑫ 下火。又は下炬に作る、乘炬に同じ、葬式の時導師炬を乘りて亡者を火葬する意を表はすをいふ。相傳ふ、黃檗希運其の母の溺死せる時、自ら炬を乘りて偈を唱へて引導せるに始まること。

⑬ 無相。一切の定相を離れたるをいふ、大涅槃經蓮華品には、

五蘊と生住滅男女と之を十相といひ、之を離るゝを無相となすといへり。

⑭ 一如。不異不二をいふ。

⑮ 老蚌。珠を含む、蛤の類。呂氏春秋「月望なれば蚌蛤實、月晦ければ蚌蛤虚なり。」

⑯ 丙丁童子。火を司る童子といふこと、今は只だ火のことなり。

⑰ 忽地。地は助字「たちまち」の意。

⑱ 上座。上座の義にして、沙門中の老宿の尊稱なれども、出家して具足戒を受けたるものは皆之を上座と名付く。曹洞宗にては出家得度後入衆したるもの、稱なり。

⑲ 根塵。六根六塵の略、六根とは眼耳鼻舌身意、これ六識の所依となり、認識の基本となるが故に根といふ、六塵は色聲香味觸法の六境をいふ、此

の六境は六根を通じて身に入り淨心を空汚するが故に塵といふ。

⑳ 杳々。深くして廣き貌。

㉑ 炬。炬なり、「たいまつ」のこと。

㉒ 塵々云々。此の句安録七下火の部に出づ。

㉓ 所以に道ふ。趙州録中卷（碧巖四十五則にも出づ）、僧趙州に問ふの語なり。

㉔ 閑皮袋。閑は無用の義、皮袋は「かばぶくろ」にして身體を指す。

㉕ 涅槃。梵語又泥洹に作り、滅度、圓寂、寂滅等と譯す、一切の迷妄を脱却して寂靜無爲の安得を得ることをいふ、不生不滅の眞證即ち佛の悟りなり、然るに小乘にては三界の煩惱を斷じて有餘の依身を滅し、即ち灰身滅智したる阿羅漢の悟りを涅槃といふ、從つ

處にか歸す」と。某人、夢中に生を受け、夢中に滅に歸す。平生の閑皮袋を脱却して、①涅槃の一路門に撞入す。諸佛と臂を把つて行き、列祖と袂を連ねて去る。恁麼に行履の處を見んと要すや。火を以て圓相を打して云く、「未だ這箇の火聚を脱得し了らざるに、須らく優鉢羅華の開敷するを看るべし。」火を擲下して云く、「開敷了や。」

寛海の塔主下火

天闊うして涯畔を絶す。海枯れて底を看ること難し。②珊瑚、月を捧著して、波浪天を拍つて翻る。生や全く生、花開いて滿樹紅なり。死や全く死、花落ちて樹還つて空し。且く道へ、自分の性命什麼の處にかある。火を以て圓相を打して云く、「只だ這裡にあり。」火を擲下して云く、「涅槃路通す。」

長樂開山圓機和尚下火

凡を超え聖を越ゆ箇中の人、佛に入り魔に入つて疎親を絶す。百骸俱に潰散して、③靈鎖常に眞なり。破爛衫を著けて回途に歩を移し、④娘生袴を脱して本路に身を讓す。⑤快便逢ひ難し。⑥丙丁童子半途の儀をな

す。火を以て圓相を打して云く、「火中芬馥一莖の蓮。」

祥榮侍者入骨

曉風拂々として春榮を奪ふ。還つて是れ空華地より生ず。買はんと欲するに無門什麼の價ぞ。紅爐百鍊金精を見る。某人、雪を凌ぎ霜を経る歳寒の操を保ち、身を碎き骨を粉にする堅密の行を修す。⑦支機一撥して曾て此際に來り、大命俄に零ちて已に無生に歸す。無生の一路如何か履踐せん。塵々一齊に⑧金剛定に入る。

偈頌

山居二首

①吉祥峰頭人間にあらず。四時遷變の看を作すこと莫れ。②兀坐③寥寥として對待なし。青山深き處白雲閑なり。

林下幽閑なり一世の貧、外に向つて疎親を問ふに由なし。清風白月賓と

て此の色身を滅して寂靜安樂の死に至るを、入涅槃又は般涅槃といふ。

①優鉢羅華。優鉢羅は梵語、又優曇鉢羅、優曇跋羅に作り、略して優曇、又は烏曇といふ、植物の名なり。譯して空起、又は起空といひ、瑞應、祥瑞は其の意譯なり、優鉢羅華は其の木の花なり、此の花が希有の意に用ひらるゝは此の樹が隱花植物にして各人の眼に其の花を示すとなきがためなり、南方の熱地に生ず。

②塔主。塔司に同じ、諸塔の一切の事務を總監する役の名。③珊瑚月を云々。此の句巴陵吹毛劍の答話、碧巖百則に見ゆ。④開山。寺院を開創したる僧をいふ、古は釋氏の徒多く人跡無き空山を開いて其處に居す、故に此の名あり、即ち一

は道路を通じ不毛を開くは田の化なると、一は修道に寂靜の地を擇べるに依る。後世に至りては山を開かざるも、新一寺を創め、一法脈を垂るゝ人を稱して開山といふに至れり。

⑦破爛衫。褌衫はすそべりある衣、破はやぶれたる意。此の語は會元十四、石門慧徹章に見ゆ。

⑧娘生袴。娘は母の通稱、父母所生の袴といふ程の意。

⑨快便。快い便利の意、うまい便宜といふ程のこと。

⑩入骨。入塔に同じ、僧家にあつては入塔といひ、俗家にあつては入骨といふ、死者の遺骨を塔中に收むること。

⑪支機。支々微妙にして、言述を以て測るべからざる機用をいふ。

主と。去就平常人を誑さす。

氷

寒風吹き結ぶ千江の浪、識得す元來水の不流なることを。兩岸相連つて、鐵橋滑かなり。行人顛倒して起つて還た休す。

雪の韻に和す

一夜換へ來つて世界新なり。山河大地埃塵を絶す。無陰陽の地身を轉じて看れば、花は發く少林千古の春。

佛涅槃

瞿曇半夜賊身露る。天曉追ひ來つて、驢も追ひ回し。蹤跡今に至つて覓むるに處なし。黃鶯聲滑かなり。綠楊の枝。

宗規 西堂の關西に歸るを送る

結夏し來り解夏して歸る。結び來り解き去つ

て雲の飛ぶに似たり。道に方所なし家に到つて看よ。西北一天月。一規。

僧を送る

同氣相通す。玄牝の門、毫端隔てす。一乾坤、任他あれ萬里回途の歩。足

下。雲無うして月痕を吐く。

師 正慶二年癸酉十月十二日辭世の頌に曰く、
教を毀り禪を誘す、八十一年。天崩れ地裂く、火裏の泉に没す。

上に於て最勝なるの意、釋尊の稱。

① 追。舊板に報に作る。

② 馴。一乘の車に四頭の馬をつけたるをいふ。

③ 綠楊。楊は枝の垂れざる柳をいふ、「かはやなぎ」と稱するものこれなり。

④ 宗規。筑前博多妙樂寺開山月堂宗規禪師なり、姓は宗氏、本州太宰府の人、法を大應國師紹明に嗣ぐ、延寶傳燈錄に出づ。

⑤ 西堂。又西庵ともいふ、他山の前住の人、叢林に來る時は之を賓位に置く、賓位は西なるが故に西堂といふ、現時曹洞宗にては住持の化を助けて衆僧を接得する者、即ち結制一會の導師を西堂と稱す、昔時とは名同じきも實異なるを知るべし。

⑥ 一規。規は「ぶんまはし」の、

とにて、圓の義、今一輪といふに同じ。

⑦ 玄牝の門。老子第六章谷神章に出づる語。玄は天なり、牝は地なり。

⑧ 雲。煩惱に喩ふ。

⑨ 正慶二年。正慶は本邦北朝第一道光嚴帝の曆號、同二年は西紀一三三三年に當る。

⑩ 泉。火燭裡の清泉に没入するの義、即ち生死自在の妙用をいふ。

國譯義雲和尚語錄終

時延文丁酉、受菩薩戒の弟子寶慶大檀那野州の太守藤原朝臣知冬發願にて開版す矣。集むる所の鴻福、上四恩に報じ、下三有を資くるものなり。

助緣奉行比丘 瑞雄維那
刊字奉行比丘 等理藏主
洛陽永興比丘 宏心書字
住持永平兼寶慶法嗣比丘曇希 校勘

①延文丁酉。延文は後光嚴帝の曆號、丁酉は同二年に當る、西紀一三五七年なり。
②菩薩戒。菩薩の受持する戒法の義、三歸、三聚攝、十重禁の十六條戒あり。
③檀那。譯して布施といふ、今は布施者の意、寺院の信徒をいふ、檀越檀家と云ふも同じ。
④朝臣。四位以上の人をいふ。
⑤四恩。一に父母の恩、二に國

王の恩、三に三寶の恩、四に衆生の恩なり。
⑥三有。欲、色、無色の三界。又は生死中の三有をいふ。
⑦比丘。梵語苾芻、備勸に作る、出家の男子をいふ、破惡、怖魔、乞士の三義を具す。
⑧藏主。又知識ともいふ、藏經を監理する役名。
⑨校勘。しらべかんがふること。

跋

雲禪師、千古未發の道を、句後聲前に霹靂して、頓に大地を蘇息一番せしめたり。宜なる哉、當時永平中興の道譽を盛んにすること。今日此の錄再び世に行はる、國の運なり、人の幸なり。然りと雖も若し卷中に向つて相見せんと欲せば、猶ほ山を隔つることあらん。呵々。

正徳第五龍乙未に次る 穠九月旦

城州窮谷小衲愚中拜撰

①跋。後序に同じ、書籍の終りに其の書の來歴などを書ける文、「おくがき」のこと。

②呵々。笑ふ聲なり。
③正徳第五。正徳は中御門帝中の曆號、同五年は西紀一七一五年に當る。
④穠。秋の本字。
⑤撰。撰述なり、辭を屬し、事を記するをいふ。

國譯義雲和尚語錄の拾遺の序

宗眼日月を懸けて豁かに、妙辯江河を傾けて瀉ぐにあらざるよりは、安んぞ能く長夜に晃燭として
 枯焦に津潤たらんや。惟るに、夫れ雲霧祖は幼にして教海を掀翻し、長じて宗燈を挑起し、智光
 炬赫、慧澤、森茫たり。其の祖庭衰晩の日に當つて、奮然として出で、永平を董すに暨んでは、
 實に積闇をして頓に朗かに、乾叢をして忽ち蘇らしむ。謂つべし祖道を回復して、勳を百代
 に策すと。芝靈石、師の影に賛して謂く、「洞上の宗風を聞き、寶慶の密意を得たり。逸格
 の機を振ひ、大法の施を弘む、是れを中興永平の第一世と爲す」と云ふものも、亦敢て誣ひざ
 るなり。然して其の語録先彫存せず。後學焉を憾む。今、鷹峰老和尚の序を爲つて重刊するに

國譯義雲和尚語錄拾遺の序

①拾遺。のこれるを拾ふこと。
 ②義祖。祖師に同じ、蓋は先の義なり、故に先きに出世したる祖師のこと。
 ③炬赫。明かに盛なる貌。
 ④森茫。廣大なる貌。
 ⑤策。建奏の義。
 ⑥芝靈石の贊。建漸録に出づ、「惡掖の衣を裂き、方袍の義を輕くす、選佛場に登つて心空及第、洞上の宗風を聞き、寶慶の密意を得たり、逸格の機を振ひ、大法の施を弘む、春花を枯木枝頭に移し、霜蟄を夜明簾外に映す、こゝに華草

寶殿を現じ、瓊樓嵯嗟して叢林百廢の紀を起す、其の偉績豐功、是を中興永平の第一祖と爲す、永平堂上雲和尚繪相徒弟宗可贊を請ふ、因つて爲に筆を點す、佛鑑師師と賜ふ、杭の淨慈に住持する、八十有三、靈石叟如芝贊す、「靈石は虛堂愚に嗣ぐ、濟下の尊宿。鷹峰老和尚。石山道白のこと。穀且。吉且といふに同じ、穀は善なり。
 ⑦叟。「おきな」と訓す、老人の稱。
 ⑧盥沐。盥は手を洗ふこと、沐

逢ふ、誰か感喜せざらんや。仍つて我が山の室内を搜つて、又其の遺篇を拾ひ輯めて一卷と爲して、同じく梓に壽しうす。是れ時節因縁の現成する所以なり。希冀はくは前録と輝を交へて照臨し、源を同じうして流通せんことを。

惟れ時正徳第五、歳乙未に在るの孟秋、穀旦遠孫嗣祖比丘龍堂、叟即門

① 盥沐焚香九拜、龔んで越前州寶慶、練若の含光室中に題す。

は髪を洗ふこと。
① 練若、阿練若の略、梵名、阿蘭若、阿蘭攝に作り、遠離處、寂靜處、又は無諍處と譯す、閑靜無諍の義に依りて、或は法或は處に名け、或は一轉して隱者道士の稱とせらるゝことあるも、普通には比丘の住處たる寺院、精舎の如き閑靜にして諍聲なき處をいふ。

國譯義雲和尚語錄拾遺

永平禪寺語錄

歳朝上堂、青天一を得て以て清く、白日一を得て以て明かに、年一を得て以て稔り、月一を得て以て盈ち、人一を得て以て康樂に、國一を得て以て太平なり。何を以てか驗とせん。雨は一味を含んで潤ひ、土は萬物を吐いて榮ゆ。復た、宏智古佛の歳朝上堂を擧し、師韻を續いで曰く、三千を擧破して、二儀廓然、春は浩劫を含んで古今在前。蜂は不萌枝上の葉に舞ひ、人は無影樹頭の船に歌ふ。」

國譯義雲和尚語錄拾遺

遠孫寶慶住持比丘龍堂輯

① 住持。一寺の住職のこと、一寺に住して化門を張り佛の慧命を繼ぎ、佛法を久住護持するの意なり。
② 輯。斂なり、聚なり。
③ 稔。穀の熟するを稔といふ、實なり、賑なり。
④ 宏智古佛歳朝上堂語の偈、「歳朝坐禪、萬事自然、心々絶待、佛々現前、清白十分江上雪、謝郎滿意釣魚船。」
⑤ 三千、三千の諸法をいふ、三千とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の境界を十界とし、四融の妙理よりは此の十界互に十界を具すれば、相乘じて百界となる、百界の一々に性、相、體、力、作、因、緣、果、報、本末究竟の十如の義を有すれば、相乘じて千如となる、此の千如を各々衆生國土五陰の別あれば、相乘じて三千世間となる、これにて一切の法を盡すなり。
⑥ 二儀。天、地の二つ。

① 上元上堂、我が家に箇の無盡燈あり、古に亘り今に騰つて増減するにあらず。定光尊の授記を假らず、豈に飲光佛の處分に從はんや。靈山の拈花胸目、少室の得髓安心、黃梅夜半の密傳、石頭住山の斧子、皆是れ一燈下の風流のみ。道ふことを見ずや、「盡十方世界自己の光明裏にあり」と。還つて恁麼の光明を知らんと要すや。良久して云く、「韶風新雪自ら祥を爲す、一片の形霞和して光を發す。古佛誰か言ふ過去すること久しと。然燈半夜に朝陽を挑ぐ。」

② 涅槃會上堂、澹泊にして内搖ぐことなく、廓然として外亂れず。黃閣樓前簾垂れ、樞掩ふ。紫羅帳裏氣を斂め、聲を飲む。本明隱さず大虛の月の如く、寂照靈あり空谷の神に似たり。

① 上元。正月十五日なり。
 ② 無盡燈。一人の法を以て百千の人を開導し、展轉して盡きざること一燈を以て百燈を燃すに譬へていふ、此は横、今は縱の無盡燈なり。
 ③ 定光尊。梵名に提洹羯佛、錠光佛、又は然燈佛と譯す、足あるを錠といひ、足なきを燈といふ、定に作るは非なり、釋迦佛嘗て儒童と稱す、此の佛の出世の時五莖の蓮を買つて佛に奉る、以て未來成佛の授記を得。
 ④ 飲光佛。迦葉の譯名、自らの光にて他の微光を飲蔽する義、飲光と名付くるに二義あり、一は是れ祖先の姓なるが故に、一は彼の身に光明あるが故に名くと。
 ⑤ 黃梅夜半の密傳。大鑑慧能、蕪州黃梅の東禪院に五祖弘忍に謁し、碓房にあると八ヶ月、

「菩提本樹無し、明鏡亦臺にあらず、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん」の一偈を作つて、半夜五祖の衣法を相傳せるをいふ。
 ⑥ 石頭住山の斧子。景德傳燈普原章に曰く、「師、石頭をして書を持つて南嶽義和尚に與へしめて云く、書を達し了れば速かに回れ、吾れに箇の鐮斧子あり、汝に與へて住山せしめん。石頭彼に到る、未だ書を呈せずして乃ち問ふ、諸聖を慕はず、云云、乃ち歸る、師問ふ、書達するや否や、石頭云く、書復た達せず、信も亦通ぜず、師云く、作麼生、石頭云く、發する時和尚箇の鐮斧子を許す、即今便ち請ふ、師一足を垂る、石頭乃ち禮拜して南嶽に住す。」
 ⑦ 韶風。春色之を韶光といふ、又和暢の義。

⑧ 影體前に轉じて白雲青山の父に就き、光頂後に分つて新雪枯木の英を作す。四十九年一字不説、最後の句義誰あつてか論量せん。山を澤に藏し、舟を壑に藏す。釋迦老子何處にか身を藏す。良久して云く、「刹々塵々。」頷に云く、「半夜の鐘聲轉た霜に咽ぶ、倏然として雙樹春榮を變す。白毫輪裏自ら休歇、遺蔭、嶂嶂として柳絮聲し。」

⑨ 由西堂の遺書到る上堂、派を汲み源に投ず斯道の翁、離亭柳を折つて春風を約す。遺書及を藏して愁腸斷す、閃電光を捲いて碧空に没す。鳥道涯なし飛騰杳々、雲程定めず來去縦々。碧潭底に徹して清く、浮沫更に外なし。丈衆御來底の事は則ち礙へず、向去底の人什麼の處に向つてか去る。還つて委悉すや。花落

⑧ 形霞。形は赤色、今は赤き色の霞。
 ⑨ 古佛誰れか云々。慧忠國師の曰く、「古佛過去すること久し。」
 ⑩ 朝陽。日の已に出づるを朝陽といふ。
 ⑪ 澹泊。私慾なく俗氣を離れたるをいふ、無慾の貌。
 ⑫ 黃閣。丞相廳事の門をいふ、蓋し黃を以て門を塗るが故にいふなり、但し宗門にては多く禁庭の事に用ふと知るべし。
 ⑬ 聲を飲む。敢て聲を出さざるをいふ。
 ⑭ 影體前に云々。安智錄一上堂語に見ゆ。
 ⑮ 山を澤に藏し云々。莊子の太宗師の篇に曰く、「夫れ舟を壑に藏し、山を澤に藏す、之を固しと謂ふ、然して夜半有力の者之を負ひ去るも、而も味

者は知らず。」
 ⑯ 半夜の鐘聲云々。一統志三十三南陽府の山川に云く、「豐山は府城の東三十里に在り、山海經に曰く、山に九鐘有り、霜降れば鳴る」と、今は暗に之を用ふ。
 ⑰ 倏然。にはかなる貌。
 ⑱ 雙樹春榮を變す。雙樹は印度に産する落葉の喬木にして、高さ餘樹を凌ぐが故に、譯して高遠といふ、葉は楕圓形にして尖り、花は淡黄色なり。後分涅槃經に云く、「爾の時に世尊婆羅林中寶牀に寢臥す、其中夜に於て第四禪に入り寂然として聲無し、是に於て時頃あつて便ち紋涅槃し玉ふ、大覺世尊入涅槃し已れば、其の婆羅林東西の二雙合して一樹と爲り、南北の二雙合して一樹と爲つて寶牀を重覆し、如來を蓋ふ、其の時倏然とし

ちて風猶は覆しく、鳥啼いて山更に幽なり。

上堂、拄杖を拈じて云く、「拈じ來れば天を柱へ地を拈へて、黒漫々、放下すれば虎と化し龍と化して、閑聒々。一枝の花靈山に綻びて胸目綿々たり、五葉の芳少室に聯つて髓皮密々たり。

本性湛圓、心地の瑞光耀きを發し、六根互用、通身の手眼宜しきに隨ふ。直に得たり眼處に聞聲悟道し、耳處に見色明心することを。所以に道ふ、「石人汝に似たらば巴歌を唱ふることを解せん、汝、石人に似たらば須らく雪曲を和すべし」と。此に於て薦取せば、毘盧揖して下風に立ち、舜若窺つて頂を見さす。畢竟無依獨脱の時如何。」卓拄杖一下して下座す。

由西堂の爲にする上堂、春風飄拂として老梅の榮を奪ひ去り、臘月、依稀として嶺頭の雪

に和して投す。玄々として去つて去跡なく、密々として來つて來由を絶す。身を曠古空處に横へ、伴を十字街頭に借る。撥轉するや長潮疾風に乘じて雲外に激し、休罷するや怒濤湛海に沈んで衆流を飲む。其れ或は未だ然らずんば、日は自ら晝を照し、月は自ら秋を含む。復た擧す、乾峰和尚云く、「十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭什麼の處にかある。」拄杖を以て劃一劃して云く、「這裏にあり」と。師云く、「然も是の如くなり」と雖も、乾峰老漢既に拄杖に譏せらる。永平門下還つて譏せられざる底ありや。」拄杖を拈じて卓一下して下座す。

上堂、色聚にあらずして箇の身を受く、上天下地、識知を離れて本智あり、暗を超え明を越ゆ。若し又此の事を論せば、明珠の掌

て白に變ず猶ほ白鶴の如し。」

白毫輪。白毫光輪のこと、白毫光は佛三十二相の一、佛の兩眉の間に白毫あり、清淨柔軟にして右に旋轉し、常に光を放てりといふ。

遺隆。猶ほ餘深にいふが如し。

峰巒。山の高き貌、又深險なる貌、轉じて歲月の高く積み重りたること。

由西堂。肥後大慈寺二世新道紹由禪師、寒巖義尹の法嗣。

遺書。自ら預め死後に履行すべき事を記したる文書。

離亭。鄭谷が詩に云く、「數聲の風雨離亭の晚、君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。」

柳を折る。事苑四に云く、「古樂府に折楊柳あり、乃ち行役別離の意なり、故に送別に多く此の事を用ふ、直ちに柳を折るの謂には非ず。」

舜若。舜若多の略、梵名空性と譯す、即ち一切空無の性をいふなり、虚空神のこと。

臘月。臘は臘臘の義、月明かならざるをいふ。

依稀。彷彿なり、彷彿は見ることを審かならざる貌。

玄々。内外空寂寂として見難きをいふ。

乾峰。越州の乾峰禪師、洞山真价の法嗣、傳燈十七に此の話を載す。

十方薄伽梵、一路涅槃門。薄伽梵は梵語、世尊又は佛と譯す、涅槃は梵語、寂滅、又は無爲等と譯し、迷妄を破して證得する不生不滅の眞理をいふ、諸佛の妙法は法界に充滿す、然るに衆生は此の法に迷ふが故に生死に入れど、一度此の法を悟れば不生不滅の涅槃界に入る、故に此の佛の妙法こそ生死涅槃に入る門なり

縦々。事に超る貌。

花落ちて云々。王籍の詩に類似の句あり、云く、「風定んで花猶ほ落ち、鳥啼いて山更に幽なり。」

黒漫々。方語、不明の貌、漫漫は廣く遠き貌、即ち眞黒にして何物も見えざること。

閑聒々。閑は擾りて靜かならざること、聒々は無知の貌なりといひ、又多言にして人の意を亂すをいふともあり。

本性湛圓……雪曲を和すべし、宏智錄四、上堂語と大同小異なり。

毘盧。毘盧遮那の略、梵語、毘は徧、盧遮那は光明照の義なり、故に光明遍照といふ、華嚴天台の兩宗にては毘盧遮那は釋迦牟尼佛の内證たる靈體佛を特稱すと解すれども、眞言宗にては釋迦彌陀の別佛たる大日如來の梵名とせり。

との意なり。

色聚。色蘊のこと、蘊は積集の義、故に聚ともいふ、俱舍には五根五境無表色の十一なり、成實には五根五境四大十四なり、唯識には五根五境法處所攝色の十一なり、此等色法に種々差別あり、一に集めて色蘊とはいふなり。

識知。識は了別の義、根に依りて境を認識する主觀の心ないふ。

此の事。此の一大事の略、佛祖の大道を云ひ表はす換言業。

勾芒。木の神なり。

東帝。春を司る神なり。

與慶。愆慶に同じ、是の如くの意にて支那の俗語。

當山初祖。永平廣錄四、上堂語に見ゆ。

厥然。ぐわらつとして何もなき貌。

七三

にあるが如し。胡來れば胡現す十萬八千、漢來れば漢現す一念萬年。薦めば則ち慙慙に薦む、朝日の影の如く、退けば則ち慙慙に退く、水月の光に似たり。遮莫あれ嶽高うして四面雪消ゆること緩く、只だ看る雨下つて一庭艸自ら青きことを。②勾芒德振ふ萬國の際、③東帝改め成す一朶の花。正 與廢の時、如何が道中の事を辨せん。良久して云く、「龍枯木に吟じ、雲半天に起る。」

上堂、當山初祖擧す、梁の武帝達磨に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨曰く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對する者は誰ぞ。」磨曰く、「不識。」祖曰く、「達磨の不識を知らんと要すや、廓然無聖不識、汝得皮肉骨髓。人あり更に如何と問はゞ、伊をして三拜して位に依らしめん。」山僧一頌あり、「少林の消息人の知るなし、殘雪風に和して稍髓に入る。胡漢何ぞ問てん古鏡の中、依然として偏正當位にあり。」

暉首座の遺書到る上堂、消息を絶する處、倏忽消息を通ず。擧揚の時に當つて冷淡擧揚するに懶し、月落ちて、明暉潭底に徹し、風行いて虛碧蹤方を没す。④半座、⑤巍々として、⑥緇林の大位に倚り、⑦全身堂々として

③三拜して位に依る。二祖慧可得髓の因縁。
④暉首座。懷暉首座、徹通義介の法嗣。首座は首衆、又は第一座とも稱して、叢林に於ける大衆の首位に居るなり、六頭首の一、多年還參の功成りて大事了畢の者を以て任ずる職なり。

①明暉。暉は「ひかり」、又は「かがやく」と訓す、今暉首座の名に因みていふなり。
②半座。一師家が、門下の首位にあるものに自己の法座を分ちて説法化度せるをいふ、往昔釋尊、迦葉のために半座を與へ玉へるに初まる。
③巍々。獨立廣大の貌。
④緇林。緇は黒色をいひ、僧の著する法衣は黒色を以て常となす、所謂墨染なり、故に僧衆を緇林といふなり。
⑤堂々。いかめしく立派な貌、

①如幻の三昧に入る。正與廢の時、還つて入理深談の分ありや。良久して云く、「泥牛水月に吼え、木馬春風に嘶く。」

上堂、山、②四運に應じて不動の身を現じ、水、大洋に到つて衆流の響を飲む。事々虚通縁に涉らず、心々絶待佛性を見る。宗本去來の路を絶す。門未だ出入の人を障へず。大衆孰か是れ入門の人、諸人須らく知るべし。諸聖俱に、③萬行の門より得入すと雖も、佛々祖々親しく、④面授する所は、坐禪是れ正門なり。所以に達磨西來餘行を務めず、經論を講せず、只だ少林にあつて九年面壁するのみ。實に知んぬ坐禪は則ち、⑤正法眼藏涅槃妙心、又是れ傳法救迷情の直路なることを。兄弟須らく光陰を惜んで坐禪辨道すべし。古人云く、「人の車に駕するが如き、車若し行かすんば車を打つが即ち是か、牛を打つが即ち是か。大衆如何が受持せん」と。良久して云く、「如是如是。」

暉首座の爲にする上堂、吉祥雲白うして山林瑞を爲し、洞水派分れて性海瀾を收む。東關叢席、⑥座頭唱へ大いに、北陸戲場、⑦合殺の筵寒し、玉兔懷胎して碧空に走る。驅馬追へども及ばず。⑧金鳥卵を抱いて潭底に落

明かにあらはれたる貌。
①如幻三昧。一切諸法の如幻の理に達する三昧なり、又種々如幻の事を現作する三昧なり、百八三昧の隨一なりといふ。
②四運。四時のこと。四氣、四序といふも皆同じ。
③萬行。一切の行法をいふ、六度萬行などといふ是れなり。
④面授。師と弟子と顔々相對して授くるをいふ、經論の釋義又は文書の相傳に對す。
⑤正法眼藏、涅槃妙心。靈山會上釋尊拈華付屬の語を起源とし、歷代佛祖正傳し來れる佛法を稱して正法眼藏涅槃妙心といふに至れり。正とは邪に對するに非ず、正邪超越中正不偏の心體をいふ、法とは其の中正不偏の心體より顯現する萬法をいふ、眼とは此の心體を以て事々物々を照破する

つ、俊鷹戯れども看えず。石女杼を抛つて涙を拭ひ、木人友を失つて肝を迷はす。暉座元已に脚足を收めて、行脚す、還つて生死の關を踏斷すや也た未だしや。那邊に向つて影を避けんと欲すれば影彌露はる。這裡に來つて體を窺はんと擬すれば體還つて虚なり。道ふことを見すや、身を藏する處、没蹤跡、没蹤跡の處身を藏すること莫れ」と。没蹤跡の處は且く致く、如何なるか是れ莫藏身の處。良久して云く、「雪四山を覆ふ、雲は是れ一抹。」

開爐上堂、桃花開く時、靈雲と合頭して、赤心片々、火爐閉づる處箇裏高下なくして行地平平。古に亘り今に騰り桃紅柳綠、諸人の見處と靈雲とは是れ同か是れ別か。若し同と道はゞ、直に如今に至つて更に疑はず。若し別と道はゞ、幾

師子吼無畏是れなり。

合殺。殺は散なり、歌曲の終をいふ。谷響集に云く、「梵樂の儀則、讀經行道す、唱首隊を引く、諸衆屬して和す、其の將に終らんとする曲調を名けて合殺といふなり。」

玉兔懷胎。月中に形有り、兔の如し、故に月を玉兔といふ。圓悟擊節七十三則に、「免子は雄無し、中秋の月夜月光を呑んで孕む、口より子を産む。」金鳥。日は太陽の精、鳥象あり、故に金鳥といふ。

座元。首座のこと、蓋し首座は僧堂座位の元首なるが故なり。

行脚。善友良師を尋れて諸國を遊行し、山川を跋涉するをいふ。今日の旅行に似たれど、其の目的とする所は、尋所問法道心を修練し、求法證悟するにあり。

回か葉落ちて又枝を抽く。此に於て明め得ば、生死の根源便ち坐得斷し、本來の家業正に現在前せん。還つて委悉すや。主山は高うして峻々、案山は翠にして青々たり。

上堂、雨四山に灑いで春色媚ぶ、黃鳥啼き斷ゆ緑楊の枝。爲に憐む歲月の蹉跎し去ること、壯年を復して老衰を改め難し。諸仁者、直に須らく道と仔細に相應すべし、虚しく時光を度るべからず。此の生、強ひて愛惜することなかれ、一息を轉すれば則ち來生なり。況んや又佛祖の正法に相逢ふこと、優曇花の開くより稀なり。須らく頭然を救ふて辨道すべし。應に知るべし、坐禪の一門は便ち直指人心見性成佛の西來意なることを。君に勸む尋常蒲團上に坐して身心脱落せよ。兄弟須らく知るべ

に、一點も明かならざる所なきをいふ、藏とはこの心體は一切の善法を含藏して餘す所なきをいふ、涅槃とはこの心體の常住不變にして、生滅去來の相を絶するをいふ、妙心とは心體の妙用不可思議なるをいふ。畢竟するに正法眼藏涅槃妙心とは吾人本具の一心の妙徳を形容したるものにして、悟道といひ、證契といふも、この一心を徹見して其の光明を發揮せしむるに過ぎざるなり。

古人。南嶽懷讓禪師なり、會元三、師の章に見ゆ。座頭。座の頭主の意、増一阿含第廿に佛四種の座を説く、謂く、卑座、天座、梵座、佛座なり、次第の如く輪、帝、梵、佛の座なり、就中佛座は是れ四諸の座なり、乃至佛座は四神足の座なり、四神足は所謂

道ふことを見すや。會元五、船子德誠禪師夾山に囑して云く、「汝向後去つて直に須らく身を藏すべし、身を藏する處没蹤跡、没蹤跡の處身を藏すること莫れ。」没蹤跡。没は絶なり無なり、事物の痕跡なきこと、恰も鳥の空を翔るが如く、魚の水中を行くが如き、無罣礙の行履をいふ。

主山、案山。支那にて宮城等宅を創營するに地理を相し、北に當つて一番高きを主山、南に當つて少しく低きを案山といふ、但し今は案山は前山、主山は後山といふ程の意。峻々。高峻の貌。蹉跎。時を失ふをいふ。諸仁者。仁者は道人を尊敬していふ語。頭然を救ふ。頭に火の燃えつきたるを救ふの義、頭に火の燃えつきたる時は何人も急いで之を消さんとすべし、萬事を地つて急に精進辨道することに喩ふ。直指人心見性成佛。見性成佛とは見性即成佛の意にして、自己の心性を徹見し、諸法實相の當體と一致することはいふ。達磨大師の語といはるゝ偈に、「不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛」とあり。

し、**外道**。二乗も坐禪を營むことあることを。然りと雖も佛祖の單傳と天地懸隔なり、外道は我々所の執を以ての故に、邪見著味の過あり。二乗は自調自度を以ての故に、涅槃擇滅の病あり。所以に道ふ、「盡く情の所計に屬す」と。六十二見の本、甚としてか二乗外道を折伏して、佛祖の正路に趣向せん。見すや、六祖云く、「一切の善惡都て思量すること莫れ、自然に清淨の心體に入ることを得ん。坦然常寂妙用恒沙なり」と。還つて委悉すや、良久して云く、「利劍死漢を截らす。」

上堂、七佛の宗風今猶ほ未だ息まず。向上の關候誰か敢て打開せん。快便空しく過し難し。處に隨つて法幢を建つ。有る時は孤峰頂上に艸庵を盤結して、佛を呵し祖を罵る。有る

①身心脱落。脱落は「もぬける」といふ意にて、身心共に此の儘にして、此の身心は我物なりとの執着を離れ、無我の境界に入るをいふ。

②外道。佛教徒以外のものをいふ、釋尊出世當時の六十二種の外道の如きこれなり。

③二乗。聲聞乘、緣覺乘のこと。

④我々所。我は五蘊中に於て妄計して我といふ、我所は即ち五蘊の身等なり。

⑤邪見著味。大論に云く、「外道の禪中に三種の患あり、或は味著或は邪見或は憍慢なり。」又云く、「外道は禪定樂を得、其の心に樂著し味を受ず、味とは初めて禪定を得、一心に受樂す、是を味となす。」四教儀集註に云く、「邪見は斷常を計るに由る、因果を信ぜず、復た此の我を計して以て自然に冥初無性と爲す、或は父母

⑥微塵梵天等より生ずと計す。」

⑦自調自度。大智度論第六十一に云く、「二乗は持戒を自調となす、修禪を自淨となす、智慧を自度となす、又獨一解脫なり、故に孤調解脫と曰ふ、皆利他なき故に貶して云ふのみ。」

⑧涅槃擇滅の病。俱舍論頌疏一に云く、「諸の冥滅は即ち是れ擇滅なり、佛世尊煩惱を斷じ、無生の法を證するに因つて名けて擇滅となす、擇は慧なり、四聖諦を簡擇するに由るが故に、滅とは涅槃なり、不生を滅と名く。」楞嚴釋要鈔に云く、「擇は是れ智、滅は是れ理、智惑障を簡擇するに由るが故に滅諦の理を證す。」

⑨所以に道ふ。六祖壇經志道章に見ゆ。

⑩六十二見。五蘊の内外に約して即離大小を論するが故に二

時は荒村里中に身を放つて遊逸し、合水和泥す。之れを上せども虚空界に登らず、之を下せども塵泥の底に沈まず、所以に道ふ、「一毫端に寶王刹を建て、微塵裏に坐して大法輪を轉す」と、甚としてか慙麼なる。橋を過ぐれば村酒美なり、岸を隔て、野花香し。

佛生會上堂、賊既に指點して賊身露る。宇宙尊と稱して還つて自ら瞞す。一杓の熱湯鷄頭に灑ぐ、矜誇滌盡して芳顔を見る。韶陽老、棒頭の迅雷、狂狗土塊を逐ひ、遵布衲、杓中の香水、櫻兒玉盤にあり。且く問ふ、布衲者箇を浴得することは則ち且く致く、什麼物をか把將し來らん。良久して云く、「一事に因らざれば一智に達すること無し。」

結夏上堂、時に應じて號令回遯し難し。曠古

十と成り、三世に經歷して六十となり、斷定の二見を加へて六十二となる、而してこれ我を以て根本となす。

①六祖。大鑑慧能禪師。次の語壇經宣詔第九に見ゆ、云く、「汝若し心要を知らんと欲せば、但だ一切の善惡都て思慮することなかれ、自然に清淨の心體に入ることを得ん、坦然常寂妙用恒沙なり。」

②坦然。廣く平かなる貌。

③利劍死漢を截らす。前寶壽の語、傳燈、會元等に出づ。

④七佛。過去七佛のこと、前註を見よ。

⑤向上の關候。關候は關門の鍵のこと、言詮不及、意路不到なる玄妙の奧義といふこと、黃檗の語。

⑥孤峰頂上。孤峰は山の重疊せる處に特に一段と聳ゆる峰をいふ。會元七德山の章に云く、

「孤峰云く、此の子以後孤峰頂上に向つて草庵を盤結し、佛を呵し、祖を罵り去ることあらん」とあり。

⑦遊逸。逸は快に同じ、安快は不勞なり、又逸は縱なり。

⑧賊。賊の盜み取りたる財物をいふ。

⑨矜誇。ほこること。

⑩韶陽老。雲門文偃禪師のこと、師は支那廣東省韶州雲門山光泰寺に住せしが故にいふ。

⑪遵布衲。會元五、藥山章に云く、「遵布衲浴佛す、山云く、這箇は汝が浴するに従ず、還つて那箇を浴得すや、遵布衲、那箇を把得し來る、山乃ち休す。」布衲は比丘の通稱、猶ほ布衣の衲僧と言はんが如し、但だ宗門中の通語のみ。

⑫玉盤。美器なり。

⑬一事に云々。雲門錄、井に宏智錄浴佛上堂語に類似の語あり。

の規繩大方を成す。許さず行雲の嶺外に遊ぶことを。珠、金盤に轉じて靈光を發す。百川、駛々として派を同じうし、大海、洋々として天を涵す。三月護生、無生の道を行す。十虛誰をしてか神足の通するを禁せん。箇中の履踐、畢竟如何。上り難きの岸に行くこと莫れ。鳥飛んで空を出でず。

上堂、混沌未分早く此の土あり。三世の諸佛此に於て魔軍を降し正覺を成じ、大千界に於て妙法輪を轉す。諸代の祖師此に於て不陰陽の地を領じ、無影樹頭に坐し、千聖不傳底の向上の一門を開き、諸佛未説底の秘要の大義を演ぶ。所以に道ふ、「吾本來茲土、傳法救迷情」と。傳法救迷情は且く致く、什麼の處か是れ茲土なる。拄杖を以て劃一劃して云く、「此に於て擬議せば十萬八千、如何なるか是れ向上の一門。」拄杖を卓して云く、「箇の杖子跳り上つて、帝釋の鼻孔に、築著す。還つて秘要の大義を聽かんと要すや。」卓拄杖一下して云く、「人に逢ふて舉似すること莫れ。」
上堂、尺壁財にあらず、璞を楚庭に抱いて足を削らる。寸塊賤しからず、沙を金輪に供して臺を得たり。昨日は定法を説く、天、雷達、地

り。云く、「一事に因らざれば一智を長じ難し。」
① 駛々、駛は快に同じ、はやく形容。
② 洋々、流動充滿の貌。
③ 無生の道、世間生滅の相を離れたる大道をいふ、即ち佛道のこと。
④ 十虛、十方虛空の略。
⑤ 三世の諸佛此に於て云々、妙經七、神力品に云く、「諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、此に於て法輪を轉じ、此に於て般若涅槃す。」
⑥ 吾本來茲土、二句達磨の偈中の起承なり。
⑦ 帝釋、梵語、釋桓因のこと、梵漢兼舉の語、能天主と譯す、須彌山の頂上、初利天の天主にして喜見城に居り、三十三天及び四天王を統領して佛法歸依の人を守護す、阿修羅の軍を征す。又帝釋天、天帝釋

安寧。今朝は不定法を説く、風條を鳴し、雨塊を破る。拄杖を拈じ卓一下して云く、「這裏是れ什麼の處在ぞ。定と説き不定と説く、者の一杖子、半は天を拄へ半は地を拄ふ。既に兩頭に分附あり、一分は地下の釋迦に奉り、一分は天上の彌勒に奉る。且く現前の大衆に什麼を以てか奉獻せん。」良久して云く、「脚下是れ黄金。」
上堂、胡種族の道は、木人劫前の印を把つて泥牛に印し、虚空に印し、石女肘後の符を分つて賊軍を護し、家子を護す。一人化大にして恩澤を開き、萬國、安帖にして太平を歌ふ。
此に於て蹉過せば、聲前に會肯するも尙ほ顧鑑の端に滞り、言下、宗に契ふも未だ情識の際を出でず。只だ是れ夢中に夢を説く。記得、舍利弗、須菩提に問ふ、「夢中に六波

ともいふ。此の語雲門の語、云く、「扇子勃跳して三十三天に上つて、帝釋の鼻孔に築著す、東海の鯉魚打つこと一棒すれば、兩盆を傾くるに似たり。」
① 築著、打ちあたること。
② 璞を楚庭に抱いて足を削らる。韓非子に云く、「楚人下和玉を楚の厲王に獻す、王の曰く、石なり、使を遣して一足を削る、武王即位するに及んで、又之を獻す、武王又怒つて復た一足を削る、楚の文王立つに至り、和、璞を抱いて荆山の下に哭す、文王召して謂つて曰く、足を削るもの何ぞ然るや、和云く、足を削ることとを怨まず、眞玉を以て瓦石となし、忠事を以て漫事と爲すを怨む、是を以て哭すと、文王乃ち工をして石を削らしむるに乃ち眞玉なり、文王嘆

じて云く、哀れなる哉二先君、人の足を削ること易うして石を削ること難き。」
③ 沙を金輪に供して臺を得たり。密家に金輪佛頂あり、故に金輪とは佛をいふ也、又云く、「天輪聖王の意なり。」阿育王經一に曰く、「佛在世の時閻那童子有り、砂を以て模と名けて佛鉢に捧げ内る、佛即ち之を記す、我入涅槃して百年の後、當に波吒利弗多城に生じて阿育王と名くべし、四分轉輪王として正法を信樂せん」と。
④ 昨日は定法を説く云々、會元一に曰く、「世尊因みに外道問ふ、昨日は何の法を説く、曰く、定法を説く、外道曰く、今日は何の法を説く、曰く、不定法外、道曰く、昨日は定法を説く、今日は何ぞ不定法を説く、世尊曰く、昨日は定、

羅密を説くと覺の時と、是れ同か是れ別か。須菩提云く、「此の義幽深我れ解すること能はず、此の會に彌勒大士あり、汝往いて彼に問へ」と。雪竇拈して云く、「當時若し放過せずんば、後に隨つて一箭を與へん。誰をか彌勒と名く、誰か是れ彌勒なる者ぞ」と。便ち氷消瓦解を見ん。大衆、雪竇恁麼の伎倆ありと雖も、未だ免れず他の脚跟後に隨ふことを。永平は然らず、舍利弗の夢中に六波羅密を説くと覺の時と、是れ同か是れ別かと問ふに當つて、須菩提に代つて道はん、「憐れむべし去日顔玉の如し」と。却つて歎く歸時鬢霜に似たることを。須菩提甚としてか道ふ、「此の義幽深我れ解すること能はず、此の會に彌勒大士あり、汝往いて彼に問へ」と。索、短うして深泉に構らず、絲長うして便

- ① 今日に不定。
- ② 密達。磨き鏡。
- ③ 風條を鳴らし云々。王充論衡第十七卷是應篇に云く、「太平の世には五日一風、十日一雨、風條を鳴らさず、雨壤を壞らす。」
- ④ 胡種族の道。佛道のことをいふ、支那人は印度等の諸外國を胡と稱す、釋迦、達磨皆印度人なるが故に斯くいふ。
- ⑤ 一人。天子を指す。詩の大雅燕民篇に云く、「夙夜解かず、以て一人に事ふ」と。
- ⑥ 安帖。安は安なり、平なり、帖は靜なり、安帖は猶ほ安靜といはんが如し。
- ⑦ 聲前。音聲の未だ發せざる以前の意。
- ⑧ 願鏗。願は振り廻り見ること、鏗は自ら省みること、次の情識と同じく思慮分別の意。
- ⑨ 記得す。舍利弗、須菩提の問答大般若第三百三十、及び同第四百五十一卷に見ゆ。
- ⑩ 舍利弗。梵名舍利補坦羅、又は舍利弗多羅に作る、舊譯には身子、新譯には鷲鷲子といふ、佛十大弟子の一、智慧第一の稱あり、目連と共に六師外道の一人なる沙然に従ひ、各一百の弟子を有せしが、釋尊成道の後、相共に弟子となれり。
- ⑪ 須菩提。善現、善業、空生、善吉などと譯す、佛十大弟子の一、解空第一と稱せらる、もと舍衛國の長者なり、其の性慈悲深く、出家して無諍三昧に入り、常に能く善業を修す、故に善業と名くと。
- ⑫ 六波羅密。波羅密は梵語、度又は到彼岸と譯す、六度といふも同じ、生死の此岸より涅槃の彼岸に到るの意なり。一檀那(布施)、二尸羅(戒)、

ち巨浸に垂る。畢竟作發生。之を争へば足らず、之を譲れば餘あり。

上堂、獅子兒にあらざれば、獅子窟に遊戯すること能はず。虚空者にあらざれば、争か虚空と對談することを得ん。地、平かにして千峰千巒の泰山を築げ、石、魯にして無等無價の寶玉を含む。古人甚としてか博を磨して鏡と爲さんことを要せりや。是れ古鏡か是れ明鏡か。若し兩鏡相照して、中に於て一點の塵なしと道はゞ、何ぞ措磨の手段を用ひん。諸人試みに斷せよ看ん。若し斷することを得ずんば、坐して三生六十劫を経るも、只だ是れ小伎の野狐精なり。兀坐の時に當つて碧眼の胡僧、汝が掌中に於て身を藏し眼を開くことあらん。慚愧慚愧。

- ① 三に彌提(忍辱)、四に毘梨耶(精進)、五に禪那(靜慮)、六に般若(智慧)是れなり。
- ② 雪竇。支那浙江省明州慶元府雪竇山重顯禪師、智門光祚の法嗣。次の舉拈は明覺錄二に見ゆ。
- ③ 一割。割は減なり、痛切なる一問をいふ。
- ④ 憐むべし云々。此の二句、杜甫の詩、又十玄談に見ゆ。
- ⑤ 巨浸。大海のこと。
- ⑥ 魯。魯鈍なり、愚に同じ。
- ⑦ 古人。南嶽懷讓禪師を指す、磨磚作鏡の因縁は有名なり、前註既に詳説す、就いて看よ。
- ⑧ 措磨。措は摩拭なり、すりみがくこと。
- ⑨ 三生六十劫。俱舍の賢聖品に云く、「聲聞の利根は三生に證理得果、鈍根は六十劫、緣覺は四生百劫」と。今は甚遠の意に用ひたるなり。
- ⑩ 小伎。伎はわざ、或は「たぐみ」と訓じ、才能の意。
- ⑪ 野狐精。野狐は狐のこと、精は獸類樹木等の年老いたるものをいふ。狐は壽八百歳、三百歳に至れば漸く變じて人となるといふ、今は人を欺き誑すものに喩ふ。
- ⑫ 碧眼の胡僧。達磨大師のこと。印度の產たるが故に胡僧といひ、師の眼、紺青の色あり、故に稱して碧眼といふ。
- ⑬ 端午。月の五日は皆端午と稱して可なり、されど普通は重午日即ち五月五日をいふ。
- ⑭ 霖霖。共に久雨をいふ。兩三日以上を霖雨といひ、十日以上を霖と稱す。
- ⑮ 洽然。洽は霑濡周遍なり、うるほす貌。
- ⑯ 除差。二字共に病の去るをいふ、瘥に同じ。
- ⑰ 鬼魅。韓詩外傳に云く、「人死

① 端午上堂、梅雨、霖露たり斯れ一味、甘露
 ② 治然として萬叢を生ず。鬻病眼裏に、除差し
 て、空花何ぞ目瞳を瞞せん。外都て、鬼魅の怪
 なし、家誰か、白澤の圖を用ひん。然も是の如
 くなりと雖も、一莖の藥草を拈じて生殺を分
 ち、七尺の鐵棒を與へて佛魔を驅る。還つて莖
 草を費さず、棒力を假らざる底の對治ありや。
 良久して云く、「怪を見て怪とせざれば、其の
 怪自ら除く。」

上堂、道は虚空の外なきが若し。遮障なし
 と雖も到る人稀なり。裏頭更に、彈指を用ひず。
 櫻閣風推し月扉を啓く。記得す、當山初祖云
 く、「昔、唐虞、人の法を犯すあれば、僅かに其
 の衣服に畫くのみ。然れども人の法を犯すなき
 は法を重んずる所以なり。後來、五刑の辛法を

して其の陰氣滯然として、獨
 り存して依る所なし、故に鬼
 といふ」と、魅は説文に「老
 精物なり、人面鬼身四足、好
 んで人を惑はし、山林異氣の
 生ずる所なり」と。
 ② 白澤の圖。廣博物志の十九異
 獸の部に云く、「黃帝内傳に云
 く、帝東方に巡狩して海に至
 り、恒山に登る、海濱に於て
 白澤神獸を得、其の形六角九
 目、能く言ひ萬物の情に達
 す、帝則ち天下鬼神の事を問
 ふ、白澤言く、古より精氣物
 となり、游魂變りたる者凡三
 萬一千五百二十種なりと、帝
 之を聞いて之を圖寫せしめ、
 以て天下に示す、帝乃ち辟邪
 の文を作し、以て之を祝す。」
 ③ 一莖の藥草を拈じて生殺を分
 つ。文殊一日善財をして藥を
 採らしめて云く、是れ藥なる
 もの採り持ち來れと、善財大

地を福觀するに、是れ藥なら
 ざるなし、文殊に白して云
 く、是れ藥ならざるもの有る
 ことなし、文殊曰く、是れ藥
 なるもの採り持ち來れ、善財
 遂に一枝草を拈じて文殊に度
 與す、文殊提起して衆に示し
 て云く、此の藥亦能く人を殺
 し亦能く人を活すと、類の藥
 餌品に出づ。本は佛說奈女耆
 域因緣經に見ゆ。
 ④ 怪を見て云々。性理字義に云
 く、「大抵妖は人に由つて興
 る、人以て怪となせば怪、以
 て怪となさざれば不怪。」
 ⑤ 彈指。指を以て彈くこと、驚
 覺彈指及び不淨彈指の二あ
 り。
 ⑥ 當山初祖云く。永平廣錄二に
 出づ、晚間上堂の語なり。
 ⑦ 唐虞。堯舜のこと。
 ⑧ 五刑。一、墨、其の額に點黥し
 て涅するに墨を以てす、二、

行ふと雖も、而も人の法を犯すもの多し、是れ法を重んぜざる所以なり。
 我が儘、幸に唐虞に比すべからざるの佛正法に逢ふ。縦ひ衣服に畫かざ
 るも、豈に法を犯す者ならんや。若し又之を犯さば佛法を重んぜざるな
 り。苦なる哉。復た擧す、南泉、黃檗に問ふ、「什麼の處にか去る。」
 檗曰く、「菜を擇び去る。」泉曰く、「什麼を將つてか擇ぶ。」檗、刀子を豎起
 す。泉曰く、「只だ客と作ることを解して、主となることを解せず」と。祖、
 拈じて云く、「若し、大佛、黃檗の刀子を豎起する時に當つて南泉に代つて
 道はん、我が王庫の内是の如きの刀なし、大佛門下又且つ如何。劍去つ
 て久し、敢て船を刻むこと莫れ」と。師曰く、「甚としてか是の如く道ふや。」
 良久して云く、「陶壁の靈梭、雲を起し霧を吐く。」
 上堂擧す、曹山に因に僧問ふ、「眞佛出世すや也た否や。」山曰く、「出世
 せず。」僧云く、「眞佛を奈せん。」山曰く、「瑠璃瓶子の口。」僧無語。宏智古佛
 拈じて曰く、「通身及盡、徹底無依、手を撒して與に來り、隨處に用ふる
 ことを得たり。還つて曹山老漢を識るや、戸に當つて影迹なし、徧界曾て
 藏さす」と。師拈じて云く、「者の僧煙を見て火を怪しむ、曹山只だ身を藏す

劍、鼻を截る、三、剃、足を削
 る、四、宮、淫刑なり、男子
 は勢を割き、婦人は幽閉す、
 五、大辟、死刑なり。
 ① 南泉。池陽南泉普願禪師、馬
 祖道一の法嗣。
 ② 黃檗。支那福建省福州府福清
 縣黃檗山希運禪師、百丈懷海
 の法嗣。
 ③ 大佛。道元禪師の自稱なり、
 永平寺未だ改名せず、大佛寺
 と稱したる時なればなり。
 ④ 劍去つて久し云云。東寺如
 會禪師の語、會元三に出づ。
 呂氏春秋に云く、「楚人江を涉
 り、舟を行ふこと有り、劍を
 遺す、遂に其の舟を刻んで曰
 く、我れ此に於て劍を隨す、
 求むれば必ず之を得んと。」
 ⑤ 陶壁の靈梭。梭は篋に通じ、
 機織の時緯を送る「ひ」の義
 とす。晋書列傳に出づる故
 事。晋の陶侃、少時雷澤に漁

ことを解して、角を露はすことを覺えず。宏智恐らくは猶ほ多岐に渉る。永平分上又且つ如何。周體清虛縁に渉らす。元來心月自ら孤圓。誰か這裏に臻つて存没を論せん。色聚頭邊、普賢を看る。」

上堂、長劍高く揮つて、龍蛇の陣を驚し、獅子一吼して象虎の橋を伏す。見すや達磨大師、六宗の關鎖を、踢倒して、大いに正路を通じ、五葉の瑞英を抽開して、永く祖林を興す。直に得たり、龍吟じて雲起り、虎嘯いて風隨ふことを。記得す、臨濟云く、「夫れ出家人は見解真正にして、佛を辨じ、魔を辨じ、凡を辨じ、聖を辨じ、眞を辨じ、偽を辨じ、正を辨じ、邪を辨す。佛魔未だ辨せず、邪正未だ辨せずんば一家を出で、一家に入る。喚んで造業の衆生と作す、是れ眞の出家にあらず」と。諸人已に父母の家郷を離れて佛祖の屋裏に入ることを得たり。豈に還つて造業の衆生と成るべけんや。但だ是れ利を貪り名に耽り、生を愛し死を憎み、自を是とし他を非とするに因るのみ。生死事大、無常迅速、古の責之にあり。面前の一團子、虚しく落地せしむること莫れ。甚としてか是の如くなる。良久して曰く、「正理の人は曲げて斷ることなし。」

し、一の機縁を綱し得たり、壁上に掛けて後一日雷電あり、化して忽ち龍と爲り去ると。

曹山。支那江西省撫州曹山崇壽院本寂禪師、洞山良价の法嗣。此の語は傳燈、會元共に石霜の章に出づ。宏智拈古又石霜に作る、今恐らくは暗起失誤、以て曹山となすならん。手を撒す。撒は「ちらす」、又は「はなつ」と訓す、兩手を放ち開きて何物をも取らず、何處にもか、はらざるをいふ。普賢。梵に三曼跋陀羅、又遍吉と譯す、善は普徧、賢は賢善にして徳の法界に周きを譬といひ、至順にして善を調ふるを賢といふ、此の普賢は阿彌陀佛が因位の無淨念王なりし時の第八王子にて、其の第三子文殊菩薩と共に悲と智、定と慧、行と證との一雙一類

上堂、十方通徹の眼を具する底の人、針眼裏に身を藏すること能はず。四域照輝の光を揚ぐる底の月、未だ免れず深淵水に沈没することを。一出一入、半合半開、龍泉と鋤斧と、鐵を同じうして利鈍懸に殊なり。駝驢と驢驘と、途を一にして運速大いに別なり。甚としてか是の如くなる。先行不到、末後太過、然も恁麼なりと雖も、我が者裏は然らず。良久して曰く、「行くときは歩を同じうし、臥す時は床を一にす。」

中夏上堂、法王の令下つて詐還つて作る。半路に、陽燄を追ふて休すること莫れ。意氣ある時に意氣を添ふ。風流ならざる處也た風流。記得す、瑯琊云く、「奇なる哉、十方の佛元是れ眼中の花。眼中の花を識らんと欲せば、

の代表者なり、十大願を具し常に佛に隨ひて學び、恒に衆生の機に應じて化度す、普賢の像は悲定行を現はすために六牙の白象に乗る。龍蛇の陣。武備志五十五に云く、「東方は青龍の獸なり、龍陣といふ、西方は白虎の獸なり、虎陣といふ、南方は朱雀の獸なり、鳥陣といふ、北方は玄武の獸なり、蛇陣といふ、中を中陣といふ。」六宗。第一有相宗、第二無相宗、第三定慧宗、第四戒行宗、第五無得宗、第六寂靜宗是れなり、會元一達磨大師の章に見ゆ。踢倒。踢は蹴倒すること。臨濟。支那直隸省鎮州臨濟院義玄禪師、黃檗希運の法嗣。此の語は臨濟錄に載す。生死事大無常迅速。六祖壇經機緣第七に出づ、永嘉大師の語。無常は常任ならずして遷流變轉窮りなきをいふ。一出一入云々。明覺錄第二上堂に云く、「龍泉と刀斧と鐵を同じうして利鈍懸かに殊なる、駝驢と驢驘と途を同じうして運速異あり、酌然酌然、一出一入、半合半開、平展の流、試みに縋索を辨ぜよ。」龍泉。劍の名、越絶書に見ゆ。駝驢。駝は荷を負はす馬、驢は「うさぎうま」のこと。驢驘。驢馬、周の穆王の八駿の一。先行不到云々。此の二句は洞山玄中銘の語。法王。佛のこと、佛は法に於て自在なる義よりして法王といふ。陽燄を追ふ。前註に云へる如く、渴鹿陽炎を追ふの義。意氣ある時に云々。白雲端、黃

元是れ十方の佛。十方の佛を識らんと欲せば、是れ眼中の花にあらず。眼中の花を識らんと欲せば、是れ十方の佛にあらず。此に於て明め得ば、過十方の佛にあり。若し明め得ずんば、聲聞舞を作し、緣覺臨粧せん」と。大衆恁麼の道理を委悉せんと要すや。水は自ら東に朝し、星は皆北に拱す。

上堂、炎々たる火景布いて縦横、忽地爲に警む一葉の風。始めて信す熱寒臻らざる處、蘆花雪を帯びて玉玲瓏。巴猿月に叫んで露虛碧を涵し、老鶴陰に舞ふて雛銀籠を出づ。甚としか道ふ「上に攀仰なく、下己躬を絶す」と。之を仰げば彌高し、梵王は佛頂相を窺ひ得ず。之を聞けば稍遠し。目連終に梵音聲を窮むることなし。甚としてか是の如くなる。虎窟に入らず

王の略、印度教の神名にして、彼にありては天地創造の神として諸神の主位を占む、佛敎にては佛經保護の神として信仰せらる。止觀に云く、「若し如来を見れば、身相一切現せざる所なし、明淨鏡の衆の色像を觀るが如し、一々の相好、凡聖其の邊を得ず、梵天も其の頂を見ず、目連も其の聲を窮めず。」

目連。目連連、摩訶目連連、目健羅夜那等といふ、佛十大弟子の一、神通第一と稱せらる、大論に云く、「是の時目連心に念へらく、佛聲の近遠を知らんと欲す、即時に己が神通力を以て無量千萬億佛世界に去つて、息ふて佛の音聲を聞くに、近づくが如くに異ならず、一中略一彼の佛目伽路子度に問ふ、汝何を以て此に來るや、目連答へて言く、我れ

んば争か虎子を得ん。大衆佛頂相を看んと要すや。拂子を竖起して云く、「螺髮右旋、梵音聲を聞かんと要すや。」拂柄を以て禪床を撃つて云く、「舌、口を出でず。」

上堂、丙丁童子來つて自ら火を求む、盡地砂を蒸し天際雲を蒸す。須彌の外、鐵圍の内、宛然として發開す。諸佛及び衆生、練得すや也。未だしや。調達は中に處して三禪天を樂む。其れ或は未だ然らずんば、一柄の扇子、動容秋を作す。復た擧す、麻谷、扇を搖すの次、僧便ち問ふ、「風性常住、無處不周、甚としてか和尚更に搖扇すや。」谷曰く、「汝只だ風性常住を知つて無處不周を知らず。」僧云く、「如何なるか是れ無處不周の道理。」谷乃ち搖扇す。師曰く、「大衆、還つて搖扇底の道理を體悉せん

佛音聲を尋ねるが故に此に來至す、彼の佛目連に告ぐ、汝佛聲を尋ねること無量億劫を過ぐるも、其の邊際を得ること能はず。此れ亦寶積經にも出づ。
②螺髮右旋。大般若經三百八十一卷に云く、「世尊の毛髮は端にして皆上に靡き、右に旋り宛轉として柔潤、紺青にして金色身を嚴れり、甚だ愛樂すべし、是れ第十二の相なり。」
③鐵圍。鐵圍山の略、鹹海を圍繞して一小世界を區劃する鐵山なり、鐵より成る、須彌山を中心として外に七山八海あり、第八海は即ち鹹海にて瞻部の四大洲此に在り、此の鹹海を圍繞するは、即ち鐵圍山にて之を一小世界となす。
④宛然。分明なる貌。
⑤調達。提婆達多のこと、斛飯

王の子、阿難の兄、佛の從弟なり、出家して神通を學び、身に三十相を具し、六萬の法藏を誦するも利養のために三逆罪を造りて、生れながら地獄に墮つ、但し其の本地は深位の菩薩にして法華に於て天王如来の記額を受く。
⑥三禪天。色界の第三禪天なり、此の天を定生喜樂地と名けて、深妙の禪定より身心の快樂を生ず、三界九地の中に此の地を以て樂受の限とし、此れより已上の天處に至りては唯だ捨受あるのみ、故に此地の樂受は三界中の最も第一にて、聖敎中多く之を引きて比となす。
⑦麻谷。麻谷山寶徹禪師、馬祖道一の法嗣、此の話は會元三に出づ。
⑧人橋上を云々。此の二句、善慧大士の偈、傳燈廿七に出づ。

と要すや。任教あれ千般の巧、但だ憐む一様の風」と。

上堂、虎懸巖に嘯く、風動けば山も也た動く。人橋上を過ぐ、橋流れ

て水流れず。海大にして滴水を讓ることなし、甚としてか底に死屍を宿さ

ざる。山高うして塵泥を厭はず、甚としてか頂に雨水を置き難き。心は萬

法の根、犀、月を翫んで紋角に成る。境は一心の作、珠、色を承けて更

に痕無し。根塵不到の處、還つて人の合頭する有りや。記得す、枯木、

衆に示して云く、「佛祖向上の事有ることを知つて、方に説話の分有り」と。

諸禪徳、且く道へ、作麼生か是れ佛祖向上の事、箇の人家の兒子有り、六

根不具、七識不全、是れ大闍提無佛種性。佛に逢へば佛を殺し、祖に

逢へば祖を殺す。天堂に收不得、地獄接するに門無し。大衆還つて是の人

を知るや。良久して云く、「對面。仙陀にあらず、睡多うして寐語饒し。大

衆、是の人を看んと要すや。」拄杖を拈出して云く、「高く眼を著けよ、這の

漢の寐語を聽かんと要すや。」卓拄杖一下して云く、「夢中に夢を説く。」

上堂、五嶽是れ高きにあらず、須彌自ら芥子に入る。微塵是れ小に

非ず、涓滴能く月宮を呑む。盡大千に應じて無相毘盧の正體を證し、一

①犀月を翫んで云々。前註に詳かなり。

②珠色を承けて云々。圓覺略疏上に云く、「譬へば清淨の摩尼寶珠五色に映じて方に隨ひ、各々現するに、諸の愚痴の者は摩尼珠に實に五色ありと見る。」

③枯木。枯木法成禪師、芙蓉道楷の法嗣、此の話は會元十四に見ゆ、上堂語なり。

④七識。眼識、鼻識、耳識、舌識、身識、意識、末那識これなり、識は了別の義、根に依りて境を認識する主觀の心ないふ。

⑤大闍提。斷善根、又は信不具足と譯す、本來解脱の因を缺きて到底成佛する能はざるもの、又は容易に成佛すること能はされども、遂に佛の威力に遇ひて成佛する者等の義あり、因果を信ぜず、慚愧な

句子を宣べて、八萬の陀羅尼門を開く。當恁麼

の時、塵刹説き、虚空説き、有情説き、無情説

き、更に生滅をして説いて、終に間斷無からし

む。擧す、當山初祖云く、「夫れ佛祖向上の參學

先づ須らく無情迅速を觀すべし、敢て以て忘る

ること莫れ。若し無常生滅を忘るゝ者は、職よ

り常顛倒に由る。三世十方の諸佛諸祖の法は、

元凡夫の常顛倒の中に在らず。兄弟須らく知る

べし、生々死々、輪廻の迹窺り無く、卓々の

參學の機味さす。白雲山に倚り、而して山を以

て父と爲す、箇中の功至つて無功なり。明月水

に栖み、而して水を以て家と爲す、直下之れ住、

所住無し、見聞覺知を離れて智有り、生滅の心

に非ず。地水火風を離れて身有り、和合の相に

非ず、所以に道ふ、「四大の性自ら復す、

く、樂報を信ぜず、現在及び未來世を見ず、善友に親まらず、諸佛所説の教戒に隨はざる者なり。

①仙陀。仙陀の客の略、伶俐俊發の人をいふ。仙陀は梵語、具には仙陀婆、爐、器、水、馬等の四義あり、涅槃經第九に

一人の伶俐なる臣あり、王、仙陀婆と呼ばば群臣其の何れなりやを解せざれど、彼の臣のみ能く之を解して諛ることなしといふ、それより伶俐の漢に喩ふるなり。

②五嶽。支那の泰山(東嶽)、衡山(南嶽)、華山(西嶽)、恒山(北嶽)、嵩山(中央)の稱。

③須彌自ら芥子に入る。淨名經六不思議品に云く、「若し菩薩是の解脱に住すれば須彌山の高廣を以て芥子中に入るに増減する處なし。」

④涓滴能く月宮を呑む。華嚴經如來出現品に見ゆ。

⑤八萬の陀羅尼門。陀羅尼は梵語、能持、能遮、總持等と譯す、呪或は明と通稱する者と同義の場合と觀、或は智と通稱するものと同義に解せらるる場合との二種あり、前者は其の呪の一字二字或は數字等、字語の數多少に拘らず字に無量の義を含み、これを誦するものをして一切の障礙を除き、無邊の利益を得せしむる力用あるを以て、總持、能遮等の義ありと説き、後者は智慧能く無邊の事理を窮め、恒河沙の法門を統攝するが故に、多くあるなり、八萬は八萬四千の略、總べて一々の衆生八萬四千の諸行あるに依りていふ。

⑥參學。參禪學道の意。

⑦顛倒。四顛倒、苦を樂と計

子の其の母を得るが如し」と。兄弟作麼生か恁麼に會することを得ん。良久して曰く、「霜天月落ちて夜將に半ならず、誰と與にか澄潭影を照して寒き」と。師曰く、「大衆、初祖の開示如何が領會せん。」頰に曰く、「嶺松老いて歳寒の色を帯び、天月零ちて流水の漪に洋ふ。遮莫あれ青山の常に運歩することを。椽を抛つて石女夜兒を生ず。」

解夏上堂、林蟬葉底清吟を作す、聚散時有り嶺上の雲、惜む可し三期殘影の少きことを。蠟人屢誠む精魂に入ること。時光箭よりも疾し、賊過ぎて弓を張ること勿れ。露命風を繋ぎ難し、花落ちて何ぞ朶を望まん。眼花すること莫れ、眼花すること莫れ。

上堂、吉祥峰頂人間にあらず、月に笑ふ一聲何ぞ關を作さん。青葉髻の春樓至の晩、家林の曇葉自ら班々。瑞鳳媚々常に梧竹に棲み、明珠轉轉稍金盤に轉ず。動著すること莫れ、動著すれば先聖に辜負す。休止すること勿れ、休止すれば我が兒孫を喪す。什麼としてか道ふ、「太虚空に逼塞して赤心常に片々」と。片々底是れ什麼ぞ。荷葉團々鏡よりも團に、菱角尖々錐よりも尖し。還つて委悉すや。良久して曰く、

し、無常を常と計し、無我を我と計し、不淨を淨と計するものは是れなり。

①所以に道ふ。次の二句、石頭參同契の語なり。

②四大。地、水、火、風をいふ。此の四は萬物に周遍して至らざる處なく、一切萬物の大原素なるが故に大といふ。

③霜天月落ち云々。此の二句、唯賢南泉牡丹の話を頌するの末句なり、云く、「聞見覺知一に非ず、山河は鏡中に在つて觀され、霜天月落ちて夜將に半ならず」とす、誰と共にか澄潭影を照して寒き。」碧岩第四十則にあり。

④滴。小き水の波紋。

⑤蠟人。事苑六に、「蠟人は風穴衆吼集の下に、蠟當に臘に作るべし、謂く、年臘なり、按ずるに、增輝記に臘は接なり、新故の交接をいふ、俗に臘

「水泄れども通せず。」

上堂、紛擾々の中、那伽定に住し、安閑閑の處戲場に遊化す。十字街頭更に知己多く、佛祖屋裏是れ甚の怨讎ぞ。一拶に拶破す野狐の妖怪、大方に漏泄す從上の祖風。道ふことを見ずや、「若し一塵を立すれば家國喪亡し、一塵を立てざれば野老安帖なり」と。此に於て見得徹せば動靜の二相了然として生ぜず。復た擧す、立沙因に僧問ふ、「承る、和尚言へること有り、盡十方世界是れ一類の明珠と、學人如何が會得せん。」沙云く、「盡十方世界是れ一類の明珠、會を用ひて作麼かせん。」沙、來日還つて其の僧に問ふ、「盡十方世界是れ一類の明珠、汝作麼生か會す。」僧曰く、「盡十方世界是れ一類の明珠、會を用ひて作麼かせん。」沙云く、「知んぬ、

の明日を謂つて初歳の爲すなり、蓋し風盡きて歲來るが故に、釋の式、解制受臘の日を以て之を法歲といふ、是れなり。」

①月に笑ふ一聲云々。會元五、「藥山一夜山に登つて經行す、忽ち雲開いて月を見る、大聲一喝するに滄陽の東九十里許りに應ず云々。」

②青葉髻。樓至、賢劫出世の二佛なり。大悲分陀利經第四に云く、「沙羅童子當に青葉髻王如來と名くべし。」此亦賢劫出世の如來、拘留孫佛に非ず、然るに義雲禪師は拘留孫佛を以て青葉髻と爲すが如し、何となれば次下の鐘の銘の序に、拘留孫佛所造の石鐘を以て青葉髻と爲すに依りて知る、蓋し賢劫出世始終の二佛を擧げて春といひ晚と謂ふならん。

③曇葉。葉は花の心鬘なり。

①瑞鳳。格物論に云く、「鳳は瑞應の鳥、太平の世には現はる、五彩の色あり、梧桐に非ざれば栖まず、竹實に非ざれば食せず。」

②媚々。美好の貌。

③轉々。玉の轉する音。

④辜負。孤負と同意、そむくと。

⑤太虚空に云々。圓悟錄十七に出づ。

⑥荷葉團々云々。夾山語、會元五に出づ、「夾山、僧問ふ、如何なるが是れ相似の句、師曰く、荷葉團々鏡よりも團かに、菱角尖々錐よりも尖し。」

⑦水泄れども云々。明覺頌古五十九則、類の一に見ゆ。云く、「滄山の果、入不二門の話を評して云く、居士の高門、謂つべし、壁立萬仞、水泄せども通せず。」

⑧擾々。擾は煩なり、亂なり。

汝、黒山鬼窟裏に向つて活計を作すことを」と。師、頷に曰く、「石皓玉を含んで本頼無し。泥水蓮を染めて蓮卻つて鮮かなり。怪むこと莫れ黒山鬼窟の計、鶏、陽谷に鳴いて日輪圓かなり。」

上堂、佛祖の兒孫、専ら須らく道の邪正、乗の大小を勘別すべし。楚鷄を認めて丹鳳と爲し、燕石を握つて玉珍と爲す底是れ多し。一度邪坑小岐に落在すれば、歴劫にも出で難し。西天竺國、正像法の時、猶ほ解脱堅固、禪定堅固、闢諍堅固有り。況んや像季末法に於てをや。又況んや邊地遠島に於てをや。然も是の如くなりとも雖も、進めば到ることを得、退けば彌々遠し。佛の言く、「上々の因縁の故に南洲に生ず」と。既に上々の人身を受けて幸に

- ⑤ 那伽定。那伽、譯して龍といふ、毘婆沙論第三十九卷に云く、「附座の人、龍の蟠結するが如きの故に」といへり。
- ⑥ 一擲。擲は「おす」と訓ず、一問の意。
- ⑦ 道ふことを見ずや云々。以下の句、風穴上堂の語なり、會元十一に見ゆ。
- ⑧ 妥帖。おだやかなること、やすきこと。
- ⑨ 玄沙。玄沙山宗一禪師、此の語、同師語錄中卷及び傳燈十八、師の章に出づ。正法眼藏一顯明珠の卷に引用せり。
- ⑩ 黒山鬼窟裏の活計。印度の傳説に、大鐵圍山と小鐵圍山との間に陰陽不到の暗黒の處あり、之を黒山といふ、此處は惡鬼棲息すといふ、識情の暗窟に喩ふ。
- ⑪ 陽谷。孔安國尚書傳に云く、「陽は明なり、日谷を出でて天下明かなり、故に陽谷と稱す。」
- ⑫ 楚鷄を認めて丹鳳となす。伊文子に云く、「楚人山鷄を掘る、路人問ふ、何の鳥ぞ、之を欺いて云く、鳳凰なり。」山海經に云く、「鳳凰は丹穴の山より出づ、故に丹鳳といふ。」
- ⑬ 燕石を握つて玉珍と爲す。荀子に云く、「宋の愚人燕石を梧臺の側に得、之を藏して以て大寶となす、周客聞いて之を見んとす、主人齎すること七日、端冕元服して以て寶を發く、革櫃十重縵巾十襲、客見て僂して口を掩ひ、胡盧して笑つて云く、燕石なり、主人大いに怒つて曰く、盲瞽の言と、藏すること愈々固く、守ること愈々謹なり。」
- ⑭ 正像法。釋尊入滅の後遺教の信奉せらるる程度を分ちて正

的々の祖道に値ふ、虚しく光陰を度る可からず。中に就いて當山初祖、遙に萬里の曠海に航して、親しく天童淨和尚に見え、謾幢を倒却して身心脱落し、佛祖の宗風始めて扶桑國に通ず、國の運なり人の幸なり。其の恩山の如く其の徳海の如し。其の恩徳に酬いんと欲せば、祖師の家業を漏失す可からず。然れば則ち當門の弟子、那裏の閒消息を以て自家の古風流を亂すこと莫れ。善星比丘今に阿鼻底に有り、忘るべからざる者か。復た擧す、僧、文殊に問ふ、「達磨是れ祖なりや也た否や。」殊曰く、「是れ祖にあらず。」僧云く、「既に祖ならずんば何ぞ西來を用ひん。」殊曰く、「汝が祖を薦せざるが爲なり。」僧云く、「薦して後如何。」殊曰く、「方に知る、是れ祖にあらずること。」師曰く、「喚んで祖と爲せば觸

- 法時、像法時、末法時となす。正法時とは正しく教行證の三を具足して成佛を得る時期、滅後五百年間なり、像法時とは正法時に似たる時といふ意にて、教行の二のみありて佛果を證得するものなき時期、正法後一千年間、末法時とは遺教のみありて修行し、證得するものなき時期、像法後萬年間なり、經論により異説あれども、大集月藏經、摩訶摩耶經に依るに右の如し。元照の子蘭益經新記に云く、「大集經に五の五百歳を明す、第一の五百歳には解脱堅固、第二の五百には禪定堅固、第三の五百は持戒堅固、第四の五百は多聞堅固、第五の五百は闢諍堅固。」
- ⑮ 解脱堅固。正法盛んにして解脱を得るもの多きをいふ。
- ⑯ 禪定堅固。解脱を得るものなけれども禪定するもの多きをいふ。
- ⑰ 闢諍堅固。三學を廢して唯だ闢諍を事とし、邪見を増長する時。
- ⑱ 佛の言はく云々。次の語、南本涅槃經三十四に出づ。
- ⑲ 謾幢。謾は慢なり、幢は幟なり、我慢のことなす。
- ⑳ 家業。宗鏡錄三十二に云く、「菩提心を家となし、理の如く修行するを家法となす、乃至勸發し勤修して大乘を斷ぜざるを家業を紹ぐとなす。」
- ㉑ 善星比丘。佛の太子たりし時の子なりといふ。出家して十部經を讀誦し能く欲界の煩惱を斷じて第四禪定を證得し、之を眞の涅槃といへり。然るに彼れ惡友に近いて所得の解脱を退失せしかば、涅槃の法なしとして因果撥無の邪見を起し、且つ佛に向つて惡

れ、喚んで祖と爲さざれば背く。觸を超え背を越ゆ、如何が商量せん」と。頰に曰く、「佛々の命根、藤、樹に倚り、人々の心地、月、池に開く。春は過ぎて百鳥來らざる處、風は覆し殘梅微笑の枝。」

開爐上堂、火、地坑に起つて燭天方に徧し、金佛曾て經過すること能はざる處、木佛是れを涅槃の道場と爲す。舍利を食る丹霞、人をして媛に屬せしめ、眉鬚を落す院主、自をして殃を招かしむ。既に得失有り、還つて是非に落ちざる底有りや。四大の性、自ら復す、子の其の母を得るが如し。復た擧す、雪峰、衆に示して云く、「世界潤きこと一丈なれば、古鏡潤きこと一丈。」玄沙火爐を指して云く、「火爐潤きこと多少ぞ。」峰云く、「古鏡の潤きの如し」と。師曰く、「這の爐

心を起し、生ながら無間地獄に墮せし人なり。依つて闍提比丘と稱し、又四禪比丘とも稱す、涅槃經三十三に詳かなり。

藤、樹に倚る。會元十三疎山匡仁禪師の章に、「大滄安和尚來に示して曰く、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、師特に彼に到つて便ち問ふ、承り聞く、和尚道く、有句無句は藤の樹に倚るが如しと、是なりや否や、鴻曰く、是、師曰く、忽ち樹倒れ藤枯るゝに遇はゞ、句何の處に歸すやと云々。」

金佛曾て云々。會元四、趙州上堂に曰く、「金佛爐を渡らす、木佛火を渡らす、泥佛水を渡らす、眞佛内裡に坐す、菩提涅槃眞如佛性盡く是れ貼體の衣服、亦煩惱と名くと。」佛向上の卷に引く。

舍利を食る丹霞。會元五、丹霞天然禪師慧林寺に於て天の大寒に遇ふ、木佛を取り火に焼き向ふ、院主訶して云く、云何ぞ我が木佛を焼き得る、師、杖子を以て灰を撒して曰く、吾れ焼いて舍利を取らんとす、主曰く、木佛何ぞ舍利あらん、師云く、既に舍利なし、更に兩尊を取つて焼かん、主、自後眉鬚墮落す。

紫微宮。後漢霍賢が傳の註に云く、「天上に紫微宮あり、是れ上帝の所居なり。」

活春の瑞。韓愈が曰く、「春雲始めて繁る時雪遂に降る、實に豊年の祥瑞なり。」

彌勒下生の先兆。彌勒下生經に云く、「時に闍浮提の地東西南北十萬由旬、諸の山河石壁皆自ら消滅し、四大海水各々一方に據る、時に闍浮の地極めて平靜なること鏡の清明なるが如し。」

邊の事、如何が商量せん。頰に曰く、「寒風火を吹いて爐中に著く。猛焰天に亘つて遍界紅なり。箇裏縱横古鏡の如し。疑ふこと勿れ星の紫微宮に向ふことを。」

上堂、雪大地に布いて、銀千峰に撃く、枯林、浩春の瑞を呈し、人物一色の功に迷ふ。謂つべし、彌勒下生の先兆、普賢發機の道風と。既に八面玲瓏を得たり、誰か千差の岐路に滯らん。畢竟作麼生。復た擧す、長髯曹溪に上つて祖塔を禮し、廻つて石頭に參す。頭問ふ、「何處の處よりか來る。」髯云く、「嶺南より來る。」頭曰く、「嶺南一鋪の功德成就すや也た未だしや。」髯云く、「成就すること久し、但だ點眼を缺くこと在り。」頭曰く、「汝點眼を要すること莫しや。」髯云く、「便ち請ふ。」頭一足を垂る。髯便ち禮拜す。頭曰く、「汝什麼の道理を見てか禮拜するや。」髯云く、「某甲が所見に據らば、洪爐上一点の雪の如し。」師曰く、「者の一段の因縁、如何が透得せん」と。頰に云く、「洪爐一点の雪、臘月水心の蓮、雙手に垂足を承く。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「拈じ來れば渾身卓立して黑漫々、放下すれば

熒迦羅眼。祖庭事苑に云く、「熒迦羅此に金剛といひ、又堅固といふ」と。今は金剛王の眼の意にて、眼光明かなるをいふ。

周體鏡置。周體は全體、通體、

分外枝を抽でて蒙鬱々。三世の諸佛歴代の祖師、者の杖子の薫力を借つて、出世度生現身說法す。大地の有情、草木國土、者の杖子の處分を承けて、各々自位に在つて現瑞放光す。卓拄杖一下して云く、「慙麼も也た得たり、不慙麼も也た得たり。」又卓一下して云く、「慙麼も也た得す、不慙麼も也た得す。諸人の杖子、者の杖子に歸して、用、濃處に在り。老僧が杖子、諸人の杖子に混じて體、用處に在り。然も與麼なりと雖も、諸人の杖子撞牆撞壁、許多の力有り。老僧が杖子、周體鈍置、半文に直らず。」

上堂、一蹶平坦にして差路無し、^① 踟躕すれば又還つて半途に滯る。龍門に向つて三級を怪むこと莫れ。^② 月蟾覺えず珊瑚に上ることを。慈航和尚云く、「參禪人は第一に鼻孔端正、次に眼目清明、其の後は宗說俱通を要す」と。誠に夫れ鼻孔若し端しからずんば、争か它的香臭を辨せん、獵犬も何ぞ靈羊の蹤跡を知らん。眼目若し明かならずんば、争か見色明心を得ん。誰か靈雲の桃花を見て悟道することを知らん。若し宗說俱に通せずんば、争か爲人垂手を得ん。拄杖拂子も亦携へ難し。如何なるか是れ鼻孔端正、鼻と臍と對して、前後に背かす、左右に傾かす、出息入息短からず長からず。如何なるか是れ眼目清明、目は須らく鼻頭を對見して閉ぢす瞬かす、張らず微ならざるべし。如何なるか是れ宗說俱通、拂子を以て圓相を打し、又禪床の右邊を撃つて云く、「此の宗本自ら促延に非

① 踟躕といふが如し、鈍置は頑固なること、自由無礙ならざるをいふ。

② 踟躕。猶ほ踟躕といはんが如し、行いて進まざる貌。

③ 月蟾覺えず云々。十洲記に、「南海の底に珊瑚あり、月を感じて生ず」とあり、月蟾は月のこと、蟾は「ひきかへる」月中に棲むと稱せらる。

す、一句了然として百億を超ゆ。」

冬至上堂、^① 天關掀動して日月相從ひ、^② 地軸撥旋して海山共に轉ず。陰陽頭尾雪路を埋め、長短交量して線藏さす。文彩未だ彰れざるに文彩還つて顯る。^③ 貴を買ひ賤を賣り、賤を買ひ貴く賣る。汝が^④ 達磨を斗量し、釋迦を杓臼するに一任す、畢竟如何。皓玉瑕あらず琢磨して德を顯す。頌に曰く、「寒風雪に和して松堂を扣き、石女點頭して線芒を舒ぶ。萬類翻身して螻蛄動き、梅唇澹かに笑つて大方香し。」

上堂、禪淨心地の耕犁、虚空内外無うして雷鳴り電走つて、一點も痕沒きが如し。天地一人の爲に覆載せず、日月一人の爲に發明するに非ず。人^⑤ 人自ら分有り、忽地須らく薦取すべし。復た擧す、^⑥ 趙州、僧に問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「雪峰より來る。」州云く、「雪峰近日何の言句か有る。」僧云く、「雪峰道く、盡大地是れ沙門の一隻眼、諸人什麼の處に向つてか扇せんと。」州云く、「汝若し嶺を過らば箇の鍬子を附し去らん。」雪竇云く、「者の僧、雪峰より來らず、惜むべし趙州の鍬子」と。師曰く、「三大祖師、出格の商量ありと雖も、永平之を質さんと欲す。雪峰是なることは則ち是、眼裏に翳を生ず。趙州老婆、病に應じて藥を施す。雪

① 天關。天門九重の謂か。

② 地軸。括地志に、「地下に四柱あり、廣き一萬里、三千六百軸あり、互に相牽制して名山大川孔穴相通す」と。

③ 貴を買ひ云々。史記呂不韋が傳に、「賤きを販き貴きを賣る、家千金に累ふ。」説文に、「賤買貴賣を販と曰ふ」と。

④ 達磨を斗量し云々。永平廣錄四に云く、「或は人有り、永平に如何か是れ遷洗身の句と問はゞ、祇だ伊に向つて道はん、釋迦を拘魯し達磨を斗量す」と。曾は拈なり、拈は挹なり、拈は酌なり。

⑤ 趙州僧に問ふ云々。會元四趙州章に出づ、近くは明覺録二

寶、客の貧處を忘れて它の物を施すを妬む。永平分上又且つ如何。遮莫あれ雲の明月に和して白きことを。只だ看る松竹の雪中に青きことを。」

臘八上堂、三祇是れ長遠に非ず、打成一片。刹那孰か言ふ短促と、直に須らく萬年なるべし。大功は賞を待つこと無し、兔徑は象何ぞ遊ばん。

眉間の蛛網何物をか繋ぎ得たる。頂上の鵲巢啄啄同時。山に登らずんば争か猛虎に逢はん、水に入つて便ち能く長人を見る。耐耐なり、明星の瞿曇老の正法眼を瞎卻することを。甚としてか情と非情と釋迦老子と

同參なる、會せんと要すや。拂子を堅起して曰く、「者の毫頭に寶王刹を建つ、若し疑著に涉らば試みに擧す看よ。僧、忠國師に問ふ、「教中只だ有情の作佛を見て、未だ無情の授記を見ず、賢劫の千佛、孰か是れ無情の佛なるや」と。師曰く、「皇太子の未即位の時の如き、但だ一身のみ。即位

の後國土山河盡く皆王に屬す。有情受記作佛の時、無情作佛す、何ぞ無情の別に受記を得る有らんや。宏智古佛拈じて云く、「刹中の佛、處々に身を現じ、佛中の刹、塵々皆爾り」と。又云く、「六國自ら清し紛擾の事、一人獨り恣にす太平の基、永平の門下又且つ如何。一輪自ら轉じて十虛

地出頭して、白毫を舒ぶ。」

明かに、破鏡臺無うして重ねて照さす。今朝成道底又作麼生。頰に云く、「兀々たる靜中鼻息高し、風刀快斷す葛藤巢、曉星落失す眼睛の裏、忽

地出頭して、白毫を舒ぶ。」

斷臂上堂、順行三千、泥龍潭に吟じ、玉馬雪に歩す。逆行八百、烏龜火に向ひ、水老眉を皺む。達磨東土に來らず面壁九年、二祖西天に往か

ず得髓三拜。波瀾平地に起り、勢高うして碧天に滔る。擧す、震旦第二祖昨夜腰を埋むの寒雪に立つて、今朝斷臂の快刀に逢ふ。當に看るべし、

庭雪痛切、腹を斷つことを。味旦初祖問ふ、「汝久しく雪中に立つ、當に何事をか求むべき。」二祖云く、「願はくは和尚、廣く甘露門を開いて、廣く群

品を度せよ。」初祖云く、「諸佛の妙道、曠劫精勤して、行じ難きを苦に行じ、非忍能く忍ぶ、豈に小徳小智慢心癡心を以て、眞乘を求めんと欲せん

や。徒らに勤苦を勞するのみ」と。爾の時に二祖、潛かに利刀を把つて左

臂を斷ち、初祖の前に置く。初祖、是れ法器なることを知つて便ち入室

を許し、名を改めて慧可と曰ふ。可、便ち問ふ、「某甲心未だ安からず、乞ふ、和尙與に安んせよ。」初祖云く、「心を將ち來れ、汝が與に安んせん。」可、思

和尙與に安んせよ。」初祖云く、「心を將ち來れ、汝が與に安んせん。」可、思

に引く。

③三大祖師。雪峰、趙州、雲巖の三人を指す。

④大功は賞を待つこと云々。史記韓信傳に「勇略主に震ふ者は身危く、功、天下に蓋ふ者は賞せず。」

⑤兔徑象何ぞ遊ばん。證道歌に云く「大象兔徑に遊ばず、大悟小節に關らんや。」

⑥眉間の蛛網。教修清規沙彌得度の下に云く「大覺世尊金輪の寶位を捨て、子夜に城を踰え、珍御の龍衣を脱して青山に髪を斷つ、鵲巢を頂上に容れ、蛛網を眉間に掛け、寂滅を修して眞常を證し、塵勞を斷じて正覺を成す。」

⑦入水便能見長人。事苑一に云く、「唐の嗣天武后、嵩山の懸安と北宗の神秀とを召し、禁中に入れて供養す、因に澡浴し宮姫を以て給侍す、當り安

怡然として他なし、武后歡じて云く、水に入つて始めて長人有るを知ると。」

⑧耐耐。心中不平なり、又不可忍の義。

⑨忠國師。南陽慧忠國師、大鑑慧能の法嗣、此の語は宏智錄一に引けり。

⑩賢劫の千佛。過去の住劫を莊嚴劫といひ、未來の住劫を星宿劫と名け、現在の住劫を賢劫と名く。現在の住劫二十増減中に千佛の出世あれば、之を稱讚し賢劫といふなり、二十増減の中初の八増減には佛の出世なし、第九の減劫に於て初めて佛あり、拘留孫佛と名く、是れ千佛の第一なり、次に拘那含牟尼佛、次に迦葉佛、次は即ち今の釋迦牟尼佛なり。それより第十増減の減劫に於て彌勒の出世あり、次に第十増減の減劫中に

惟して云く、「心を覓むるに了に不可得。」初祖云く、「汝が爲に安んじ了る。」
 大衆須らく知るべし、眞の善知識に相逢ふことは、古難し今難し。無上の
 大乘を稟受することは、實に火裏の氷、臘月の蓮なり。縱使ひ初祖海を航
 して西來すとも、二祖斷臂得髓せずんば、佛正法争か今日に傳ふること
 を得ん。其の恩山の如し、兒孫報謝すべき者か。古人法恩に酬ゆるに、或
 は國城妻子を捨て、或は頭目髓腦を捨つ。但だ衲僧門下に約せば、手を心
 頭に著けて辨道し、足を實地に點じて、行李す、是れ則ち報恩の本分なり。
 還つて委悉せんと要すや。頌に曰く、「雪は嶺頭の松を試み、梅は雪裏の容
 を娟ぶ、乾坤を定むる底の眼、六門の蹤を坐斷す。」

上堂、賊智、君子に勝れて、三更鐵門を過ぐ。忠言還つて舌を截る、
 好事も無きには如かず。若し又自心の本際に了達せば、何ぞ自を瞞じ他を
 瞞すること有らん。羅葛松に千尋の外に倚つて丹竈を吐き、明月水に九
 折の底に印して碧天を涵す。既に頂に徹し底に徹することを得ば、何ぞ更
 に是に關り非に關らん。諸兄弟、此の日矢の如し、命も亦留め難し。魚少
 水に迫る、人易んぞ放遊せん。年光自ら極り、新春自ら萌す。白髮

師子佛等の九百九十四佛あり。次に第二増減の増劫に於て樓至出世し、合計一千佛となる。

① 刹中の佛云々。唐華嚴經七普賢三昧品三に云く、「一々塵中に世界海微塵数の佛刹あり、一々の刹中に世界海微塵数の諸佛あり。」

② 白毫。大般若經第三百八十一卷に云く、「世尊の眉間白毫相あり、右旋して柔軟なり、都羅綿の如し、鮮白光淨にして珂雪等に逾ゆ、是れ三十一の相なり。」

③ 順行三千。永平上堂に、「順行三千、逆行八百」の語あり。

④ 烏龜火に向ふ。臨安府佛日文顯禪師、僧の問に答ふる語、會元十六に出づ。烏龜は黒色の龜のこと。

⑤ 水老。「くらげ」なりといふ。⑥ 寶且。脂那、脂那、脂且、神

の老人誰か復た壯年ならん。此に於て退歩して子細に看よ。白雲自ら長空に靜かなり、何ぞ四山の運轉するを煩はん。還つて相應じて履踐すや。怪むこと莫れ當初腰を没するの雪、今に至つて梅葉自ら娟々。

上堂、學道は大虚の清廓として邊量を得ざるが如く、大地堅牢にして萬物を生長するに似たり。山に上つては須らく嶽頂に到るべし、到らざれば宇宙の寛荒を識らず。海に入つては須らく沙底を究むべし、究めざれば滄溟の深廣を測らん。到と不到と、只だ是れ猛烈と鈍滯とに由る。然れば則ち諸人強ひて浮世の身命を愛惜すること莫れ、須らく百尺竿頭に一步を進むべし。空花の佛果を求覓すべからず、金屑貴しと雖も眼に落ちて翳と成る。此に於て薦取せば、什麼の難きことか有らん。山に入つて虎兇を畏れざるは獵者の勇、水に入つて蛟龍を避けざるは漁夫の勇、白刃前に臨んで死を見ること生の如くなるは將軍の勇、作麼生か是れ衲僧の勇。良久して曰く、「曉天喫粥、午時喫飯。」

上堂、脩竹知らず脩天の縁を帯べることを。矮松何ぞ悟らん凌雪の操あることを。壑に塞り溝に填ちて、是の法高下なく、嶺を穿ち嶽を夷いて、

且、眞丹、神丹、振且等に作る。印度の人の支那を稱して云ふ詞。

⑦ 入室。入室獨參の意、住持室を開いて學人を勸辨する時に、學人の疑を決せんため住持の室に入つて特に所解を呈し、所疑を質さしめ、住持之を勸辨するなり。

⑧ 行李。李は履に通ず、行履に同じ、行は躬行、履は履踐、日用の行持をいふ。

⑨ 六門。六根のこと、六根は認識の門となるが故にいふ。

⑩ 君子。孔子家語一五儀解に、「哀公曰く、何をか君子と謂ふ、孔子曰く、所謂君子は言必ず忠信にして心に怨みず、仁義身に在つて色伐らず、思慮通明にして辭事ならず、行を篤うし道を信じ、自ら強めて息まず、油然として越ゆべしとある如くにして終に及ぶ

大道方に坦然たり。復た擧す、調達、逆を以て獄に墮す。因に佛、阿難をして傳説せしむるに、「汝地獄に在つて安きや否や。」達云く、「地獄に在りとも、三禪の樂みの如し。」佛又問はしむ、「汝出でんと欲するや否や。」達云く、「佛の入り來らんを待つて、我れ便ち出づべし。」阿難云く、「佛は是れ三界の慈父、豈に地獄に入る分あらんや。」達云く、「我れ豈に獄を出づる分あらんや」と。師、頷に云く、「果日未だ地に零ちず、落花枝に上り難し。珊瑚月を撐著す、香餌魚龜を引く。」

上堂、清白傳家、窓を啓けば山月朗かに、功業外に施す、岸を隔て、野花香し。然も是の如くなりとも雖も、差ふこと毫釐もすれば天地懸隔。此に於て薦取せば徧界會て藏さず。擧す、仰山、東寺に到る、寺問ふ、「什麼の處より來る。」仰云く、「廣南より來る。」寺曰く、「承り聞く、廣南に鎮海の明珠有りと、是なりや否や。」仰云く、「是。」寺曰く、「何の形段をか作す。」仰云く、「白月には隠れ黒月には現す。」寺曰く、「還つて將ち得來るや。」仰云く、「將ち得來る。」寺曰く、「何ぞ老僧に呈示せざる。」仰云く、「昨、鴻山に到つて此の珠を索めらる、直に得たり、言の對すべき無く、理の伸ぶべき無

べからざる者は君子なり。」
③三更鐵門云々。明覺録一、上堂僧問ふ、承る、師言へることあり、三更鐵門を過ぐと意旨如何、師云く、忠言舌を截ることを避けず、僧禮拜、師云く、筈に臨んで方に魚の取り難きを覺ゆ。
④九折。所謂黄河の九曲なり。
⑤果日。果は「あきらか」と訓す。
⑥落花云々。華嚴休靜の語に、「破鏡重れて照さず、落花枝に上り難し」とあり。
⑦珊瑚月云々。巴陵の語に、「珊瑚枝々月を撐著す」とあり。
⑧清白傳家。後漢の楊震のこと。後漢書楊震傳に云く、楊震字は伯起、年五十にして始めて州郡に仕ふ、性公廉私讒を受けず、子孫當に蔬食步行す、故舊長者或はために産樂を問かんと欲す、震曾せずし

きことを。」寺曰く、「眞の獅子兒大師子吼す」と。當山初祖拈じて曰く、「這箇の因縁、叢林喚んで呈珠の語と爲す、作麼生か是れ珠。」拂子を以て一圓相を打して云く、「是れ這箇にあらずや。這箇は且く致く、那裏か是れ呈珠の處。」乃ち云く、「飯足り粥足る。諸人日用著力の處、直饒ひ索めて珠の在處に到るも、大佛欄に三十拄杖を與へん。」師曰く、「初祖の提唱是なることは是、猶ほ拂子の力を用ひ拄杖の功を借ることに在り。山僧諸人に對して明珠を頷出せんと欲す。」曰く、「圓かなることは皓月の清虛に點するが如し。是れ缺くるに非ず還た餘り有ること無し。」問象、端然として進前する處、元來黃帝珠を遺れず。」

小參

結夏小參、九旬制を守つて自ら安閑、雲白く月明かにして碧巒を照す。問覺の一輪廣狹に非ず、十方通會す我が伽藍。法を以て、界と爲す、何

て曰く、後世をして稱して清白吏の子孫となさしめん」と。
②功業外に施す。前漢傳介子の故事。西京雜記第三に曰く、傳介子年十四、好んで書を學ぶ、嘗つて蠟を棄て、歎じて曰く、大丈夫當に功を絶域に立つべし、何ぞ能く坐して散儒を事とせん、後卒に匈奴の使者を斬り、還つて中郎に拜し、樓蘭王の首を斬つて、義陽侯に封ぜらる。」
③仰山。支那江西省袁州仰山慧寂禪師、鴻山靈祐の法嗣、下の語は會元三東寺如會の章に出づ。
④當山初祖云々。此の拈提は永平廣錄第二卷に出づ。
⑤大佛。大佛寺は永平寺の前身、道元禪師自ら指す辭。
⑥問象。人の名、無知に喩ふ。莊子天地篇に云く、「黃帝赤水の北に遊ぶ、崑崙の丘に登

ぞ涯畔を限らん、是を本分の道場と爲す。道を以て心と爲す、豈に思慮に
渉らんや、是を平等性智と名く。⑤摩竭の正令、猶ほ沙を披いて金を揀
ぶが如く、毗耶の默然、只だ⑥株を守つて兔を待つに似たり。此に於て薦取
せば、陝府の牛を驅つて不陰陽の地を耕種し、⑦謝三郎と無影樹頭に船を同
じうす。還つて委悉すや。行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起
る時。兄弟、恁麼の事を成すること但だ時節因縁に在り。然も恁麼なりと
雖も、是れ促延に非ず。三月安居の儀則は千佛の護念する處なり。古佛の
道を以て今人の心と爲し、今人の心を以て古佛の道に通ず。故に道ふ、
道、無心にして人に合ひ、人、無心にして道に合ふ。箇中の意を識らんと要
せば、一老一不老。道と心と既に相合す、老と不老と如何が甄窮せん。白
雲青山に倚る、父爲り子爲り家業失墜すべからず。松風明月を拂ふ、主爲
り賓爲り相見の威儀須らく親しかるべし。僧、古徳に問ふ、「洞山に三路
の學有り、如何が是れ鳥道。」徳云く、「應處蹤跡無し、絲毫も身を礙へ
ず。問ふ、「如何なるか是れ玄路。」云く、「圓なること大虚に同じ、缺
くることも無く餘ることも無し。問ふ、「如何なるか是れ展手。」云く、「當

つて南に望んで還歸す、其の
玄珠を遺れたり、知をして之
を索めしむるに得ず、離珠を
して之を索めしむるに得ず、
喫語をして之を索めしむるに
得ず、問象をして索めしむるに
得ず、問象を得たり、黃帝曰く、
異なるかな問象乃ち以て之を
得ることや。」
②端然。端は直なり、正しき
貌。
③圓覺。圓滿なる如来の覺性を
いふ、如来の覺性は其の徳圓
満周備して一法として攝せざ
るなく、一切法を生起せざる
なし、故にいふなり。
④界。界域の義。
⑤摩竭の正令云々。前註に詳な
り、就いて看よ。覺を待つに
似たり迄の句、明覺録二に出
づ。
⑥株を守つて兔を待つ。愚人
に喩ふ。釋非子五羖羖に云く、

機的々に用ひ、的々當機を用ふ。永平老漢如何が拈領せん。飛騰路有り、
①足下絲無く、未だ邊際に著せず、阿誰か敢て窺はん、即ち是れ鳥道。十
方壁落無く、四面門闔を絶す、上未だ攀仰を作さず、下亦己船を絶す、即
ち是れ玄路。拈じ来るや徧身手眼曾て當らず、放下や手眼通身又許多、是
法住法位、世間の相常に然り、即ち是れ展手。還つて三路に涉らざる向上
の一路有りや、之れを揚げば高く、之れを鑽れば堅し。②珍重。
冬夜小參、③塵々悉く三昧門、何ぞ動何ぞ靜ならん。法法是れ一心性、
境を越え人を越ゆ。外、黒闇女を見ず、家に誰か白澤の圖を用ひん。陰極
つて去留に非ず、④月面佛表裏僉照す、陽生じて來論無し、⑤日面佛節に
應じて光を舒ぶ。此に於て薦得せば、日日石牛を驅つて一片不陰陽の地を
耕し、還つて鐵樹を植ゑて少室五葉の春を看る。進前して歩を移す底作麼
生。⑥夜行を許さず。復た云く、「林下の禪衲子先づ須らく鼻孔端直なるべ
し、若し恁麼に端直なることを得ば、終に敢て人に欺誑せられず。方に知
る、直下兩段に非ざることを。⑦所以に道ふ、「二邊に涉らず、更に向背無し。」
⑧又道ふ、「千人萬人の中に在つて一人に向はず一人に背かず。」又道ふ、

「宋人耕者あり、田中に株あり、
兔走り觸れて死す、因つ
て耕を釋いて株を守り、復た
兔を得んことを冀ふ云々。」
②謝三郎。玄沙山師備のこと、
謝氏の三男なるが故にいふ、
少時釣魚を事とす。
③行いては到る云々。此の二句、
王維終南別業の詩の頌聯な
り。
④故に道ふ云々。此れ洞山上堂
の語なり。
⑤古徳。安智禪師なり、此の話
安智録第五に出づ、小參語な
り。
⑥洞山三路。洞山良价禪師が學
人接待のために設けられたる
手段なり、一に鳥道、二に玄
路、三に展手なり。
⑦鳥道。鳥の空を飛翔する道
にして、吾人の日常の運足轉
歩は鳥の空中を翔つて其の跡
を残さざるが如く、沒蹤跡斷

「阿羅漢に三毒有り」と説くも、如來に二種の語有りと説かず。諸佛と衆生と元來同性、甚と爲てか諸佛と成り甚としてか衆生と作る。觸處會て人を誑かさず、言端語直の故に諸佛と曰ふ。物を逐ふて自ら誑かし、有に落ち無に落つ、故に衆生と曰ふ。何を以てか同性と爲す。地は是れ堅牢、之れを鑽れば彌々堅し、故に道ふ、「盡大地是れ一箇の解脱門」と。水は自ら濕冷、之を攪けども渾らず、所以に道ふ、「水清うして月現せず」と。火は方に熾熱、鐵を鍊り金を鍛ふ。所以に道ふ、「三世諸佛火熾裏に在つて大法輪を轉す」。風は常に動搖し、之れを胃けて繁かれず、故に云ふ、「風性常住無處不周」と。諸佛は此の性と相應す、諸人會て此の性を缺かず。玄沙曰く、「釋迦老子我れと同參」と。

消息の往來ならざるべからざることを示す。

玄路。玄に微妙の道にして有無迷悟等の一切の見を空じて、空寂の處を往來すべきことを示す。

展手。垂手の義にして向上の一路に止らず、更に却來して爲人度生の化、他門に向ふことを示す。

足下無糸。去來自由なるをいふ、足に糸が着いては歩行自由にならざれども、糸なれば束縛なくして行履自由なり、糸は煩惱に喩ふ。

珍重。人の相別るゝに隣んで互に云ふ語にして、俗に「御機嫌よう」と云ふ程のこと、保重自愛せよとの意。

塵々三昧。前註已に出づ、一微塵一毛端の微細の中に、よく正定に入りて大法輪を轉するをいふ。

黒闇女。大涅槃經十二卷遊行品に出づる譬喩、美女功德天の妹なり。傳燈十四九峰章に云く、「師云く、功德天を散ぜずして、誰れか黒闇女を嫌はん。」

月面佛。佛の名、此の佛の壽命は一日一夜なりといふ。

日面佛。佛の名、此の佛の壽命は一千八百歳なりといふ。

所以に道ふ云々。又道ふ云云。是れ洞山良价の示衆語なり、會元十三に見ゆ。

又道ふ云々。長慶慧覺の語、會元七に出づ、原は淨名經六等に見ゆ。

阿羅漢。阿羅漢、阿羅訶に作り、略して羅漢、羅訶ともいひ、無學、不生、無生、殺賊、又應供と譯す、聲聞四果の極位、生死の境界に生れざるが故に、不生、或は無生といひ、煩惱の賊を滅盡せるが故に殺賊といひ、更に學ぶべき法なきが故に無學といひ、無量の功德を具して他の供養に應ずるの資格あるが故に應供といふ。

三毒。貪、瞋及び癡なり、吾等不善行爲の根本となり、解脱の善心を障害するを以て毒といふ。

地は是れ云々。楞嚴經四に云く、「汝が身中に堅相を地と爲し、潤濕を水となし、燥觸を火となし、動搖を風となす、此の四塵に因つて乃至五圓覺渾濁す。」

故に道ふ。此の語は雪峰義存の語なり、正法眼藏實相の卷にも出づ。

所以に道ふ。此の二句、雪峰義存の語なり、正法眼藏行佛の卷にも出づ。

諸仁者、今夜六陰已に極り、來朝一陽來復す。閻國の人力を合して推すとも、也た今夜來朝に到るべからず。千鐵牛身を同じうして牽くとも、也た來朝今夜に來るべからず。是に知んぬ、陰も也た實に去らず、陽も也た實に來らず、之を名づけて如來と爲し、亦觀自在と名づく。譬へば滄浪上の客、蘭舟を月渚煙波に泛べて、情に隨つて放曠するが如し。記得す、藥山一夜燈燭無し、衆に示して云く、「我れに一句子有り、特牛の兒を生せんを待つて、便ち汝に向つて道はん。」時に僧有り、出で、「特牛兒を生せり、自らはれ和尚道はず。」山曰く、「燈を把り來れ。」其の僧便ち衆に歸す。師曰く、「藥山叢祖、心燈已に朗かなり、什麼と爲てか更に燈を索む。者の僧未だ燈を把り來らず、甚と爲てか便ち衆に歸す。明中に暗有り、暗相を以て逢ふこと勿れ。暗中に明有り、明相を以て觀ること勿れ。明暗各々相對す、比するに前後の歩の如し。明を超え暗を越えて如何が歩を運ばん。」良久して云く、「歩々方に迷はず。夜深けぬ 久立珍重。」

除夜小參、萬機休罷、千聖不携、雲谷口に横はり、歸鳥棲に迷ふ。年窮り歳盡きて虚空老倒、月迫り影收つて王兔懷胎、雲中の木馬風に嘶いて去

り、夜半の烏鷄雪を帯びて飛ぶ。恁麼に究盡する時に當つて、條々無盡無盡條々。年も也た無盡。太歳癸亥に有り、月も也た無盡。端月是れ甲寅、日も也た無盡。朔旦三朝。還つて委悉すや。宗は促延に非ず、一念萬年、在と不在と無し。十方目前、箇裏の家訓、是れ甚の消息ぞ。佛の言はく、「佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。」時節若し至れば、其の理自ら彰はる。過去は已に去り、未來は未だ至らず、現在に不住なり、箇の什麼の時節をか觀せん。只だ寸陰分陰を惜んで虚しく時光を度らざれ、是れ則ち時節當觀なり。十世古今當念を出でず、今時則ち空劫の本基。然れば則ち面前の一著子、亂りに放捨すること勿れ。一時浪りに蹉過せざれば、十二時中虚しく過さず。一年始終十二月既に過ぎ、臘月小盡二十九、則ち窮る。舊年既に往き、新歲未だ來らず、頭尾未分の時、如何か足を措かん。黒帝に向つて問はんと欲すれば、庭際雪消して跡没し。青皇に向つて問はんと欲すれば、驚外梅笑つて芳を流ふ。是に知んぬ、前後際絶し、古今間無きことを。見すや。古人云く、「十二時中一物に依倚せず」と。然れば則ち物々、依倚せざる底の一物、長を超え短を超え、色に

① 譬へば滄溟上の云々。明覺錄一上堂語なり。唐華嚴經二十に云く、譬へば船師の此の岸に住せず、彼の岸に住せず、中流に住せざるが如し、而も能く此の岸の衆生を運度して彼の岸に至る、往返休息なきを以ての故に、菩薩摩訶薩亦復た是の如し云々。
② 藥山。支那湖南省澧州藥山惟嚴禪師、石頭希遷の法嗣、此の話は傳燈十四に出づ。
③ 特牛。特は牛の牡なり、たうしのこと。
④ 明中に暗あり。前後の歩の如し。石頭參同契の語。
⑤ 久立珍重。珍重は挨拶語、俗に「左様なら」の意、大衆直立して聽法したるを以て、今終りに臨み、師家が謝していふなり、「御苦勞」といふ程のこと。
⑥ 太歳癸亥に有り。太歳は星の

非す空に非ず、時々依倚せざる底の一時、晝に非ず夜に非ず、陰を超え陽を越ゆ。三世の諸佛此の一時に住して、八萬藏の法を轉じ、諸代の祖師是の一物を將つて、五葉花の春を興す、是れ人天識智の及ぶ所に非ず、況んや又利名榮辱の關る所ならんや。船子和尚、夾山に屬して云く、「城邑聚落到住すること莫れ、深山裏鏗頭邊に於て一箇半箇を接得して、我が道を嗣續せよ」と。是れ則ち名利を山谷の裏に避け、道種を鏗頭邊に植うる底の謂か。僧、雲居に問ふ、「僧家畢竟如何。」居云く、「居山好。」僧禮拜して起つ。居云く、「備作廢生か會す。」僧云く、「僧家畢竟山に居す、善惡生死逆順の境界に於て、其の心山の如くにして動せず。」居打つこと一棒して云く、「先聖に辜負し、吾が兒孫を喪す。」居又傍僧に問ふ、「汝作廢生か會す。」其の僧云く、「僧家畢竟山に居す、眼に玄黃の色を見ず、耳に絲竹の聲を聞かず。」居又打つこと一棒して云く、「先聖に辜負し、吾が兒孫を喪す」と。拈じて云く、「二僧の見處已に辜負す、永平門下如何が相應して行履せん。居山好居山好、從上の祖宗皆一樣。誰か知る。丁丁たる伐木の聲、青原の斧子深奥に振ふ。夜深けぬ。久立珍重。」

名、この星、癸亥に在るを癸亥の歳といふ。元亨三年、師の世壽七十二なり。
⑦ 端月。正月の異稱。
⑧ 宗は促延云々。以下の四句信心銘の語。
⑨ 佛の言く云々。大涅槃經二十八卷の語なり、佛性を見んと欲せば、當に時節形色を觀すべし。嚴藏佛性の卷に之を引く。
⑩ 過去は已に云々。維摩九阿闍佛品に見ゆ、我れ如來を觀するに前際以來らず、後際は去らず、今は則ち住せず。
⑪ 小盡。漱石支談に云く、「月三十に滿つるを大盡となし、一日を少くを小盡となす。」
⑫ 古人。黃檗なり。會元三南泉の章に云く、「南泉、黃檗に問ふ、定慧等覺明見佛性と此の理如何、槩曰く、十二時中一物に依倚せず。」

雲居膺和尚の贊

郁芳たり鶯嶺拈華の瑞。端的新豐珍曲の吟、
 河を渡つて水波の曾て濕はざることを會し、
 庵を焼いて一法の智襟に措く母し。獨坐年
 を經て天供更に缺くるの日無し。旨を得て以後
 而も通眼窺へども針を容れず。性潔うして碧潭
 の秋月を蔑如し、脚尖にして盡地の黄金を踏斷
 す。知見俱に忘滅して、命脈今に連る。

監寺を謝する偈

胡亂以來是の事に通ず、鹽醬を虧かす幾の餘
 香ぞ。任他あれ夢裏に刀子を語ることを。庫内
 の一靈雪上の霜。

永平禪寺鐘の銘并に序

夫れ永平は佛法東漸の曆號、扶桑創建の祖
 蹤なり。鶯嶺の一枝是に於て密々たり、少林の

⑦ 船子和尙。德誠のこと。藥山
 惟儼の法嗣、秀州華亭に在つ
 て一小舟を泛べ、往來の人を
 渡して縁に隨ひ機に應じて法
 を説く、故に時人呼んで華亭
 の船子和尙といふ。

⑧ 夾山。支那湖南省澧州夾山善
 會禪師、船子德誠の法嗣。

⑨ 僧雲居に問ふ云々。類の住山
 門に出づ。

⑩ 丁丁。伐木の聲。

⑪ 河を渡つて云々。會元十三雲
 居章に云く、師洞山に隨つて
 水を渡る次、山問ふ、水深き
 こと多少ぞ、師曰く、不濕、
 山云く、巖人、師云く、請ふ
 師道へ、山云く、不乾。

⑫ 庵を焼いて云々。僧寶傳卷六
 雲居章に曰く、入室後膺深く
 入り、雲峰の後に留り、庵を
 結んで居す、月に一たび來つ
 て价に謁す、价、其れ未だ情
 を忘ざれば、道に於て難を

なすと呵す。乃ち其の庵を焼
 き海昏に去つて歐阜に登る。
 ⑬ 獨座年を経て云々。會元十三
 雲居章に云く、雲居庵を三峰
 に結び、旬を経て堂に赴か
 ず、山問ふ、近日何ぞ齋に赴
 かざる、師云く、毎日自ら天
 神あり、食を送る、山云く、
 我れ將に謂へり、汝は是れ箇
 の人と、猶ほ這箇の見解をな
 すあり、汝晚間に來れ、師晚
 に至る、山、膺庵主と召す、
 師應諾す、山云く、不思議不
 思議是れ甚麼ぞ、師庵に回
 り、寂然として宴坐す、天神
 此れより竟に尋ねれども見え
 ず、是の如く三日にして絶
 ゆ。

⑭ 胡亂以來云々。會元三南嶽の
 章に、師、馬大師化を江西に
 闡くと聞く、師衆に問うて曰
 く、道一衆の爲に説法するや
 否や、衆曰く、已に衆のために

五葉今に至つて芬々たり。⑮ 雜草より以降年序幾じ一百、⑯ 棟葉粗ぼ列ね
 て樓鐘空乎たり。大家宏道者、林禪人を勸誘して、去歲の孟夏化を發す、
 方に遠近縑素の助力を以て今秋西月に成る。開山和尚在日、鐘聲許多山
 奥に鳴る、今夏結制の後朝、梵鐘忽爾として嶺頭に響く、先兆の冥符貴ぶ
 べき者か。昔、青葉髻竺土に於て青石の大鐘を造るに、化佛日を逐ふて光
 を放つ。今二禪人吉祥に在つて、青銅の寶器を鑄る、祖宗時と與に護念す
 る者なり。往時と今日と函蓋乾坤、洪韻の劫前劫後に繼ぐことを疑はず。
 銘を作つて曰く、「此の吉祥山、方外の深巒、帝都雲隔り、峻嶺雪寒し。曹
 源の派を受け、洞水の潭を湛ふ。殿堂年舊りて、樓臺未だ安せず。他の化
 功を以て、箇の梵鐘を得たり。槌發するに則有り、聲揚つて窮り無し。千
 佛同風、一音是れ從ひ、前後際斷、緊漫相交はる。欄に臨む月を迎へ、
 林を渡る風を送る。⑰ 積魚業淨く、⑱ 化蝶夢回る。邪定牀幹り、燒煮鍍
 摧く。寶珠頂に輝き、⑲ 長鯨胎に吼ゆ。神空谷に諾し、響當來に及ぶ。」
 永平 正法眼藏品目の頌并に序
 正法眼藏、密傳密付、古と今と嫡佛嫡祖。永平元祖、入宋して五

説法す云々、馬師云く、胡亂
 より後三十年、曾て彌壽を少
 かすと、師之を然りとす。
 ⑮ 銘。銘は「しるす」と訓ず、刻
 文なり、禮の檀弓に「銘は明
 筵なり」。釋名第六に曰く、銘
 は名なり、其の功美を述して
 稱名すべからしむ。
 ⑯ 東漸。漸は入なり、後漢の明
 帝永平十年に佛方東漸す。
 ⑰ 雜草以降。雜は「かる」と訓
 す、草を剪除すること、創立
 以來と同意。
 ⑱ 棟葉。釋名に、「屋背を葉と曰
 ふ、葉は蒙なり、上に在つて屋
 を覆蒙する也。屋の棟のと。
 ⑲ 大家宏道者云々。本山樓鐘の
 銘に曰く、「嘉曆二丁卯歲秋八
 月二十四日鑄造す、鑄匠沙彌
 蓮念、化主巨宏智藏、韶林維
 那、本寺開基第四世雲州の左
 金吾藤原の朝臣通貞、住持第
 五代義雲銘記。」

葉の根帯を穿鑿し、^①歸朝して能く一天の陰涼と爲る。忒煞だ婆心、和字を以て漢語を柔く。奇妙善巧、人をして文言に累はざらしむ。石の玉を含むが如く、地の山に攀ぐるに似たり。聊か卑語を綴つて其の主旨を述ぶ。^②後昆此の八字打開せず、妙心源未だ通徹せずんば、一大藏教、少林の妙訣、夢にだも也た未だ見ざるのと在らん。^③嘉曆四年中夏、^④曾孫義雲^⑤和南拜書。

第一、現成公案 是れ什麼ぞ。

面前の^①一著蹉過すること莫れ。空劫の春容此の^②早梅、^③一字公門の内に入り了れば、九牛力を盡して挽けども廻ること無し。

第二、^④摩訶般若 ^⑤照了綿密。

智燈照徹して^⑥陰空を解す、什麼の處の人か

暗室に居せん。徧界藏さず誰か敢て疑はん。摩訶般若波羅密。

第三、佛性 彼に達し此に達す。

威音世界幽遠に非ず、直に今に至つて其の理自ら彰はる。^①本分の性光疑怪すること莫れ。大千界日^②扶桑に出づ。

第四、身心學道 ^③巾斗を飄す。

玄豹霧融じて毛彩變じ、靈犀月朗かにして角紋成る。朝參暮請甚の階級ぞ。曠古の風流缺盈に非ず。

第五、^④即心是佛 ^⑤將錯就錯。

江西直に透波の心を説く、此れより大梅絕岑を^①トす。三十年來人識らず、香風馥々而今に在り。

第六、^②行佛威儀 ^③佛眼も窺ひ難し。

① 鐘聲許多山奥に鳴る。建撫記訂補坤卷に出づ。
② 青葉雲々。青葉雲は拘留孫佛のこと、法苑珠林百十八に此の因縁詳かなり。
③ 緊漫。緊は急なり、漫は且なり。禪苑清規第六警衆の部に云く、「大鐘を打するの法は、先づ輕手鐘に擬すること三下、漫十八聲、緊十八聲、三緊三漫共に一百八聲云々。」
④ 債魚業淨く云々。宏智錄八鐘銘の中に「化蝶影散じ、債魚業清し」の文あり。法苑珠林百十八に云く、「國王あり、闍毗吒と名く、貪虐無道なり、死して大海に生じ、千頭の魚となるに、劍輪廻つて其の首を斬る。續いて又生ず、時に羅漢に逢ひ、鐘聲を聞く間苦痛息む云々。」即ち以下の四句は、鐘聲の利益廣大なるをいふなり。
⑤ 化蝶。莊子齊物論に出づ。
⑥ 燒煮。地獄の有様なり。
⑦ 長鯨胎に吼ゆ。物類相感志に云く、「海岸に獸有り、蒲牢と曰ふ、性鯨魚を畏る、鯨躍れば鳴く、其の聲鐘の如し。」鯨は本聲なし、鯨躍に因つて蒲牢鳴く、故に鯨音と曰ふ。事苑四に「鯨は魚の名、海中に生ず、大なる者は長さ十四里或は一千里。」
⑧ 正法眼藏。正法眼藏なる語の語源、并に其の義解及びこれ歷代佛祖相承の佛法そのものを指したるを已に前に註せるが如し。今は永平高祖其の語を取りて以て直ちに書名となせるなり、蓋し著はす所の言句々々、是れ佛法の當體全是なることを表するの深旨歟。現今流布の正法眼藏凡て九十五卷なり、然れどもこの中二十卷は後世諸處に秘在せしもの

のを附加したるもの、其の初に於ては七十五帖なりしなり。七十五帖は大師滅後三年即ち建長七年懷辨禪師の編集に係る。然り而して此の七十五帖は高祖滅後五十餘年、第四世義演禪師の時、永平寺同祿の因み焼失せり、後正和三年義雲禪師入院し、山門諸堂の造立等内外多事の間、灰燼中より摭拾して漸く六十卷を得たり、これ宛も嘉曆四年高祖滅後七十七年なり、世に之を義雲和尚編集の六十卷本と稱す、而して毎卷附するに、著語并に題號の頌を以てせらる。以下即ち是れなり。
① 正法眼藏。此れ書名にあらす、原意なり。
② 入宋。人皇八十五代後堀河帝貞應二年癸未二月二十五日發帆、夏四月明州に到着、師時に二十四歳。
③ 五葉。今は五家の意、臨濟、曹洞、雲門、法眼、臨仰なり。
④ 歸朝。本邦安貞二年戊子春、時に師年二十九歳。
⑤ 後昆。昆も後の意、後世の子孫といふこと。
⑥ 八字。各人の眉毛をいふ、八字打開は心眼明瞭なるに喩ふ。
⑦ 嘉曆四年。嘉曆は人皇九十五代後醍醐天皇の曆號、四年は己巳の歳、師年七十七、高祖滅後七十七年なり。
⑧ 曾孫。子の子を孫といひ、孫の子を曾孫といふ。道元一領獎一寂圓一義雲。
⑨ 和南。梵語、槃淡、頰淡、娑南、伴題に作り、稽首、禮拜、敬禮と譯す。
⑩ 一著。開基の一手といふことにて、一語、一事といふ如し。
⑪ 早梅。冬至以前に開くが故に早梅といふ。
⑫ 一字公門。尺牘雙魚三諺に曰

① 了々として靈知の了すべき無し。左旋右轉是れ風流、脚跟點する處蹤跡没し。何ぞ佛邊に向つて逗留を得ん。

第七、一顆明珠 染ます磷かす。

圓陀々八面玲瓏。轉轉々々、朕蹤を留めず。

耐耐なり頭を競つて赤水に馳することを。進前する罔象皇風に叶ふ。

第八、三時業 雨過ぎて雲 一抹。

② 現生後報誰か疑著せん。猶ほ夜輪の水中に浮ぶが若し。照用靈々として 三際を絶す。

爲に憐む松竹の清風を引くことを。

第九、古佛心 撞牆撞壁。

③ 山河大地星辰宿、空劫以前自己の心。一念儘かに萌せば瑕を鏡に作す。無爲の道人溪林に在り。

第十、大悟 徧界藏さす。

世尊の密語人の會する無し。迦葉當初覆藏せず。山嶽連天常に縁を吐く。溪深うして月に和して流光を轉す。

第十一、坐禪儀 枯木花開く。

④ 兀々々々、寥々蒲團に倚る。龍吟じ雲起つて黒漫々。箇中の消息思議を絶す。刹海三千祇だ一般。

第十二、法華轉法華 月に照されて月を翫ぶ。

明月一輪萬象を呑む。卻つて還た萬象 蟾華を發す。任他あれ 順逆迷悟の類。祇だ是れ法華轉法華。

頭尾相諍はず。龍蛇互に科に契ふ。虚空と萬象と。法華法華を轉す。

① 一字公門に入れば、九牛拽けども出でず。

② 摩訶般若。大智慧と譯す、般若五に五あり、一には實相(是れ般若の性)、二には觀照(是れ般若の相)、三には文字(是れ般若の因)、四には境界、謂く、眞俗二諦(是れ般若の境)、五に眷屬、謂く、一切の福智(是れ般若の伴)。

③ 照了綿密。異本に照了々綿密密に作る。

④ 陰空。色受想行識の五蘊、舊に五陰といふ、今陰空といふは眞眞にあらず、所謂照見五蘊、即ち五枚の般若なり。

⑤ 威音世界。威音王佛の世界なり。威音王佛は、乃性古昔無量無邊不可思議阿僧祇劫以前の佛なりといふ。

⑥ 本分の性光。本分は本來に同じ、吾人從本以來具有眞性の靈光をいふ。

⑦ 扶桑。東海中にありといふ大なる神木、今は東方の意。

⑧ 巾斗。巾は斤及び筋に通ず、斤は斤兩の秤、斗は秤の盤なり、物衡に餘れば、錘盤共に翻却す、これを筋斗を翻すと云ふ、今は翻身自受用の義なり。

⑨ 玄豹。黒豹なり。漢の劉向が列女傳に曰く、陶谷子陶を治むると三年、名譽興らず家富むと三倍、其の妻兒を抱いて泣く、姑怒つて以て不祥となす、妻の曰く、妾聞く、南山に玄豹あり、霧に隠れ七日食はざることは、以て其の毛衣を淫し、其の文章を成さんと欲すればなり。犬豕に至つては食を擇ばず、故に肥ゆ、肥ゆるを以て禍を取ると。莽年にして果して誅せらる。

⑩ 即心是佛。傳燈七、大梅章に云く、「初め大寂(馬祖の靈號)に參す、問ふ、如何なるが是れ佛、寂云く、即心是佛、師即ち大悟す、唐の貞元中大梅山鄧縣の南七十里梅子眞が奮隱に居す云々。」

① トす。居住すること。

② 行佛威儀。佛の威儀を行足するの意、威とは威あつて畏るべきをいひ、儀とは儀あつて象るべきをいふ。

③ 了々。分明の形容。

④ 圓陀々。陀々は美なり、佳麗美豔の貌。

⑤ 朕蹤。朕迹といふも同じ、朕は物の生する「きざし」にして、蹤は「あとかた」と訓み、已に形にあらはれたるをいふ、兆候朕迹の義。

⑥ 三時業。大毘婆娑論百十四の略に云く、「一に順現法受業、謂く、若し業を此の生に造作し增長すれば、此の生に異熟果を受く。二に順次生受業、

謂く、若し業を此の生に造作し增長すれば、第二生に異熟果を受く。三に順後次受業、謂く、若し業を此の生に造作し增長すれば、第三生に隨ひ或は第四生に隨ひ、或は復た此を過ぎて百千劫と雖も異熟果を受く。」

⑦ 一抹。抹は摩なり、塗抹なり。

⑧ 現生後報。現は順現、生は順次生、後は順後なり、報は上の三字に連る。

⑨ 三際。過去を前際、現在を中際、未來を後際といふ、三世のこと。

⑩ 爲に憐む云々。五祖演和尚の投機頌に、「山前一片の閑田地、叉手して叮嚀に祖翁に問ふ、幾度か賣り來り還つて自ら買ふ、ために憐む松竹の清風を引くことを。」

⑪ 古佛心。會元二、忠國師章に

第十三、海印三昧 波々絶待。

重淵游泳して三昧を得たり。龜印印波して徹底清し。萬派湛潮増減没く、前波未だ到らざるに後波盟ふ。

第十四、空華 死水裏の龍吟。

虚空樹上瑞華發く。恁地あれ風を起して飛んで亂零。語ること莫れ眼中金屑を著くと。少林の五葉今に至つて靈なり。

第十五、光明 明暗不倒。

明々たる照用敢て誰か藏さん。日は自ら熱く月は自ら涼し。古に亘り今に輝いて疑怪を絶す。山門佛殿及び僧堂。

第十六、行持 超佛越祖。

順轉未だ休せざるに逆行臻る。道規矩に先んじて時と與に新なり。覺雄斫額す煙村の外。

⑩ 十地三賢比隣に非ず。

第十八、觀音 六耳謀を同じうせず。

偏身斯れ手臂。通身是れ眼睛。更に物の著すへき無し。何ぞ更に精明を待たん。天堂と寶刹とを趣倒して、劍樹刀山是れ都城。⑪ 到る處知を亡する處、入門名を犯さず。

第十九、古鏡 呼ぶことは易く、遣

ることは難し。觀面孤圓點埃を絶す。任他あれ胡漢の形を現じ來ることを。⑫ 雪峰曾て彌猴の春を背して、箇々の眼睛此に於て開く。

第二十、有時 昨日は定にして、今日

は不定。時節因縁誰か愛憎せん、春松秋菊任騰々。高く巍々たる嶺頭の月を翫び、還つて深々たる

出づ、本卷に引く。撞墻撞壁。撞は「うつ」又は「あたる」と訓む、墻壁一々が古佛心なる意。

⑩ 山河大地。宗門統要第七鴻山章に曰く、「師、仰山に問ふ、作麼生か是れ妙淨明心、仰山云く、山河大地日月星辰。」

⑪ 無爲の道人。證道歌に所謂、絶學無爲の閑道人なり。

⑫ 大悟。蓋し密語の寫誤ならん。

⑬ 密語。密は秘密の密にあらす、親密の密、説く所諸法の實相宇宙の眞理と一體無二、又説くものと説かるものと能所なきをいふ。會元十三、雲居章に出づ。卷中又此の語あり。

⑭ 枯木花開く。傳燈十五、石霜章に、「師、石霜山に止る、二十年の間學衆長坐不臥、屹として株杭の如きあり、天下之

なり、世音は義疾し、化他に局るが故に。

⑮ 到る處知を亡する云々。楞嚴六觀音に云く、「初め門中に於て流れを入へして所を亡す。」知は妄知、亡は無に同じ。

⑯ 呼ぶことは易く云々。碧巖七十五則烏臼棒の頌、呼ぶことは易く、遣ることは難し、互換の機鋒子細に看よ云々。」

⑰ 雪峰曾て云々。會元七、雪峰の章に曰く、「普請の次、路に一彌猴に逢ふ、師云く、人々一面の古鏡あり、遺箇の彌猴も亦一面の古鏡あり、三聖云く、曠劫無名何として彰はして古鏡となす、師曰く、暇生ぜり、聖云く、道の老漢甚麼の死念にか著けん、話頭も也た識らず、師曰く、老僧住持事繁し。」

⑱ 騰々。任運自適の貌。

⑲ 巍々。雲の集る貌。

海印三昧といふ。

⑩ 亂零。零は落なり。

⑪ 光明。「雲門上堂衆に示して云く、人々盡く光明の在るあり、看る時見えず暗昏々、作麼生か是れ諸人の光明。衆無對。自ら代つて云く、僧堂佛殿厨庫三門。」

⑫ 行持。行履操持の義、卷首に云く、「諸佛諸祖の行持に依りて我等が行持現成し、我等が大道通達するなり。我等が行持に依りて諸佛の行持現成し、諸佛の大道通達するなり。」

⑬ 十地三賢。十住十行十回向の三十位、之を三賢といひ、十地之を十聖といふ。

⑭ 觀音。新には觀自在といひ、舊には義譯して觀世音といふ。自在は義勝れり、諸法實相に觀達し、所度の機類を觀察するに、俱に自在無礙の意

海底の燈を挑ぐ。脚邊雲、靄々、溪澗水、澄澄たり。

第二十一、^①授記 與奪時に隨ふ。

虚空授記すれば森羅受く、大地有情眼皮を綻ばす。時に於て保持す劫前の事、空王佛是の令嗣を稟く。

第二十二、^②都機 明中に隠れ、暗裏に顯る。

圓前後呑と吐と兼ぬ、本分の靈明缺盈に非す。影は千江に印して秋自ら普く、一輪光裏地天清し。

第二十三、^③全機 機先の事作廢生。

畫乾坤裏、全身を露す、人物會通方に乃ち親し。萬機を動せず一機穩かなり、箇中阿誰か根塵を著せん。

第二十四、^④畫餅 饑るば食を擇ばす。

甘辛苦澁舌に關らず、王膳畫き成すも何ぞ飢を息めん。詩客風月の味に飽かず、數々便路を経て遺ちたるを拾ふ。

第二十五、^⑤溪聲山色 見を超え聞を越ゆ。

廣長舌滑かなり碧溪の中、螺髮翠濃かなり山頂の松。八萬の法蘊甚の章句ぞ。文言絶待超宗の風。

第二十六、^⑥佛向上 千聖不携。

之を仰げば高く之を鑽れば堅し。佛祖依然として曾て傳へず。滴水涓に非ず天月を納る。大千界の外幾三千ぞ。

第二十七、^⑦夢中說夢 睡多ければ

讒語僞し。

國譯義雲和尚語錄拾遺

澄々。水靜かにして清き鏡。

⑦授記。佛眞實語を以て其の弟子に記誦を授くるをいふ。曹洞の吹唱自ら別調あること卷に就いて見よ。

②都機。月の假名字、卷中に云く、「舒州投子山慈濟大師、因に信問ふ、月未圓の時如何、師云く、三個四個を吞却す、僧曰く、圓なる後如何、師云く、七個八個を吐却す。」尙ほ此れ傳燈十五に出づ。

③全機。圓悟錄十七、道吾弔死の話を拈じて曰く、「銀山鐵壁什麼の階昇する處有らん。山僧今夜錦上に華を鋪く、八字に打開して這の公案を商量し去らん、生や全機現、死や全機現、不道復た不道、個の中背面なし、直下便ち承當せば、一條の線を隔てず、大虚空に逼塞して赤心常に片々。」

④機先。一機未發以前の意、即ち

ち一切活動の起る初め、天地未開以前といふも同じ。

⑥全身を露はす云々。會元七、長慶稜の頰に云く、「萬像の中獨露身、唯人自ら肯つて乃ち方に親し云々。」

⑦餓ふば食を擇ばす。會元第五、丹霞章に、「師一日龐居士を訪ふ、門首に至つて相見す、師乃ち問ふ、居士在りや否や、士曰く、餓ふば食を擇ばす云々。」

②王膳。華嚴問明品に曰く、「佛子善く諦かに如實の義を聞け、但だ多聞を以て能く如來の法に入るに非ず、乃至人の美膳を畫き自ら饒みて食せざるが如し、法に於て修行せざる多聞も亦復た是の如し。」

③詩客風月の味に云々。白居易が詩に曰く、「惟だ詩覽除く、こ未だ得ざるあり、風月に逢ふ毎に一間に味ふ。」

④溪聲山色。卷中東坡居士投機第八に云く、「此の十不可説の佛刹微塵數の香水、海水に十不可説の佛刹微塵數の世界種種あつて安住す、一々の世界種種復た不可説佛刹微塵數の世界あり云々。」

⑤夢中說夢。類の説法門に云く、「大滂秀禪師、仰山三座説法の話を擧げて曰く、仰山文に依つて義を解することは即ち無きに非ず、……亦後人をして夢中に說夢せざらしめん。」

⑥睡多ければ云々。譚異本には寐に作る、枯木法成禪師示衆の末句に云く、「對面仙陀にあらず、睡多ければ寐語僞し。」

⑦王庫の刀子。大涅槃經八如來性品に云く、「譬へば二人共に親友と爲るが如し。一は是れ王子、一は是れ貧賤なり。是の如きの二人互に相往返す、是の時貧人は是の王子に一の好刀

黒漫々明歴々、睡裏の諸夢は睡裏に成る。胡蝶道遙齊物の事。王庫の刀子是れ何の形ぞ。

第二十八、四攝法 錦上に花を添ふ。

大施門啓いて 九天富む。口愛憎を絶す是れ法輪。利物 同風千里の外。無根樹上四時の春。

第二十九、慳麼 直趣。

我れも是の如く汝も亦是の如し。此十西天雲と水と。鷲嶺の月光少林の葉。慳麼の人慳麼の事を作す。

第三十、看經 遮眼。

出息曾て外境に隨はず。卻つて知る入息の蘊に居せざることを。從他あれ月に對し花を弄する底。盧老經を聞いて世恩を弃つ。

第三十一、諸惡莫作 風吹けども動せず。

四十三攝事品に出づ。

錦上に花を添ふ。鄭十三娘の語、禪林類聚の尼女門に見ゆ。又佛果の云く、「法輪を建て宗旨を立す、錦上に花を添ふ。」

九天。八方と中央となりといひ、又物の數を萬といふが如く必ず實に九あるに非ず、數一に起つて九に成る、九は陽數の故にいふなりと。

同風。譬喩云く、「君子は千里同風。」

慳麼。宋代の俗語にて「斯の如し」等の意。會元十三雲居章に出づ。

直趣。直趣菩提の義。一切の方便假説の修行に依らず、頓に佛果を成ずること。發心の當體直に成菩提の當體なることにも用ふ。李遵易悟道の偈に、「直に無上菩提に趣き、一切の是非覺むこと勿れ」とある。

貪愛瞋癡定相に非ず、土塊握つて是れ黄金と作す。水中誰か更に炎火を著けん、汝に籍つて容れず 官の針。

第三十二、三界唯心 竹木椅子。

第三十三、道得 八埏帝里に歸す。

禪界從來欲界無し、華藏の塵刹一心地。計較を將つて更に擬議すること莫れ。四海

八埏帝里に歸す。第三十三、道得

我れも是の如く云々。我は當に吾と作るべし。會元三南嶽の章に云く、「六祖云く、祇だ此の不染汚諸佛の護念する所、汝も既に是の如し、吾れも亦是の如し。」

第二十七祖東印度般若多羅尊者、因に東印度國王、尊者を請じて齋するの次、國王乃ち問ふ、諸人盡く經を輕す、唯だ尊者甚としてか轉ぜざる。祖云く、曾道出息業緣に隨はず、入息羂界に居せず、常に如是經を轉すること百千萬億卷、但だ一卷兩卷に非ず。」

盧老經を聞いて世恩を棄つ。盧は六祖大師の氏なり、壇經行由第一に謂く、「慧能此の身不幸にして父又早く亡す、老母孤遺南海に移り來つて艱辛有るを見て、心中に食著す。王子後時此の刀を執持して逃れて他國に至る。是に於て貧人後に他家に寄臥止宿す。即ち夢中に寐語して刀々といふ。傍人之を聞き收へて王の時に至る。時に王問うて云く、汝刀と言ふもの何處に得たるや、是の具に上の事を以て王に答ふ。曾て眼に見ると雖も乃至敢て手を以て抵觸せず、況んや當時取るをや。王復た問うて言く、卿が刀を見る時相貌如何が類す。答へて曰く、大王、臣が見る所の者は殺羊の角の如し。王是を聞き已つて、欣然として笑つて曰く、汝今より意の所至に隨つて憂怖を生ずること莫れ、我が庫藏の中是の如きの刀なし。(大意)」

四攝法。布施、愛語、利行、同事。善觀經及及び輪伽論第

貧乏、市に柴を賣る。時に一客有り柴を買ふ、乃ち慧能錢を得、門外に出づるに一客の誦經するを見る、應無所住而生其心の文に至り、慧能經語を聞いて心即ち開悟す、乃至母を安置し畢つて、傾ち辭し違ふ。」

諸惡莫作。卷中に引くは、増一阿含第一、涅槃經十四等舊經の文なり。

土塊握つて云々。大涅槃經十五に云く、「是の如く大涅槃を修行する者は土を觀じて金と作し、金を觀じて土となし、地に水相を作し、水に地相を作し、水に火相をなし、火に水相を作し、地に風相を作し、乃至意に隨つて成就して虛妄あることなし。」

官の針。鴻山、仰山に問ふ、石火及ぶ莫し電光通するなし、從上の諸聖什麼を將てか

人のためにす、仰山云く、官に針を容れず、私に車馬を通す。

禪界從來云々。傳燈七、鶴湖大義禪師、唐の憲宗嘗て詔して入内せしむ、論議するに一法師有り、問ふ、欲界に禪なし禪は色界に居す、此の土何に憑つてか禪を立す。師云く、法師只だ欲界に禪なきことを知りて、禪界に欲なきことを知らず云々。」

華藏の塵刹。華嚴盧舍那品に華藏世界を説く、又離世間品に重々無盡の世界を明す。今は華藏世界塵刹々の義。前註を見よ。

四海。爾雅註疏卷六四極に云く、「九夷八狄七戎六蠻之を四海と謂ふ。」註に「九夷は東に在り、八狄は北に在り、七戎は西に在り、六蠻南に在り、四荒に次ぐものなり。」

⑧ 蝦蟇啼き蚯蚓鳴く。

言前に 荐得するも

奇特に非ず。正與廢の時宗説通す。四十餘年不説の説。胡僧語り盡す古今の風。

第三十四、發善

提心 透頂

徹底。

⑨ 神光雪に立つ甚の心行ぞ。臂を斷つて師に獻す作麼生。無心無心の道を體得すれば、雲は自ら白く水は

⑧ 八瓊。瓊は地際なり。淮南子地形訓に云く、九州の外に乃ち八瓊あり、亦方千里。東北

方より大澤と曰ひ、無通と曰ひ、東方を大渚と云ひ、少渚と曰ひ、東南方を辰區と曰ひ

元澤と曰ひ、南方を大夢と曰ひ、浩澤と曰ひ、西南方を清資といひ丹澤と曰ひ、西方を九區と曰ひ泉澤と曰ひ、西北方を大夏と曰ひ、北方を大冥と曰ひ寒澤と曰ふ云々。」

⑨ 蝦蟇啼き云々。保寧勇及び如淨禪師の語、眼睛、龍吟兩卷にも引けり。

⑩ 荐得。荐は常に薦に作るべし、薦は進なり。

⑪ 發善提心。略して發心ともいふ。佛道を求むる心、即ち自利利他の大行を修せんとの志を發起するをいふ。

⑫ 神光雪に立つ云々。是れ二祖慧可發心の因縁、前の斷臂上

堂に詳かなり、會元一達磨章に出づ、又行持卷に引けり。

⑬ 無心無心の道を云々。龍牙の偈に云く、「無心無心の道を體得す、無心を體得すれば道も也た體す。」

⑭ 神通。瓔珞經に云く、「神は天心に名く、通は慧性に名く、天然の慧徹照して無礙なるが故に神通と名付く。」長者論に云く、「物に任せて自眞なる、之を稱して神と爲す、不爲不思不定不亂智に任せて徧周す、之を名けて通となす。」法界次第中卷に曰く、「一に天眼通、二に天耳通、三に知他心通、四に宿命通、五に身如意通、六に漏神通。」

⑮ 朝三千暮八百。前已に註す。雲居の語に、「朝打三千暮打八百」とあり。

⑯ 野狐通。前已に註す。臨濟錄上卷に出づ。

⑰ 鴻仰曾昔希聲を振ふ。希とは多く見ざるをいふ、稀なり。

卷中に云く、「大鴻あるとき臥せるに、仰山來山す、大鴻すなはち轉面向臥臥す、仰山いはく、慧寂これ和尚の弟子なり、形迹もちひされ。大鴻おくる勢をなす、仰山すなはち入るに、大鴻召して寂子とめす。仰山かへる。大鴻いはく、老僧夢をとかん、きくべし。仰山かうべをたれて聽勢をなす。大鴻いはく、わがために原夢せよ見ん、仰山一盆の水、一條の手巾をとりてきたる、大鴻つひに洗面す。洗面をはりて、わづかに坐するに、香嚴來たる、乃至大鴻はめていはく、二子の神通知慧はるかに鶯子、目連にもすぐれたり。佛家の神通をしらんとおもはゞ、大鴻の道取を參學すべし。」

自ら清し。

第三十五、神通

左右に侍従す毎常の事。巾は架頭に在り水は瓶に在り。

① 野狐通を將つて妙と作すこと勿れ。

② 鴻仰曾昔希聲を振ふ。

第三十六、羅漢

③ 目的を破り塵を破る。

④ 眼睛鼻孔貪染せず。猶ほ明珠の翳塵を絶するが若し。鉢大虛に等しうして日に供に應ず。

眉長く骨瘠せて道方に親し。

第三十七、徧參

⑤ 雲駛く月運ぶ。

雲は山に倚り水は海に歸す。鳥空を離れず魚潭に泳ぐ。達磨了に東土に來らず。二祖未だ會て竺乾に往かず。

第三十八、葛藤

⑥ 命脈系の如し。

西天の四七一枝の種。東土の二三五葉の花。

① 目的を破り云々。永平中教上堂語、廣錄一に出づ。

② 眼睛鼻孔云々。卷中に云く、「洪州百丈山大智禪師云く、眼耳鼻舌身意、各々一切有無諸法を貪染せず、之を受持四句偈と名け、亦四果と名く。」

③ 徧參。山川を跋渉して徧く天下の善知識を參叩し、修行辨道するをいふ。傳燈十八玄沙の章に、「因に雪峰、師を召して云く、備頭陀何ぞ徧參し去らざる。師云く、達磨東土に來らず、二祖西天に往かず。雪峰深く之を然りとす。」卷中之を引く。

④ 雲駛く月運ぶ。圓覺經金剛藏章に云く、「釋迦牟尼佛金剛藏菩薩に告げて言はく、譬へば動目能く潭水を搖かすが如く、又定眼猶ほ轉火を廻らすが如し、雲駛せ月運び舟行き岸移る、亦復た是の如し。」都

機の巻に引く。

⑦ 葛藤。葛は、つたがづら、藤は「ふぢ」にて、共に纏ひかちみて物を繫縛するものをいふ。出曜經三に曰く、「其れ衆生あり、愛纏に墮するものは、必ず正道を廢して究竟に至らず、是の故に愛纏覆ふと説く、猶ほ葛藤の樹を纏ふが如し、末に至つて過れば樹枯る云々。」然れども今は嗣法相續の意に用ふるなり。

⑧ 甜瓜を愛し云々。會元九無著章に文殊の偈に云く、「苦瓜は根に連つて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜なり。」

⑨ 金輪轉する處云々。長阿含經に云く、「佛、比丘に告ぐ、世間に輪王あり、七寶を成就せり、一には金輪寶、乃至若し轉輪王圓淨提に出づれば天の金輪寶忽ち現前す、乃至、王金輪を摩捫して言く、汝東

① 甜瓜を愛して苦瓠を憎むに非ず。② 金輪轉ずる處金沙を布く。

第三十九、③ 四馬 舟行き岸移る。

鐵鞭擧する處毛骨に徹す。④ 四山を趨倒して坦路通す。⑤ 調御婆心誰か測度せん。空を履み地を走る。⑥ 快追風。

第四十、⑦ 柏樹子 寒林春を帯ぶ。

西來の祖意誰に向つてか問はん。柏樹庭前只一株。境を超え人を越えて宇宙に聳ゆ。趙州指上葉枝抽んづ。

第四十一、⑧ 袈裟功德 非色非空。

⑨ 靈山の付囑線金を連ぬ。火も曾て焼かず。⑩ 提不起。此土西天何ぞ針を隔てん。⑪ 古今苗は秀づ福田の地。

第四十二、⑫ 鉢盂 圓を超え方を越え、

鐵に非ず瓦に非ず。

虚空を吞盡して全く無底。二時受用して未だ曾て虧かず。⑬ 明公力を盡せども手を空しうして去る。此れより衲僧命糸の若し。

第四十三、⑭ 家常 亘古亘今。

喫飯著衣斯れ日常。更に餘事の敢て應に求むべき無し。阿誰か火裏に向つて水を望まん。⑮ 慕地に論じ難し親と離と。

第四十四、⑯ 眼睛 人々光明の在る有

通身 ⑰ 一隻の眼睛裏。坐臥經行外方に非ず。⑱ 往日洞山、師に就いて乞ふ。闍鞞野に遍く靈光を發す。

第四十五、⑲ 十方 擧と措と。

十方頭を競ふて茲の方に入る。一箇の閑人道

方に向つて如法にして轉ぜよと、時に金輪即ち東に轉ず云云。大毘婆娑論六十に云く、「施設論に説く、此の州の北邊大海の中に輪王の道路あり、廣さ一由旬。王若し未だ出でざれば、水に覆蔽せられ、王出づる時は小減して路出づ、庭に金沙の地に布くあり云々。」

④ 四馬 雜阿含經に曰く、佛比丘に告ぐるに四種の馬あり、一には鞭影を見て便ち驚悚御者の意に隨ふ、二には毛に觸れて便ち驚悚御者の意に隨ふ、三には肉に觸れて然る後乃ち驚く、四には骨に徹して然る後方に覺す。初馬は他乘落無常を開き即ち能く厭を生ずるが如し。次馬は已聚落無常を開き即ち能く厭を生ずるが如し。三馬は已親無常を開き、即ち能く厭を生ずるが如し。

⑦ 快追風。快は迅速の義、追風は古の名馬の名なり。

⑧ 柏樹子。會元四、僧趙州に問ふ、如何なるは是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹子。僧云く、和尚、境を以て人に示すこと莫れ。州云く、吾れ境を以て人に示さず。

⑩ 袈裟。梵には支伐羅といふ、此に衣といふ、則ち五、七、九條等なり。

⑪ 靈山の付囑。會元一釋迦佛の章に云く、「復た迦葉に告ぐ、吾が金縷の僧伽梨衣を將つて汝に傳付して補處に傳授せしむ、慈氏佛の出世に至るまで朽壞せしむること勿れ。僧伽

梨衣は九條衣、即ち大衣のことなり。

⑬ 提不起。提は「ひつさく」と訓む、手にて持ち上げられざるの意。今は六祖、黄梅に衣法を受け三更逃るゝに、慧明なるもの追ひ來り、之を奪はんとしたるも、遂に動かす能はざりしをいふ。詳しくは六祖壇經行由第一に就いて看よ。

⑮ 古今苗は秀づ福田の地。僧祇二十八に云く、「佛王舍城に行き天帝釋石窟の前に經行し、王子に、摩訶提稻田畦畔分明差互所を得るを見る、見已つて諸の比丘に語る、過去の諸佛の衣正しく是の如し、今日より後衣を作らば當に是の法を用ふべし。業疏に云く、「世に福田衣と稱す、畦畔の相に法るを以て、世田畦を用ふ、水を以て嘉苗を長じて形名を養ふなり。法衣の田は鬪いに四

利の益を弘め、三善の心を増し、法身の慧命を養ふ。」

⑰ 鉢盂。應量器のことにて、比丘の食器なれども、古來衣付法の信標として師資相承せしが故に、法の異稱として用ひらるゝに至れるなり。

⑲ 明公力を盡せども云々。此れ尙ほ前に提不起の所にて註せると同一の因縁。六祖壇經行由第一に曰く、「後を逐ふて數百人來り、衣鉢を奪はんと欲す。一僧俗姓は陳、名は慧明、乃至衆人の先となつて趁つて慧能に及ぶ。慧能衣鉢を石上に擲下して曰く、此の衣は信を表す、力を以て争ふべけんやといつて、能く草莽の中に隠す、慧明至つて提擲すれども動ぜず。」

⑳ 家常。會元十四美蓉章に云く、「師投子に問うて云く、佛祖の意句は家常の茶飯の如

場を占む。利海三千誰に向つてか問はん。朝陽先づ必ず扶桑を照す。

第四十六、無情說法 龍枯木に吟す。

無心能く無心の道を語る。誰か識る此の經自ら低聲なるを。山喚び谷應じて甚ぞ分別せん。宗風阻てす大千清し。

第四十七、見佛 有無俱に亡す。

塵積んで山を爲す山塵にあらず。疑ふこと莫れ。清淨本來身。法輪常に轉じて溪谷に響く。妙聲眞音觸處に新なり。

第四十八、法性 萬境心に歸す。

心心法法是れ同性。鬼窟寶山我が舊郷。始めて信す。善財百城の友。春に逢ふて自ら識る野林の香しきを。

第四十九、陀羅尼 右轉左旋。

朝暮三千と八百を兼ね。陀羅尼一門の中に打す。龍吟すれば則ち半天の雷を振ひ、日出で、大家闕鎖さす。

第五十、洗面 水を洗はず。

海面塵無うして波浪を洗ふ。山毛膩くがごとく緑天を衝く。清風琢磨して乾坤淨く、雪上に霜を加ふ明月の前。

第五十一、龍吟 是れ什麼の章句ぞ。

吟曲會て五音に落ちず。花枯木に開いて春心を帯ぶ。宮商角羽同和の處。此の引調高し誰か敢て侵さん。

第五十二、祖師西來意 落草面壁。

百尺の竿頭高く歩を進め、驀頭に首を回して胡僧を見る。蒲團恁地に春氣を含む。五葉の麗華自ら任騰。

し、此を難るゝの餘、還つて爲人の言句ありや也た無や。投子曰く、汝道へ、實中は天子の勅、還つて禹湯堯舜を假るや也た無や云々。

① 巨古巨今。趙州の語。

② 驚地。驚直の意。

③ 一隻の眼睛。傳燈十、長沙章に、盡十方世界是れ沙門の一雙眼とあり。

④ 往日洞山師に就いて言ふ。傳燈十四雲巖章に云く、雲巖鞋を作るの次、師(洞山)近前して云く、師に就いて眼睛を乞ふ、未審し還つて得てんや無や。巖云く、汝底阿誰にか與へ去るや。師曰く、良价なし。巖曰く、若し有るも何の處に向つてか着けん。師無語。巖曰く、眼睛を乞ふ底是れ眼なりや否や。師曰く、非眼。巖之を咄す。

⑤ 擧と措と。會元三、章敬の傳

に云く、若し能く返照せば第二八なし、擧と措と施爲實相を虧かす。

⑥ 占。占領の義。

⑦ 無情說法。傳燈五、會元二共に南陽忠國師の章、又會元十三、洞山章に出づ。

⑧ 無心能く無心云々。會元十三、洞山云く、道無心にして人に合し、人無心にして道に合す。此の中の意を識らんと要せば一老一不老。

⑨ 誰か識る此の經云々。傳燈十三首山章に曰く、僧問ふ、一切の諸佛皆此の經より出づ、如何なるか是れ此の經。師云く、低聲低聲。僧問ふ、如何か受持せん。師云く、汚染することを得ざれ。

⑩ 見佛。金剛經の文、諸相を非相と見ば即ち如來を見る。佛藏經に云く、諸法實相を見るを名けて見佛となす。

① 清淨本來身。大論に云く、清淨とは空の異名、人、空を恐るゝを以ての故に、説いて清淨と名く。

② 法輪常に轉する云々。宗鏡錄二十八、經に云く、一切衆生種々の言語皆悉く如來の法輪を離れず。何を以ての故に、言音の實相即ち法輪なるが故に。是を以て衆生の言音は皆虛空性を出でず、性あらざるなきを以て法輪一切處に徧じて間斷あることなし。

③ 法性。洪州江西馬祖大寂禪師云く、一切衆生無量劫よりこのかた、法性三昧を出でず。長へに法性三昧中に在つて著衣喫飯、言談祇對六根運用、一切施爲、盡く是れ法性。

④ 寶山。佛法に喩ふ。

⑤ 善財百城の友。華嚴入法界品に云く、善財童子福城の東六塔廟處より五衆と等しく文殊

師子を禮し、菩提心を發し已つて漸時に南に行き、一百十城を経て五十三の善知識を見る云々。

⑥ 陀羅尼。名義集五に、大論に秦に能持といふ、種々の善法を集め、散ぜず失はざらしむと云々。又は總持と翻じ、又遮持と翻す。

⑦ 海面塵無うして云々。會元十八、空室智通道人金陵に居し、嘗て浴を保寧に設け、榜を門に掲げて曰く、一物も無し、筒の甚麼をか洗はん、穢塵若しあらば何より起り來る。一句子の玄を道取して乃ち大家入浴すべし、乃至盡く道水能く垢を洗ふと。梘軌曰く、知んぬ、水も亦是れ塵なることを。直饒ひ水垢頼に除くも此に到つて亦須らく洗却すべし。

⑧ 山毛。毛は萬里不毛の毛なし。

第五十三、發無上心

木石心を含む。

① 毫端建立す法王刹。便ち自ら老婆心底に成る。蕪草拈じ來つて丈六を看る。瓦礫を放開して光明を發たしむ。

第五十四、優曇華

希有希有。

瞿曇の手裡曾て芳郁。直に如今に至つて口綿密。甚としてか人天窺ひ得ざる。飲光の微笑是れ何必。

第五十五、如來全身

體中玄。

塵刹時と法輪を轉す。句中に眼を開いて眞身を露す。① 青山綠水能く知るや否や。大地乾坤箇の人に歸す。

第五十六、虚空

電走り雷轟く。

人天の爲此の法を解説すれば、萬象森羅立地に開く。① 般若何を以てか自體と爲る。② 舊に

くるの因縁、已に前に註す。就いて看よ。

① 如來全身。法華經中の文。

② 體中玄。臨濟三支中の隨一なり。言中に何等の巧妙なき句すをいふ。宏智廣錄五に「體中玄は一切處自然に普徧す。」

③ 青山綠水。會元十七洞山言禪師上堂に云く、「山は青く水は綠に、桃花は紅に李花は白し、一塵一佛土、一葉一釋迦。」

④ 虚空。卷中に云く、「撫州石梁慧藏禪師、西堂智藏禪師に問ふ、汝還つて虚空を捉得ずるとを解すや。西堂曰く、捉得ずることを解す。師云く、爾作麼生か捉ふる。西堂手を以て虚空を撮つ。師云く、汝虚空を捉ふることを解せず。西堂曰く、師兄作麼生か捉ふる。師西堂の鼻孔を把つて拽く、西堂忍痛の聲をなして曰く、

依つて長空雲を嫉ます。

第五十七、安居

蓮は夏に逢ふて開く。

年々三月窠窟を構ふ。

切に忌む水雲の外邊に遊ぶことを。制を守つて宗風休せざる處。

然。鷺山の大會自ら儼

第五十八、出家

功德珠盤を走る。

出入無難俗と眞と。

國譯義雲和尚語錄拾遺

太殺人の鼻孔を拽き、直に得たり脱れたることを。師云く、直に須らく恁地に把握して始めて得べし。」

① 般若何を以てか云々。傳燈九大意實中の章に、「趙州問ふ、般若何を以てか體となる。師曰く、般若何を以て體となる。」

② 舊に依つて長空云々。會元五石頭の章に、「道吾問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。師曰く、不得不知。吾云く、向上更に轉處ありや無や。師曰く、長空雲を嫉ます。」

③ 蓮は夏に逢ふて云々。永平廣錄六に云く、「祇だ他に向つて道はん、夏に入つて開く日に向ふ蓮と、云々。」

④ 鷺山の大會云々。會元二に云く、「天台の智者南岳に在り、法華を誦して法華三昧を悟り、旋陀羅尼を得、靈山の一会儼然未散なるを見る。」

り、毛は草なり、草木を生ぜざるをいふ。今は草木繁茂す、故に膩といふ。猶ほ背腴肥厚の處といはんが如し。

② 龍吟。會元十三、曹山章に云く、「僧問ふ、如何なるか是れ枯木裏の龍吟。山云く、血脈不斷、乃至。僧曰く、未審し龍吟はれ何の章句ぞ。山云く、也た是れ何の章句かを知らず、聞く者皆喪す。」

③ 五音。宮、商、角、徵、羽なり。④ 引。曲なり。⑤ 恁地。地は助字、恁處と同じく「斯の如し」の意。

⑥ 毫端建立す云々。帝釋一莖草を拈じて梵刹を建つるの因縁前已に註す。

⑦ 優曇華。今は金婆羅華のこととなせり、釋尊靈前百萬衆前に於て金婆羅華を拈じて瞬目、迦葉破顏微笑して法を稟

⑧ 出家功德。觀軌曰く、「卷中分明別に一解を存す。大莊嚴法門經下卷に文殊の言く、菩薩出家は自身剃髮を以て名けて出家となすに非ず。何を以ての故に、若し能く大精進を發して一切衆生の煩惱を除かんとする、之を菩薩の出家と名く。自身染衣を被著するを名けて出家となすにあらず、乃至一切衆生に於て慈悲心を起こす、是を名けて出家となす、一切衆生の惡を見ず、亦相を取らず是を名けて出家となす。」

⑨ 相逢ふて盡く云々。越人靈徹が詩の三四句に云く、「相逢ふて盡く道ふ、官を休して去ると、林下何ぞ曾て一人を見ん。」又慈明和尚、桃花悟道を頌するに此の語あり。

⑩ 供養諸佛。下を以て上に薦むるを供といひ、卑を以て尊を貢くるを養といふ。十地經論

三に云く、「一切供養に三種有り、一には利養供養、謂く、衣服等。二には恭敬供養、謂く、香華等。三には行供養、謂く、修行信戒行等。」

① 大方外なし。大方は猶ほ大虛といふが如し。

② 超凡越聖。佛說校擧に違あらす。坐禪儀に云く、「超凡越聖も坐脫立亡も此の力に一任す。」

③ 福田僧。報恩經に曰く、「衆生は出三界の福田なり。謂く、比丘戒體を具有す、戒を萬善の根となす、是の故に世人歸信し供養し種福す。沃壤の田の能く嘉苗を生ずるが故に福田の僧と號す。」

④ 舊朋。華嚴經卷一世主品に普賢等の二十大士を序し已つて云く、「此の諸の菩薩、往昔皆毘盧遮那如來と共に善根を集

雲を穿つ明月疎親を絶す。相逢ふて盡く道ふ官を休して去ると。林下曾て一人に遇はず。

第五十九、供養諸佛 塵々刹々。

一片の香烟 大清を覆ふ。直に千佛の鼻頭を穿つて長し。知らず深夜落花の雨。戸を開けば滿城流水香し。

第六十、歸依三寶 大方外なし。

超凡越聖 福田僧。法佛袂を連ねて 舊朋を語る。廣く人天の爲に 德恵を施す。柔かなることとは水乳の如く、冷きことは水の如し。

めて、菩薩の行を修し、皆如来の善根海より生ずと。」

德恵、德は得なり、事の宜しきを得るなり。又云く、德は人心の天に得る所の理、仁義禮智信是れなり、此の五皆之を德と謂ふと。

義雲和尚略傳

遠孫寶慶住持比丘龍堂撰

師、諱は義雲、建長五年癸丑の臘月を以て洛陽 縉紳の家に産る。近世の僧史、師の傳を載せ、皆「師は太宋國の人、道元和尙の歸朝に隨つて來る」と曰ふ者は非なり。師建長五年に産る。是れ元祖示寂の年にして、歸朝に相後ること殆んど二十有七年なり。況んや隨逐して來ること有らんや。失考知るべし。幼にして英奇、常童に異なる。始め洛の教院に投じて薙染、専ら華嚴法華の 疏を習ふ。年、三八に垂々として自ら歎じて云く、「金鱗合に龍と化すべし、曷ぞ煩はしく教綱に拘はらんや」と。奮起して衣を更へ、寂圓和尚に越の薦福に參じて服膺す。圓、常に孤坐淵默、誨勵を屑しとせず、學者其の機に合ふ者有ること無し。師、自ら發願文を製して其の志を圓に告ぐ。其の略に曰く、「伏して惟れば、生死輪廻の間、

建長五年。建長は後深草帝中の曆號、五年は西紀一二五三年。此の年高祖示寂、懷非永平寺に住し、義尹入宋等のことあり。

縉紳。縉は挿なり、紳は帶なり。笏を大帶、革帶等の間に挿むをいふ。轉じて公家のことに用ふ。

近世の僧史、洪元和尚の諸祖の傳を指す。
疏。經論の文句を疏通し義理を決擇するをいふ。垂祐記一に云く、「疏は疏なり決なり、經文を疏通し佛旨を決擇す、故に疏と曰ふ。」

人間に生るゝこと甚だ難し、佛法流布の代、正法に遇ふこと最も稀なり。①
 浮木も喩へに非ず、曇華争か比べん。然り而して、適々正嫡の室に投じて、直に無上の道を修す。未曾聞を聞き未曾行を行ふ、豈に歡喜せざらんや。是れ小縁に非ず、正に是れ大因縁なり。乃至常啼は東尋し、善財は南訪す。古尚ほ斯の如し、今容易にすべけんや。之を觀すれば斷臂も難きに非ず、之を念すれば燒身も何ぞ辭せん。仰ぎ願はくは、此の誓約朽ちずして、無盡未來際に至らん」と。乃ち左右に侍して採薪汲水、苦行辛修、殆んど二十年、遂に堂奥の密旨を證契す。② 永仁三年乙未四月二十日入室得法。③ 正安改元己亥九月十三日圓入寂。師、遺囑を稟けて後席を董す。同年十一月二十一日開堂演法、一住十有六歲、玄侶輻輳す。④ 正和の初、永平の義演禪師、戢化す。祖燈漸く微にして、叢規荒涼たり。大檀那雲州の太守藤の通貞、師を請じて補せしむ。乃ち請に應じて進山開堂、⑤ 嗣香、寂圓に供す。實に正和三年甲寅臘月初二日なり。時に師六十有二歲、槌拂の下頗る千衆に滅せず。家風峭峻、諸方之を憚る。任住すること十有餘年、大いに頽廢を興し、鴻業を潤色す。時に稱して永平の中興と爲

① 浮木。涅槃經二十三に云く、「清淨の法寶、見聞を得ること難し、我今已に聞く、猶ほ盲龜、浮木の孔に値ふが如し。」其の他圓覺經、稱揚諸佛功德經中に説けり。
 ② 曇華。優曇花のこと。法華妙莊嚴王品に云く、「佛值ふこと得難し、優曇波羅華の如し。」
 ③ 常啼。菩薩の名、梵に薩陀波倫といふ。智度論九十六に云く、「古人云く、此の菩薩佛道を求むるが故に、憂愁啼哭すること七日七夜なり。是の故に天龍鬼神號して常啼といふ。」東尋のこと大般若經三百九十八に出づ。
 ④ 燒身。法華藥王品等に出づ。
 ⑤ 永仁三年。永仁は伏見帝の曆號、三年は西紀一二九五年、師の年四十三歳に當る。
 ⑥ 正安元年。正安は後伏見帝の曆號、同元年は西紀一二九九年に當る。

す。晩に嗣子曇希に命じて席を譲り、⑦ 榻を東堂に移して老を頽ふ。⑧ 正慶二年癸酉十月十二日、疾無うして沐浴、衣を更へ偈を書して云く、「教を毀り禪を誘す、八十一年。天崩れ地裂けて、火裡の泉に没す」と、筆を擲つて化す。世壽八十有一、僧臘六十有五、全身を吉祥山に塔す、號して靈梅と曰ふ。師の在日、參徒宗可肖像を描き、之れを持して入宋。靈石の芝、靈隱の朋、共に語を爲つて賛す。師、曾て寶慶に在るの日、山門境致一十六處に掲げて題を安す。

所謂、銀碗峯、寶境池、虎頭岩、虹影橋、安禪石、臥龍池、三曲路、萬杉關、紫巖嶺、乘雲峯、長鯨橋、般若嶺、法華峯、假山林、靈鷲峯、舊翰林是れなり。其の法を嗣ぐ者は只だ曇希一人のみ。

國譯義雲和尚語錄拾遺終

- ① 正和。花園帝(西紀一三一二—一三一六)の曆號。
- ② 義演。本貫詳ならず、破著寺の懷鑑に就いて業を受け、四條帝仁治二年(西紀一二四一)道元に永平寺に謁して弟子となり、隨侍すること十餘年、禪師入滅の後懷井に參じその嗣となる。大衆のため永平寺に進院開堂、晩年報恩寺に退き、正和三年十月二十六日圓寂す。
- ③ 戢化。戢は藏なり、歛なり、年に當る、此の時師四十七歳なり。
- ④ 嗣香。嗣承香、又は嗣法拈香ともいふ、開堂の時、師のたみに拈香し、以て得法の由る所あるを明かにし、法乳の慈恩に報するなり。
- ⑤ 槌拂の下。槌、拂子の意にして會下といふも同じ。
- ⑥ 榻。椅子なり、席の意。
- ⑦ 東堂。又東菴ともいひ西堂に對す。蓋し東は主位なるが故に前住は東堂に居するなり。
- ⑧ 正慶二年。正慶は光嚴帝の曆號、同二年は西紀一三三三年に當る。

跋

身心脱落の道を鼓吹して、^①大雅を永平に和せんと欲する者多からずと爲さず。然も能く其の音響節奏を審かにし、而して和し得て奇絶なるに至つては、則ち惟り^②靈梅の雲和尚のみ。今古未だ匹儔有ることを見ず、故に其の提唱の發越せる、木人方に歌ひ石女起つて舞ふ。嗚呼、彼の^③金色の^④頭陀をして特地に猖狂せしむることも、亦胡ぞ獨り^⑤乾闥婆王の妙指に在るのみならんや。

正徳乙未 菊月良辰

竹斯肥後沙門 瑞方謹跋

①大雅。正傳の佛道を音樂に喩へていふ、鼓吹といひたるに對したるなり。

②靈梅の雲和尚。靈梅は義雲禪師塔の名なり。

③金色の頭陀をして特地に。會元一に曰く、「世尊、因みに乾達婆王樂を獻す。其の時山河大地盡く琴聲を作す。迦葉立つて舞を作す。王問ふ、迦葉は豈に是れ阿羅漢にして諸漏已に盡きざらんや、何ぞ更に餘習有る。佛の言く、實に餘習なし、謗法すること莫れ。王又琴を撫すること三遍、迦葉又三度舞を作す。王曰く、迦葉舞を作す、豈に是ならざらんや。佛の曰く、實に曾て舞を作さず。王曰く、世尊何ぞ妄語することを得る。佛の曰く、妄語せず。汝琴を撫して山河大地木石盡く琴聲を作す、豈に是ならざらんや。王曰く、迦葉も亦復た是の如し、故に實に曾て舞を作さず。王乃ち信受す。」

④頭陀。杜多といひ、淘汰、斗鉢、抖擻、修治等と譯す。煩惱妄想を去つて、佛道修行をなすこと。又種々の苦行をなすが故に苦行とも譯す。

⑤乾達婆。尋香、食香、嗅香と譯す、天帝釋の俗樂神、金剛窟中に居す。

⑥菊月。陰曆九月の異稱。

⑦竹斯。筑紫に同じ。今の九州を指す。

⑧瑞方。面山と號す。肥後三島の人、靈元帝の天和元年（西紀一六八三）に生れ、後櫻町帝明和六年（西紀一七六九）寂す。博學宏識、力を祖風の宣揚に盡し、元山、天桂、指月等と共に曹洞の中興と謂はる。

早歲掛冠萬緣俱棄、洞飲木飡、水懷藥志、趣向三天、步驟十地、道蔭群生、德周品類、赤手起洞上之孤宗、談咲措君臣於五位、若非乘願力而再來、又安得迥然而獨異。
永平住山雲和尚壽像、其徒宗可請贊。
泰定改元歲在甲子春

靈隱山獨孤叟淳明題

義雲和尚語錄序

或云，拈華微笑，默露真宗，面壁立雪，密證玄旨，言語道斷，心行處滅，只後之來者，不守本分，鼓動樺唇，說禪說道，所以真宗玄旨，殆將拂地，不亦怨乎？予云，實如所說，然未可槩而言，夫佛祖宗旨，專在妙悟，不必拘語默，苟及到妙悟田地，語也默也，同歸性源，始無兩般，昔者黃面老子，演出一大藏教，天上人間，龍宮海中，無處不流通，而於末杪頭，自告示云，我四十餘年，未曾說一字，又我永平高祖云，言語道斷者，謂一切言語也，心行處滅者，謂一切心行也，佛佛祖祖，親言親口，譬如食蜜中邊皆甜，誰一味上妄分濃淡，義雲禪師者，寂圓嫡子，知見高一時，道聲轟千古，初補寶慶之法席，妙續先師脈，後坐永平之棠陰，能興高祖遺教，當時四方推稱洞上中興，可謂傑然老宗匠也，二會語錄，幸未磨滅，我門光輝，豈不怡悅，寶慶今之住山龍堂和尚，遠寄一本，乞山僧序以梓行，盛意不讓，謫我不得而辭，開卷目耕不覺終編，句句發默露之真宗，文吐密證之玄旨，古人云，佛語心爲宗，無門爲法門，是獨楞伽云乎，漫染秃筆，爲之序云。

維時正德乙未季夏祥旦

正山老衲欽序于洛北應峯之艸堂。

義雲和尚語錄

住越州薦福山寶慶禪寺語錄

侍者 圓宗 空寂 編

師於正安元年己亥十一月二十一日，就當山開堂，拈香祝 聖罷。

上堂云：百川向大海，而到了無異名，一心隨萬境，而轉轉後住，本位將鏡鑄像，鑑照不得，將像鑄鏡，光明自新，主不出關外，招遍身之手，接往來，賓受用途中，活通身之眼，鑑今古，且道，大衆如賓主相對，具什麼手眼，還會麼，覲面難呈，向上機，家風萬古爲人施。

上堂，廓爾而靈，本光自照，寂然而應，大用現前，木馬嘶風，不運今時之步，泥牛出海，耕破空劫之春，諸人相委，悉麼，玉人招手處，復妙在迴途。

半夏上堂，身似浮雲，心如清風，眼看無影樹，耳聽沒絃琴，半夏已過，過來底身，而今在什麼處，兄弟，但如墮見聞去，則向第二義門作模樣，作麼生，是第一義諦，良久云：翡翠踏翻荷葉雨，鸞鷲衝破竹林煙。

上堂，世尊有密語，迦葉不覆藏，死中有活，不被空礙，活中有死，不被物礙，有不是，有無，不是無，芭蕉和尚道，懶有拄杖子，我與懶拄杖子，懶無拄杖子，我奪懶拄杖子，畢竟作麼生，心地含諸

種、普雨悉皆生，既悟華情已，菩提果自成。

中秋上堂，開乾坤眼，更無當眼之境。放水天光，終作應物之照。船子垂絲綸，直下釣得載船歸。雲巖擎掃帚，驀頭拈起對空拂。豎起拂子云：而今將來在雲上座手裡，還是拂什麼物。大眾要委悉麼，本來無一物，何處拂塵埃。

開爐上堂，舉永平初祖云：火爐今日大開口，廣說諸經次第文，鍊得寒灰與鐵漢，心心片片目前殷。師云：深撥冷灰，看小火，驀頭開示轉真文，點炭添柴似無意，陝府鐵牛鍊得殷。

上堂，朝打三千佛，祖不證，暮打八百狸奴，悉知順行也。達磨西來九年面壁，逆行也。庭前柏樹枝葉成堆，一念萬年，如以鏡鑄像，萬年一念，似以像鑄鏡，爲甚恁麼。大眾還會麼。良久云：丙丁童子來求火，天上斗星廓照空。

佛涅槃上堂，常寂而照，無功中辨位，顯赫而靈，自位中立功，綿密密處，回互傍參，明歷歷時，孤圓絕跡，諸禪德但如釋迦老子，至今日半夜，入般涅槃，還有出沒應變底道理麼。良久云：唯一堅密身，一切塵中現。

上堂，虛空包容萬像，無潰散，大地突出，一心不覆藏，一隻眼睛，明歷歷於盡十方界，無量寶刹，露堂堂於一微塵裏，本地風光，不曾欠少，非情識計較之所及，所以南嶽磨磚，東平破鏡，可謂無功之時立功，無位之處排位，大眾要會，如是手段麼。良久云：三級浪高魚化龍，癡人猶辱夜塘水。

佛生日上堂，處塵不曾染塵，以水如何洗水，一性本然，絕來去，萬德圓成，合諸緣，所以現降神

誕生之身，示灌沐清淨之體，七步周行，步步不迷方，天上天下，巍巍獨稱尊，諸禪德作麼生，是我佛降生，灌沐底道理。良久云：摩耶漆桶忽然脫，難陀鼻頭竊地穿。

解夏上堂，一也不住，箇箇圓成，異也無間，法法無礙，把定則凡聖人畜同居，如成一拳，放行則東西南北，分位似豎五指，兄弟孟夏構窟籠，初秋開布袋，中間九句作麼生履踐，還有奇特事麼。良久云：坐臥經行非我事，清風明月自相宜。

上堂，磨磚作鏡，魔則作佛，以鏡鑄像，光歸何處，拈來盡界，坐蒲團上，放下蒲團，掛盡虛空，記得嚴陽尊者問趙州，一物不將來時如何。州云：放下着。尊者曰：一物既不將來，放下箇甚麼。州云：恁麼即擔取去。師曰：要委悉這箇道理麼。佛子住此地，則是佛受用，經行若坐臥，常在於其中。上堂，登山須到其頂，不到不知宇宙之寬，入海須徹其底，不徹不測滄溟之深，諸兄弟入法須辨其通塞，不辨不得脫落之道，記得洞山問僧，什麼處來。僧云：遊山來。山曰：還到頂否。僧云：到。山曰：頂上還有人否。僧云：無人。山曰：恁麼即闍梨不到頂。僧云：若不到頂，爭知無人。山曰：闍梨何不且住。僧云：某甲不辭住。西天有人不肯。師曰：這箇道理要委悉麼。一片白雲橫谷口，幾多歸鳥盡迷巢。

上堂，永平初祖云：吾佛謂諸弟子曰：吾有四念處，所謂觀身是不淨，觀受是苦，觀心是無常，觀法是無我。永平亦有四念處，觀身是皮袋，觀受是鉢盂，觀心是牆壁瓦礫，觀法是張公喫酒李翁醉。師曰：不同釋迦老子，不同永平師翁。山僧有四念處，且道：大眾作麼生是身念處。盡十方世界真實人體，作麼生是受念處。大海元不辭衆流，作麼生是心念處。山河大地日月星辰，作

麼生是法念處，說似一物即不中，不涉諸心數，向上一句又作麼生，良久云：一念無念，念念不住。

上堂：一毫穿衆穴，大地無遮欄。古今本無向背，縱奪更不休歇。或時遊佛土，或時入魔宮。或時過平坦路上，或時臥荆棘林中。且道：現前大衆，而今卓立之處，是平坦路麼？是荆棘林麼？試道看。若會得，許汝一隻行脚眼。若不然者，有寒暑促君壽，有鬼神妬君福。

上堂：隔山見煙知是火，隔牆看角知是牛。春自百花明明，誰疑本來心。秋自清風颯颯，須悟祖師道。虛空是根，森羅是境。根與境猶如鏡上痕，明鏡元無瑕。畢竟作麼生體悉，良久云：萬古碧潭空界月，再三撈攪始應知。

閉爐上堂：有時開口吐炎熱，有時覆頂圖寒灰。如世界潤，同古鏡量。且道：大衆而今現成什麼圖，良久云：夜半穿靴去，天明戴帽歸。

上堂：椅木之質，死灰之心。眼睛霹靂，鼻孔崇垂。把定萬象無象，放行全手無手。動靜二相了然不生，既得恁麼無生，爲甚諸人而今上堂立地，聽得箇什麼法，證契箇什麼心，還要委悉麼，良久云：動容揚古路，不墮悄然機。

佛涅槃上堂：向上二千餘白，花萎風悲。直下一念萬年，雲慘水咽。不傳一路，千聖不奈何。付囑有在，諸人得便宜，所以道：若道滅度，非弟子眷屬。謂非滅度，非弟子眷屬。大衆要與釋迦老子相見麼，豎拂子云：相見了也。畢竟作麼生，良久云：迦葉曾禮雙足。

結夏上堂：九旬繩墨非長短，曲直縱橫功業新。木馬泥牛混雜處，嘶風吼月力耕親。諸禪德，摩

竭掩室，少林面壁，有什麼意旨，良久云：一粒在荒田，不耘苗自秀。

上堂：無諸聖可慕，無己靈可重。虛空即是色，大地卻非塵。如薰風生林岳，梅雨滴簷頭。卻爲色塵耶，卻爲虛空耶，古人云：雨從何來，風作何色。大衆試斷看，若道不得，拄杖子代一轉語。卓一下云：色空而今在什麼處。

謝新舊維那上堂：錯錯轉掌握中，攢有摧無。佛祖來舉唱處，作模作樣。朝打三千，進前成功。暮打八百，退後就位。雖然恁麼，新舊絕待前後際斷，爲甚有箇通路，良久云：偏正不曾離本位，無生那涉語因緣。

上堂：松自直，棘自曲。日暖銷霜，月冷結露。一靈常住性，於什麼處見得。是法平等，無有高下。是心一齊，有何曲直。諸禪德，要委悉者，箇道理麼，良久云：深山大石，頭滑綠水，白雲流不流。

上堂：心非覺知，蕩蕩乎如大虛。法離見聞，巍巍乎無倫匹。高而不可窮，深而也難到。雖然恁麼，把則不出掌握中，放則遍於塵刹外。大衆要體悉者，箇道理麼，良久云：無影樹下，合同船瑠璃殿上，無知識。

冬至上堂：浮虛境上，暑運推移。枯木岩前，龍吟忽起。陽曲初報，螿類密動。雖然如是，實際理地，不受一塵。建化門頭，作模作樣。畢竟如何體取，良久云：死中得活。

因雪上堂：踏斷千差岐路，方得直下承當。瞞他一點不得，遊踐自己家鄉。當恁麼時，法法不離位，步步不迷方。彼此同開鑿迦羅眼，自他等具知見香。既得到恁麼田地，還有同見同般底證據也否，良久云：莫謂吾家無寶具，滿床盡撒雪珍珠。

佛成道上堂舉古德云。把墨打失眼睛時。雪裡梅花只一枝。而今到處成荆棘。卻笑春風綠柳吹。師云。梅樹歲寒自有時。芳心偷綻舊年枝。先春漏泄陽春曲。黃面自橫鐵笛吹。歲旦上堂舉宏智禪師云。歲朝坐禪。萬事自然。心心絕待。佛佛現前。清白十分。江上雪。謝郎滿意釣魚船。師云。年朝會禪。衲子泰然。萬物有慶。十方目前。山上同看梅與雪。江邊載月謝郎船。謝新舊兩班上堂。尋常用一面古鏡。胡漢現來。曾不妨。賓主舊新無異轍。驀頭相見各承當。上堂。青皇令極。綠陰花尚香。赤帝位新。薰風氣含火。時節不言。恁麼代謝。且問大衆。空劫已前。公案子。恁麼改轉也。無。莫向聲色邊著眼。豈不見風穴和尚。因念真二上座。俱詣方丈。穴問真曰。如何是世尊不說說。真云。鶉鳩樹頭鳴。穴曰。汝作許多癡福。何用。乃顧念曰。云何。念云。動容揚古路。不墮悄然機。穴謂真曰。聞渠語乎。師云。大衆要會。首山契風穴底意。旨麼。良久云。廊中雖有隱形術。爭似全身入帝鄉。

結夏上堂。我住則汝同住。我行亦汝共行。打得諸佛要機。而結制。拈提祖師心印。而護生。山高不礙雲倚。如父如子。谷虛有應聲響。爲弟爲兄。旣得恁麼和同。還有什麼行履。良久云。瓊樹寸寸寶。栴檀片片馨。

上堂。父母非我親。諸佛非我道。要識箇中意。父少而子老。記得南泉云。王老師十八上解。作活計。趙州云。老僧十八上解。破家散宅。師曰。父子二老。解處如何。辨取南泉臂長衫袖短。被鬼神覷見。趙州身貧心儉。無卓錫處。薦福不然。十八上已前。發心發足。十八上已後。大悟放行。正當十八上解。一切智智。且問大衆。古人解處。薦福悟處。是同是別。試斷看。拈弄拂子云。如今薦福

手裡有一箇。欲向諸人十八上發。還要的當麼。竖起拂子。又擲下云。射虎未了。便射石。

上堂。萬機休罷。千聖不携。一言相契。古今一揆。暗中著眼。明裡藏身。借位明功。體在用處。借功明位。用在體處。所以道。君臨臣位。猶帶凝然。子就父時。尚存孝養。玉關未透。正迷一色。寶印全提。露那文彩。還要委悉麼。傍觀者。晒。當局者。迷。

上堂。衆流投大海。鹹淡味同。四夷歸一朝。君臣道合。所以四種分主賓。五位列偏正。雖然如是。立正則正外無偏。五位俱正中來。立偏則偏外無正。萬物各偏中至。不見道。我逢人。則便不出。出則便爲人。我逢人。則便出。出則便不爲人。良久云。偏正不曾離本位。無生那涉語。因緣。

上堂。白雲以山而爲父。明月假水而爲家。未審衲僧。以何而爲父。假何而爲家。不見道。從佛口生。從法化生。旣得恁麼。爲甚麼道。返本還源。事轉差。本來無住。不名家。畢竟如何。十二時中。不依倚一物。

上堂。感應道交。山呼谷響。因果絕待。果熟花開。菩提本無樹。明鏡亦非臺。每常行異類。又且好輪迴。不見古德道。煩惱海中爲雨露。無明山上作雲雷。於此薦得。鑊湯爐炭。吹教滅。劍樹刀山。喝令摧。

上堂。春來弄蘆荀之花。冬至吟銀椀之雪。古德云。心隨萬境轉。轉處實能幽。隨流認得性。無喜亦無憂。入山不畏虎。兇獵夫之勇。入水不避蛟。龍漁者之勇。白刃臨前。見死如生。將軍之勇。如何是衲僧之勇。寒時寒殺閻梨。熱時熱殺閻梨。還有遊戲自在處也。無。百尺竿頭。進一步。步。

上堂十五日已前月吞卻萬像，琢成一顆寶珠。十五日已後，月吐卻萬像，鑄得幾多明鏡。古德道：心月孤圓，光吞萬像，光非照境，境亦非存。光境俱忘，復是何物？師曰：大眾當光境俱忘時，如何領略？淨智圓明，智外無冥智之境，心境絕待，境外無照境之智，又不見道。賓主存時，全是妄。君臣合處，正中邪。還要委悉麼？木馬嘶秦山頂，泥牛耕海上田。

當山初祖三十三回忌，陞座。師此時在永平，赴齋當山。拈香云：此一瓣香，從胸襟拈出，欲酬恩。恩還如怨，欲報怨，怨亦似恩，超恩越怨，是一本分。上爲日月星辰，作光彩；下爲萬木百草，作靈根。燕向爐中，供獻先師。當山初祖，用酬法乳之恩。就座，乃云：萬機休罷，一物長靈。太虛寂爾，霹靂轟轟，未審先師平生，是甚麼心行，使吉祥孤雲嶺之風月，排薦福深岳林之巖扉。此風隨西來三周棹而滿，此月逐南海一葦船而來。正恁麼時，不涉去來路。阿誰敢拾遺舉？先師曾在永平時，問二祖云：如何是師子吼？一音，祖曰：更不外出。師云：爲甚不出？祖曰：百獸腦裂。師云：恁麼太似無益。祖曰：無一人不承恩。師云：某甲會得。百獸皆作師子吼。祖曰：如何恁麼會？師云：萬曲是一聲。祖印曰：汝能達觀音入理門。師作禮拂袖而嘯去。頌云：師子吼時衆獸喪，死中得活卻和同。一聲奏出新豐曲，觀自在門從此通。

上堂，心心無異心，一心一切法，念念非異念，一念是萬年。

住吉祥山永平禪寺語錄

侍者曇希編

師於正和三年甲寅十二月初二日入院。

山門金鷄報曉，解脫門開，依然引步，腳下風雷。

佛殿世尊有密語，長舌不離唇，迦葉不覆藏，家國從茲富，安樂兜率，左方右邊。

據室一丈水，一丈波，於中能唱巴歌，勘破毘耶小神通了，如許閑座，今在什麼，縱橫不容擬議，亦是葛藤舊窠。

陞座，祝聖罷，又拈香云：此香穿鑿佛鼻孔，通混沌未分之靈薰，包容祖祖髓皮，全兒孫繁茂之根蒂。燕向爐中，供養薦福開山圓和尚大禪師，用酬法乳之恩。

提綱（問答不錄）半路作新豐吟，慈頭轉空劫身，谷含應聲之響，山屬愛寂之人，腦後繼踵溫故，目前亡對知新，孤輪高耀寰中不夜，五葉不凋劫外逢春，若又於此薦取，懷甕之愚，非是外枯，棹之巧，不必親動容，不出本來地，誰向清空拂客塵。祖祖於此作大佛事，佛佛於此轉大法輪。山僧於此開堂演法，作麼生與佛祖相見，明月滿空，天水淨，弟兄俱在合同船，復舉百丈因僧問：如何是奇特事？丈云：獨坐大雄峰，天童淨和尚拈曰：大眾不動著，且教坐殺者漢。今日忽有人問淨上座，如何是奇特事？只向他道：有甚奇特，畢竟如何？淨慈鉢孟移過，天童喫飯。師曰：印今有人問山僧奇特事，對他道：一枝藤打人有力，一瓶水受用無窮。

上堂十方無壁落，從來絕遮欄。四面亦無門，這裡是入處。瞎卻眼睛，而與七佛諸祖相見，分明言理，而與燈籠露柱談論。當恁麼時，頑石點頭，草木現瑞，不見僧問。仰山曰：法身還解說法也。無山云：我說不得，別人說得。僧曰：說得底人在甚處。山乃推出枕头，馮山聞乃云：寂子用劍。及上事，且道：永平門下還恁麼說得。恁麼聞得麼。良久云：越山日暮，少林客應聽子規深夜啼。上堂：當山初祖示衆云：向上一路，玲瓏八面。當陽要機，全身擔來。是乃金鎗難掩，非乃玉石俱焚。擬議不進，盡界粉碎。總不恁麼，又且如何。良久云：是非不掛娘生口，自有傍觀論短長。大衆要會初祖道處麼。一條拄杖拄天地，更使阿誰論短長。

上堂：一物長靈，萬戶俱透。百草本明明，祖意自了了。天普覆兮人人頂相圓，地普載兮箇箇腳跟平。於此薦得，一也不是，二也不成。向什麼處鼓唇皮，還會麼。良久云：風月寒清古渡頭，夜船撥轉瑠璃地。復舉雲門示衆云：倘若未得箇入處，三世諸佛在汝腳跟下，一代藏教在汝舌頭上。且向葛藤處會取。師曰：韶陽老漢，雖恁麼道，未免認奴爲郎。永平門下有者，活路在。倘若實未得箇入處，更買草鞋行腳好。

上堂：舉曹山因僧問：眉與目還相識也無。山云：不相識。僧曰：爲甚不相識。山云：爲同在一處。僧曰：恁麼即不分也。山云：眉且不是目，僧曰：如何是目。山云：端的去。僧曰：如何是眉。山云：曹山卻疑僧曰：和尚爲什麼卻疑。山云：若不疑，即端的去也。師頌曰：弟兄本是一家兒，著眼青睞展兩眉。誰識曹山端的處，經行坐臥不相疑。

上堂：目前機肘後印，曾無間隔。即今分明，雖然恁麼揚眉陶目，則被眉目熱瞞。談玄說妙亦被

玄妙污染。若又住寂寂還縛通身，解空空自作窠窟。大衆作麼生行履，得不墮恁麼偏坑去。還會麼。良久云：動容揚古路，不墮悄然機。復舉曹山因僧問：時節恁麼熱，向什麼處迴避。山云：鑊湯爐炭裡迴避。僧曰：鑊湯爐炭裡如何得迴避。山云：衆苦不能到。師曰：曹山雖恁麼道，未免向外馳走。若有人問：永平時節恁麼熱，向什麼處迴避。對他道：須向日下迴避。又問：炎炎日下如何得迴避。良久云：時節若至，佛性現前。

上堂：真說不對機，真機不待說。所以大人具大用，大機具大智。且道：諸禪德畢竟作麼生。是大人大機底作略，還委恁麼。靈羊掛角絕跡亡蹤，復。山初祖曰：古人拈起扇子云：任爾千般巧，終無兩樣風。山僧即不然，任爾千般巧，更看萬樣風。師曰：雲上座欲加半句補古人虧闕處，任爾千般巧，終無兩樣風。招涼兼翫月，只在一輪中。

結夏上堂：盡乾坤大法界，是我一箇身。便能禁足，遍塵刹諸有情，是我真箇漢。方解護生，禁足也步步不妄移。護生也心心不妄動。所以道：以大圓覺爲我伽藍，身心安居平等性智。佛佛到此同歸，人人住此法爾。還要委恁麼。一輪皎月大圓覺，利海三千鐵一團。步步點空無朕跡，人人喚爲我伽藍。

上堂：途中相過，傾蓋直下回頭阻關。向去從茲普請去，卻來自此悉來端。拈拄杖劃一劃云：過去諸如來，此門已成就。現在諸菩薩，今覺入圓明。未來衆學人，當依如是法。所以道：湘之南潭之北，中有黃金充一國，無影樹下合同船。瑠璃殿上無知識，復舉世尊一日與阿難行次，見一塔廟，便作禮。阿難問曰：是何人塔廟。佛言：是過去諸佛塔廟。阿難曰：過去諸佛是誰弟子。佛言：

過去諸佛是我弟子，阿難曰：應當如是侍從，便行。師云：逢佛則拜佛，騎牛更覓牛，還委悉麼？過橋村酒美，隔岸野花香，水向竹邊綠，月當松頂涼。上堂：鶴自長，截之非鶴；鳧自短，續之非鳧。須信十方佛土中，唯有一乘法。若復擬議，是法住法位，世間相常住。

上堂：性海澄澈徹底，一波纔動萬波隨。龍魚活路更無外，裏許不曾宿死屍。

謝監寺上堂：如虛空無邊際，覆大方似日月轉光明。分日夜只是觸事無私，何更有物不辨。進致將軍太平，退解師子返擲。玄則丙丁因緣，楊岐挾路相見，亦是非分外。良久云：金繩拽轉泥牛鼻，半夜馳來海上耕。

上堂：虛空不自知，虛空邊量大地不自測。大地廣狹，自己三昧非是自己之所覺。他人靈性豈落他人之心機，雖然恁麼魚在水得命，鳥遊空保身。且問大衆：衲僧在什麼處保持身心去？良久云：百尺竿頭，一進一退。

上堂：本際智非是隱顯，空劫身不屬因緣。雖然恁麼，有時爲一頭兩角水牯牛，有時作八臂三目上天子，青鬚鬚處穿靴去，明歷歷時戴帽來。恁麼消息未免往來機，作麼生是本來一段光明。良久云：鳥棲無影樹，花發不萌枝。復舉玄沙因僧問：三乘十二分教則不要，如何是祖師西來意？沙云：三乘十二分教總不要，師曰：且問大衆這一則公案，作麼生領略？若就三乘十二分教內覓，金屑雖貴，落眼成翳。若向三乘十二分教外求，野鹿臨渴逐陽炎走。有人問：永平三乘十二分教則不要，如何是祖師西來意？對他道：祇這三乘十二分教，總非三乘十二分教。

正且上堂：乾坤出入，諸僧鼻孔而平穩。日月扶出佛祖眼睛而清明。所以道：天地與我同根，萬物與我一體。億萬斯年於今日成，百千國土在是處現。釋迦老子於此說：一乘法，達磨大師於此敷：五葉春，諸人還看麼？元正啓祚萬物咸新。

上堂：記得臥龍因問了院主，先師云：盡十方世界是箇真實人體，爾還見僧堂麼？主曰：和尚莫眼花。龍云：先師遷化肉猶煖在，永平聊向第二義門下註脚。先師道：盡十方世界是箇真實人體，還見僧堂麼？豎拂子云：這箇是永平拂子，那箇是真實體。和尚莫眼花，眼裡無筋一世貧。先師遷化肉猶煖在，水自竹邊流出綠，風從花裡過來香。

上堂：舉青原謂石頭云：人人盡道曹溪有消息，頭曰：有人不道曹溪有消息。原云：大藏小藏從何得來？頭曰：盡從這裡去。諸事總不關，師曰：青原只知大家日月照，不覺自己眼晴明。石頭雖見家裏寶貝貴，爭識崑崙靈玉多。大底大小底小者，裡是什麼處在？說闕說不闕，良久云：一夜落花雨，滿城流水香。

上堂：舉僧問首山：一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法，皆從此經出。如何是此經？山云：低聲低聲。僧曰：如何受持？山云：莫染污。宏智禪師拈曰：來問此經低聲低聲，大千卷自塵中出。三世佛從口裡生，天得一以清，地得一以寧，空無依兮谷不盈。摩訶般若波羅蜜，落日漁樵歌。太平師曰：永平不惜二老舌頭，欲重宣此義。良久云：舌相廣大轉此經，近聞溪澗水無聲。百千妙義許誰解，風入梧桐秋始成。

上堂：處天地之間，而先天生地，是什麼物？稟佛祖之氣，而超佛越祖，是什麼人？插一杖子，建寶

王刹坐一微塵轉大法輪當恁麼時微塵是非小大千不是大所以教中云是法平等無有高下大衆還會麼堅起拂子云是什麼法

上堂本性一靈之光明與時發起通身回互之手眼觸處相宜眼處聞聲而明歷歷耳處見色而淨裸裸石人似汝今能唱巴歌汝似石人兮須和雪曲塵塵發清淨智處處入普門境諸人要委悉這箇道理麼古渡風清一片秋月色江光冷相照

三月旦上堂召大衆云時有常催人人豈虛度時或水中亡軀或火裡失命及刀割腸箭鋒透骨病患不擇老少閻王寧問貴賤剛質微纖罪犯供以鐵牀洋銅依宿生善種得箇人身答般若良因投祖師門下今日若空過幾劫又相逢寒氣已去熱時未來辨道時最宜莫空度光陰上堂舉僧問九峰祖祖相傳當得何事峰云釋迦慳迦葉富僧曰如何是釋迦慳峰云無物與人僧曰如何是迦葉富峰云國內孟嘗君僧曰未審相傳底事如何峰云百歲老兒分夜燈師曰妙明田地纖塵難點鬧市門頭不妨相逢暗裡轉身平坦路明中覆頂等閑人大衆還體悉麼泥融飛燕子沙暖睡鴛鴦

解夏上堂縛解不到處大解脫門開從聽炎暑去誰礙冷風來未曾存軌則何更用安排於此薦取木馬奔迭石牛懷胎還委恁麼轉身透出竹竿路開眼掀翻甕裡天

謝知事上堂執叢林輔弼之柄樹大家平穩之功事事圓通觀自在尊把手行門門不隔香積如來送供到雖然如是未假楊岐挾路相見何用毘耶城野狐通還要委恁麼良久云廬陵米價高

中秋上堂蒲團功就起三昧大用現前照世間夜半正明望之被光礙天曉不露觀之被眼瞞直得開沙門一雙眼睛子活神境通徹大機關到恁麼田地還有奇特麼良久云鯨吞海水盡露出珊瑚枝

九月朔上堂明歷歷處匿跡穩密密間轉身天不言而日往月運地不言而山高海深衲僧不言而超凡越聖拄杖不言而與奪縱橫只如樹凋葉落體露金風是言不言良久云橋流水不流

上堂舉僧問雪峰聲聞人見性如夜見月菩薩人見性如晝見日未審和尚見性如何峰打三下其僧後問巖頭頭打三掌雪竇拈云應病設藥且與三下若據令而行合打幾多師曰永平見性不同聲聞不同菩薩不同三大老漢諸人著眼見取卓拄杖三下乃下座

臘月旦上堂乾坤之內宇宙之間中有一寶秘在形山肇法師雖然恁麼道只解話月指月未能指話俱忘永平不然乾坤宇宙一拶拶破教具眼人無疑猜卓拄杖一下云還見麼梅花與白雪同色不同香

上堂是法非計較所到吾心不被淨穢礙細而無間隙大而絕方隅毫釐差之不應律呂直下承當本無奴婢但知有故狸奴白牯進修行地以不知有三世諸佛迷法王城若於此論勝負萬里望崖洲正當恁麼時如何著手去良久云聊將拄杖攪滄溟令魚龍知水爲命

小參

寶慶冬至小參，陰也無去處，陽也沒來由，不涉短長時劫，豈拘始終羅籠，爾莫怪於我，風凜凜破竹，吾無隱乎爾，雪皚皚壓松，所以道時節若至其理自彰，堅起拂子云：者箇是三祇劫之本際，一刹那之中央，其或擬議隔劫在，畢竟如何，良久云：夜半烏兒頭戴雪，天明啞子抱頭歸。除夜小參，廓爾而靈，本來光明自照，寂然而應，特地大用現前，向去底泥牛入海，沒消息，卻來底木鷄唱曉，發元樞，前後際斷兮，古今住無諍三昧，來去無蹤兮，風煙橫古渡頭邊，如殘臘已極，新歲未到，中間如何措足，還委悉麼，千光不照空王殿，夜半烏鷄帶雪飛，復舉趙州因僧問兩鏡相向，那箇最明，州云：汝眼皮蓋須彌山，當山初祖拈曰：或有人問永平兩鏡相向，那箇最明，爲他拈拄杖道：者箇是拄杖子，他又道：此是長連床上學得底，佛祖向上道什麼，擲下拄杖下座，師曰：今夜問山僧兩鏡相向，那箇最明，卽道一段光明照古今。

永平入院小參，法隨法而行，法幢隨處建，一出六出藥山師子，異類同類青原麒麟，拈提自家鑰子，打開向上玄關，當恁麼時，祖宗爐鞴鍊魔鍊佛兮，錢湯消融，本分錯錯，鍛自鍛他兮，面目儼爾，既得恁麼手段，作麼生的當，莫道鯨鯨無羽翼，今日親從鳥道回，復舉藥山因僧問：祖師未到，此土此人有祖師意也，否，山云：有，僧曰：已有祖師意，又來作什麼，山云：爲有所以來，師頭曰：劫前消息屬誰人，五葉聯芳芬，復新要識少林真妙訣，一聲鐵笛奏陽春。

結夏小參，擊破虛空，構九旬窠窟，打開圓覺，接大地有情，驅馬牛而耕自己一片田地，會凡聖而張空劫已前規綱，所以道十方同聚會，箇箇學無爲，此是選佛場，心空及第歸，且問龐老者，理不立階梯，及第底是什麼，若又不證心地，本來空，爭安居平等性智，於此薦得，許爾及第，雖然如是，同共一法中，何更作揀擇，還委悉麼，爭之不足，讓之有餘，記得當山初祖結夏小參，舉慈航禪師道：參禪人第一鼻孔端正，次眼目清明，其後貴宗說俱到，祖云：大衆要會鼻孔端正之道，理麼，若也會得穿破鼻孔了也，要會眼目清明麼，便是被傍觀人換卻木楔子了也，要會宗說俱到麼，以拂子擊禪床，一下云：宗也到，說也到，向上又有方便在，慈航又云：九十長期，明日始莫將繩墨外邊行，永平今夜續此兩句，爲禁足規繩，九十長期，明日始莫將繩墨外邊行，草鞋拄杖都虛脫，但愛瞿曇活眼睛，師曰：山僧續尊韻而重宣此義，祖宗機要正分明，繩墨爲規，只麼行，雲倚青山子，歸父豁開鐵眼與銅睛。

解夏小參，大功轉處，解縛去黏，三期滿時，擔起拄杖，不從人傳教，誰慕千聖，非是自得，何更重己靈，一葉飄空，林岳體露，大洋涵月，珊瑚映光，正恁麼時，九十日飯錢還了也未，若未還了，春爾拄杖子，若又還了，與爾本分草料，恁麼相應得，時不虛度，觸處自由，還體悉麼，滿頭白髮，離岩谷，半夜穿雲入市，廓復舉，歸宗因僧辭，宗云：向什麼處去，僧曰：諸方學五味禪去，宗云：吾者裡只有一味禪，僧曰：如何是和尙一味禪，宗便打，師曰：這箇一槩子，如何透得去，打凡打聖家風，顯示一片打成禪本無味。

法語

示禪人

受生於佛法流布處聽法於祖師單傳門廣大劫際最稀也此生不可空過是法豈不開明耶就中坐禪一行三昧中王三昧也祖師西來不務餘事面壁打坐而已爾直須亡回光返照底之智識迷頭認影底之愚始得不見道三級浪高魚化龍癡人猶辱夜塘水於此薦取不愛世人愛處不望諸聖證階不混塵中舉威音世外之步超越凡聖弄從上祖宗之風焉勉旃勉旃

同

吾胸中宛如虛碧更無語句可與人逢飯喫飯逢粥喫粥困來合眼健則經行其或要文字如如文字顯露萬象上其或求心要祖祖心要全在備動靜既在那邊擔荷恁麼事卻來這裡履踐恁麼道者也名也不得狀也不得所以道從來共住不知名任運相將只麼行自古上賢猶不識造次凡流豈可明聖諦尚不爲何況世諦耶洞山示衆云在千人萬人中不向一人不背一人底是什麼人雲居出衆云某甲參堂去此則吾家家珍勿謾拋卻朝往西天而參取去暮歸東土而問著來問來參去月深年久卻來者裡須得相逢洞山雲居去若又不得相逢長連床上三二十年著心於墻壁辨取矣

佛祖贊

觀音

隨流點腳踏斷幾煙雲海鳥碧岩裡快占入理門童子莫艱百城步大千春在箇花園瓶中蓮蓮底水涅不染攪不渾

布袋

烏藤擔起大千界行則同行休共休兜率法音成噴地這邊那畔放優遊

永平初祖

捷俊奇相博大心量吸盡曹溪淵源而湛性海奪取太白拄杖而返扶桑鼻孔端有衝天氣眼瞳重具射人光一花五葉春日暖嶺月洞風秋夜涼

永平二祖

肝膽彰眉目乾坤斂寸心湛洞水派兮眼睛如碧海繼吉祥踵兮頂毛似雪林若寶鑑含萬象同虛空不掛鍼閃電威光舒又卷儼居貌座震雷音

寶慶初祖

全相之妙通身之照奪得洞山頂上眼睛透徹吉祥堂與心要據於塵塵三昧座床暢於剎剎常說曲調拈弄拂柄兮殃及兒孫打雲打水兮好一場笑

自贊

聖也不慕，凡也不疎，曲柔倚身，未涉箇言路，龜毛橫握，能質卦爻圖，衣薄洞峰，風徹骨，年邁嵩岳，雪侵顛，堪攀鐵樹，注紅血，倦處天堂，受妙娛，朝三千暮八百，喫粥了洗鉢盂。

同

面容醜，受彼欺瞞，一世貧無物，與人拂子，毫頭眼睛綻，佛魔驗了絕齊隣，吉祥峰月孤耀，蔭荀林花累春。

小佛事

戒善大姊起龕

離有離，無以戒爲心地，非男非女，以善爲莊嚴，既離有無，越男女，其間有生滅，也無生與大地，共來，死與虛空同去，所以道，生也不道，死也不道，爲甚恁麼，從來生死不相干，而今向什麼處去，足下雲生。

戒智大姊下火

無相大戒爲皮肉，不思量智爲心肝，本是一如何，涉內外，六十七年夕電收影，一靈真性老蚌含珠，要趣向那邊，真常門去，先須相見丙丁童子了，相見底道理作麼生，忽地本無第二人，盡

空俱是煙雲跡。

思達上座下火

思忖絕時，達寂滅之本路，根塵脫處，開圓通之妙樓，風吹花自飄，水涵月自流，杳杳借路鳥道，緊緊轉身裡頭，以火打圓相云，者裡是好便宜，祖佛不會回避，不回避底事，又作麼生，塵塵入箇性火三昧。

慈元侍者下火

慈門廣大，開閉有時，虛空大地，是爲本元，所以道，萬法歸一，一歸何處，某人夢中受生，夢中歸滅，脫卻平生閑皮袋，撞入涅槃一路門，與諸佛把臂而行，與列祖連袂而去，要見恁麼行履處，變以火打圓相云，未脫得這箇火聚了，須看優鉢羅華開敷，擲下火云，開敷了也。

寬海塔主下火

天闊絕涯畔，海枯看底難，珊瑚撐著月，波浪拍天翻，生也全生，花開滿樹紅，死也全死，花落樹還空，且道，本分性命在什麼處，以火打圓相云，只在這裡，擲下火云，涅槃路通。

長樂開山圓機和尚下火

超凡越聖，箇中人，入佛入魔，絕疎親，百骸俱潰散，一靈鎮常真，著破爛衫，回途移步，脫娘生袴，本路驪身，快便難逢，丙丁童子，爲半途餞，以火打圓相云，火中芬馥一莖蓮。

祥榮侍者入骨

曉風拂拂，奪春榮，還是空華從地生，欲買無門什麼價，紅爐百鍊見金精，某人保凌雪，經霜歲

寒操修碎身粉骨堅密行，玄機一撥曾來此際。大命俄零已歸無生，無生一路如何履踐。塵塵一齊入金剛定。

偈頌

山居二首

吉祥峰頭不入間，莫作四時遷變看。兀坐寥寥無對待，青山深處白雲閑。林下幽閑一世貧，無由向外問疎親。清風白月賓兼主，去就平常不誑人。

永

寒風吹結千江浪，識得元來水不流。兩岸相連鐵橋滑，行人顛倒起還休。

和雪韻

一夜換來世界新，山河大地絕埃塵。無陰陽地轉身看，花發少林千古春。

佛涅槃

瞿曇半夜賊身露，天曉追來駟巨追。蹤跡至今無覓處，黃鶯聲滑綠楊枝。

送宗規西堂歸關西

結夏來兮解夏歸，結來解去似雲飛。道無方所到家看，西北一天月一規。

送僧

同氣相通玄牝門，毫端不隔一乾坤。任他萬里回途步，足下無雲月吐痕。

師正慶二年癸酉十月十二日辭世頌曰

毀教誘禪八十年，天崩地裂沒火裏泉。

義雲和尚語錄終

時

延文丁酉受菩薩戒弟子寶慶大檀那野州太守藤原朝臣知冬發願開版矣所集鴻福上報四恩下資三有者

助緣奉行比丘 瑞雄維那

刊字奉行比丘 等理藏主

洛陽永興比丘 宏心書字

住持永平兼寶慶法嗣比丘 曇希校勘

跋

雲禪師霹靂乎千古未發之道於旬後聲前而頓俾盡大地蘇息一番焉宜哉當時盛乎永平中興之道譽矣今日此錄再行于世國之運也人之幸也雖然若欲向卷中相見猶隔山之在呵呵

正德第五龍次乙未種九月旦

城州窮谷小衲愚中拜撰

義雲和尚語錄拾遺序

自非宗眼懸日月而豁妙辯傾江河而瀉者安能晃燭乎長夜而津潤乎枯焦哉惟夫雲巖祖幼掀翻教海長挑起宗燈智光烜赫慧澤淋漓暨其當祖庭衰晚之日奮然出董永平者實俾積闇頓朗乾叢忽蘇可謂回復祖道策勳於百代焉芝靈石贊師影謂闡洞上宗風得寶慶密意振逸格機弘大法施是爲中興永平之第一世者亦不敢誣也然其語錄先彫不存後學憾焉今逢鷹峰老和尚爲序重刊誰不感喜哉仍搜我山之室內又拾其遺篇輯爲一卷同壽梓焉是時節因緣之所以現成也希冀與前錄交輝而照臨同源而流通惟時正德第五歲在乙未孟秋穀旦遠孫嗣祖比丘龍堂叟卽門盥沐焚香九拜題于越前州寶慶練若之含光室中

義雲和尚語錄拾遺

永平禪寺語錄

遠孫寶慶住持比丘龍堂輯

歲朝上堂青天得一以清白日得一以明年得一以稔月得一以盈人得一康樂國得一太平以何爲驗雨合一味潤土吐萬物榮復舉宏智古佛歲朝上堂師續韻曰擊破三千二儀廓然春含浩劫古今在前蜂舞不萌枝上藥人歌無影樹頭船上元上堂我家有箇無盡燈亘古騰今非增減不假定光尊授記豈從飲光佛處分靈山拈花胸目少室得髓安心黃梅夜半密傳石頭住山斧子皆是一燈下風流而已不見道盡十方世界在自己光明裏還要知恁麼光明麼良久云韶風新雪自爲祥一片彤霞和發光古佛誰言過去久然燈半夜挑朝陽

涅槃會上堂澹怕內無搖廓然外不亂黃閣樓前簾垂樞掩紫羅帳裏斂氣飲聲本明不隱如大虛月寂照有靈似空谷神影轉體前白雲就青山之父光分頂後新雪作枯木之英四十九年一字不說末後句義有誰論量藏山澤藏舟壑釋迦老子何處藏身良久云利利塵塵頌云半夜鐘聲轉咽霜倏然雙樹變春榮白毫輪裏自休歇遺蔭崢嶸柳絮馨

由西堂遺書到上堂，汲派投源斯道翁，離亭折柳約春風，遺書藏及愁腸斷，閃電捲光沒碧空，鳥道無涯飛騰杳杳，雲程不定來去縱橫，碧潭徹底清，浮沫更無外，大衆卻來底事則不礙，向去底人向什麼處去，還委悉麼，花落風猶馥，鳥啼山更幽。

上堂拈拄杖云，拈來拄天拄地黑漫漫，放下化龍關聒聒，一枝花綻靈山胸，目綿綿，五葉芳聯少室髓，皮密密，本性湛圓心地瑞，光發耀，六根互用通身手，眼隨宜，直得眼處聞聲悟道，耳處見色明心，所以道，石人似汝解唱巴歌，汝似石人須和雪曲，於此薦取，毘盧拈立下風舞，若窺不見頂，畢竟無依獨脫時如何，卓拄杖一下下座。

爲由西堂上堂，春風飄拂奪老梅，榮去臘月依係和嶺頭雪，投玄玄去而無去跡，密密來而絕來由，橫身曠古空處，借伴十字街頭撥轉也，長潮乘疾風激雲外，休罷也，怒濤沈淇海飲衆流，其或未然，日自照，晝月自含秋，復舉乾峰和尚云，十方薄伽梵，一路涅槃門，未審路頭在什麼處，以拄杖劃一劃云，在這裏，師云，雖然如是，乾峰老漢既被拄杖譴，永平門下還有不被譴底麼，拈拄杖卓一下下座。

上堂，非色聚受箇身，上天下地，離識知有本智，超暗越明，若又論此事，如明珠在掌，胡來胡現，十萬八千，漢來漢現，一念萬年，薦則恁麼薦，如朝日影，退則恁麼退，似水月光，遮莫嶽高四面，雪消緩，只看雨下一庭艸，自青，勾芒德振萬國際，東帝改成一朶花，正與麼時如何，辨道中事，良久云，龍吟枯木，雲起半天。

上堂，當山初祖舉梁武帝問達磨，如何是聖諦第一義，磨曰，廓然無聖，帝云，對朕者誰，磨曰，不

識，祖曰，要知達磨不識麼，廓然無聖不識，汝得皮肉骨髓，有人更問如何，教伊三拜依位，山僧有一頌，少林消息無人識，殘雪和風稍入髓，胡漢何問古鏡中，依前偏正在當位。

暉首座遺書到上堂，絕消息處，倏忽通消息，當舉揚時，冷淡懶舉揚，月落分明暉徹潭底，風行兮虛碧沒蹤方，半座巍巍倚緇林大位，全身堂堂入如幻三昧，正與麼時，還有入理深談分麼，良久云，泥牛吼水，月木馬嘶春風。

上堂，山應四運現，不動身，水到大洋飲衆流，響事事虛通不涉緣，心心絕待見佛性，宗本絕去來路，門未障出入人，大衆孰是入門人，諸人須知，諸聖雖俱從萬行門得入，佛佛祖祖親所面授，坐禪是正門，所以達磨西來不務餘行，不講經論，只在少林九年面壁而已，實知坐禪則正法眼藏涅槃妙心，又是傳法救迷情之直路，兄弟須惜光陰，坐禪辨道，古人云，如人駕車，車若不行，打車即是，打牛即是，大衆如何受持，良久云，如是如是。

爲暉首座上堂，吉祥雲白山林爲瑞，洞水派分性海收瀾，東關叢席座頭唱大，北陸戲場合殺筵寒，玉兔懷胎走碧空，驢馬追不及，金烏抱卵落潭底，俊鷹覷不看，石女拋杼拭淚，木人失友迷肝，暉座元已收腳，足行腳，還踏斷生死關，也未欲向那邊避影，影彌露，擬來這裏窺體體還虛，不見道，藏身處沒蹤跡，沒蹤跡處莫藏身，沒蹤跡處且致，如何是莫藏身處，良久云，雪覆四山雲斯一抹。

閉爐上堂，桃花開時與靈雲合頭赤心片片，火爐閉處箇裏無高下行地平平，亘古騰今桃紅柳綠，諸人見處與靈雲是同是別，若道同直至如今，更不疑若道別，幾回葉落又抽枝，於此明

得生死根源便坐得斷本來家業正現在前還委悉麼主山高峻嶮案山翠青青上堂雨灑四山春色媚黃鸝啼斷綠楊枝爲憐歲月蹉跎去難復壯年改老衰諸仁者直須與道仔細相應不可虛度時光此生莫強愛惜轉一息則來生況又相逢佛祖正法稀於優曇花開須救頭然辨道應知坐禪一門便直指人心見性成佛之西來意也勸君尋常坐蒲團上身心脫落兄弟須知外道二乘營坐禪在雖然與佛祖之單傳天地懸隔外道以我我所執故有邪見著味之過二乘以自調自度故有涅槃擇滅之病所以道盡屬情所計六十二見本爲甚折伏二乘外道趣向佛祖正路不見六祖云一切善惡都莫思量自然得入清淨心體坦然常寂妙用恒沙還委悉麼良久云利劍不截死漢

上堂七佛宗風今猶未息向上關楨誰敢打開快便難空過隨處建法幢有時孤峰頂上盤結艸庵呵佛罵祖有時荒村里中放身游逸合水和泥上之不登虛空界下之不沈塵泥底所以道於一毫端建寶王刹坐微塵裏轉大法輪爲甚恁麼過橋村酒美隔岸野華香

佛生會上堂賊既指點賊身露宇宙稱尊還自瞞一杓熱湯蔞頭灑矜誇滌盡見芳顏韶陽老棒頭迅雷狂狗逐土塊遵布衲杓中香水櫻兒在玉盤且問布衲浴得者箇則且致把將什麼物來良久云不因一事無達一智

結夏上堂應時號令難回避曠古規繩成大方不許行雲遊嶺外珠轉金盤發靈光百川耿耿同派大洋洋涵天三月護生行無生道十虛教誰禁神足通箇中履踐畢竟如何莫行難上岸鳥飛不出空

上堂混沌未分早有此土三世諸佛於此降魔軍成正覺於大千界轉妙法輪諸代祖師於此領不陰陽地坐無影樹頭開千聖不傳底向上一門演諸佛未說底祕要大義所以道吾本來茲土傳法救迷情傳法救迷情且致什麼處是茲土以拄杖劃一劃云於此擬議十萬八千如何是向上一門卓拄杖云者杖子跳上築著帝釋鼻孔還要聽祕要大義麼卓拄杖一下云莫逢人舉似

上堂尺璧非財抱璞楚庭荆足寸塊不賤供沙金輪得臺昨日說定法天豁達地安寧今朝說不定法風鳴條雨破塊拈拄杖卓一下云這裏是什麼處在說定說不定者一杖子半拄天半拄地既有兩頭分付一分奉地下釋迦一分奉天上彌勒且現前大眾以什麼奉獻良久云腳下是黃金

上堂胡種族道人把劫前印印泥水印虛空石女分肘後符護賊軍護家子一人化大開恩澤萬國安恬歌太平於此蹉過聲前會肯猶滯顧鑑之端言下契宗未出情識之際只是夢中說夢記得舍利弗問須菩提夢中說六波羅密與覺時是同是別須菩提云此義幽深我不能解此會在彌勒大士汝往問彼雪竇拈云當時若不放過隨後與一箇誰名彌勒誰是彌勒者便見冰消瓦解大衆雪竇雖有恁麼伎倆未免隨他腳跟後永平不然當舍利弗問夢中說六波羅密與覺時是同是別代須菩提道可憐去日顏如玉卻歎歸時鬢似霜須菩提爲甚道此義幽深我不能解此會在彌勒大士汝往問彼索短不構深泉絲長便垂巨浸畢竟作麼生爭之不足讓之有餘

上堂非獅子兒不能獅子窟遊戲非虛空者爭得與虛空對談地平擊千峰千巒之泰山石魯舍無等無價之寶玉古人爲甚要磨磚爲鏡是古鏡耶是明鏡耶若道兩鏡相照於中無一點塵何用磨磨手段諸人試斷看若不得斷坐經三生六十劫只是小伎野狐精當兀坐時碧眼胡僧於汝掌中藏身開眼在慚愧慚愧

端午上堂梅雨霖霖一味甘露洽然生萬叢醫病除差眼裏空花何瞞目瞞外都無鬼魅之怪家誰用白澤之圖雖然如是拈一莖藥草分生殺與七尺鐵棒驅佛魔還有不費葦草不假棒力底對治麼良久云看怪不怪其怪自除

上堂道若虛空無內外雖無遮障到人稀裏頭更不用彈指樓閣風推月啓扉記得當山初祖云昔唐虞有人犯法僅畫其衣服耳然無人犯法所以重法也後來雖行五刑辛法而多人犯法是所以不重法也我儘幸遇不可比唐虞之佛法縱不畫衣服豈犯法者乎若又犯之不重佛法也苦哉復舉南泉問黃檗什麼處去檗云擇菜去泉曰將什麼擇檗豎起刀子泉曰只解作客不解作主祖拈云若大佛當黃檗豎起刀子時代南泉道我王庫內無如是刀大佛門下又且如何劍去久矣莫敢刻船師曰爲甚如是道良久曰陶壁靈梭起雲吐霧

上堂舉曹山因僧問真佛出世也否山曰不出世僧云爭奈真佛何山曰琉璃瓶子口僧無語宏智古佛拈曰通身及盡徹底無依撒手與來隨處得用還識曹山老漢麼當戶無影迹徧界不曾藏師拈曰者僧看煙怪火曹山只解藏身不覺露角宏智恐猶涉多岐永平分上又且如何周體清虛不涉緣元來心月自孤圓誰臻這裏論存沒色聚頭邊看普賢

上堂長劍高揮驚龍蛇陣獅子一吼伏象虎橋不見達磨大師踢倒六宗關鎖大通正路抽開五葉瑞英永興祖林直得龍吟雲起虎嘯風隨記得臨濟云夫出家人見解真正辨佛辨魔辨凡辨聖辨真辨僞辨正辨邪佛魔未辨邪正未辨出一家入一家喚作造業衆生不是真出家諸人已離父母家鄉得入佛祖屋裏豈還可成造業衆生乎但是因貪利耽名愛生憎死是自非他而已生死事大無常迅速古責在之前一團子莫虛令落地爲甚如是良久曰正理人無曲斷

上堂具十方通徹眼底人不能針眼裏藏身揚四域照輝光底月未免深淵水沈沒一出一入半合半開龍泉與鐵斧同鐵利鈍懸殊駝驢與驢驢一途遲速大別爲甚如是先行不到末後太過雖然恁麼我者裏不然良久曰行時同步臥時一床

中夏上堂法王令下詐還作莫半路追陽燄休有意氣時添意氣不風流處也風流記得椰椰云奇哉十方佛元是眼中花欲識眼中花元是十方佛欲識十方佛不是眼中花欲識眼中花不是十方佛於此明得過在十方佛若不明得聲聞作舞緣覺臨粧大衆要委悉麼道理麼水自朝東星皆拱北

上堂炎炎火景布橫縱忽地爲警一葉風始信熱寒不臻處蘆花帶雪玉玲瓏巴猿叫月露涵虛碧老鶴舞陰離出銀籠爲甚道上無攀仰下絕已躬仰之彌高梵王不窺得佛頂相聞之稍遠目連終無窮梵音聲爲甚如是不入虎窟爭得虎子大衆要看佛頂相麼豎起拂子云螺髮石旋要聞梵音聲麼以拂柄擊禪床云舌不出口

上堂丙丁童子來自求火，盡地蒸砂天際蒸雲，須彌外鐵圍內，爐鞴宛然發開，諸佛及衆生練得也未，調達處中樂三禪天，其或未然，一柄扇子動容作秋，復舉麻谷搖扇，次僧便問：風性常住無處不周，爲甚和尚更搖扇？谷曰：汝只知風性常住，不知無處不周。僧云：如何是無處不周？底道理？谷乃搖扇，師曰：大衆還要體悉，搖扇底道理麼？任教千般巧，但憐一樣風。

上堂虎嘯懸巖，風動山也動，人過橋上，橋流水不流，海大無讓，滴水爲甚，底不宿死屍，山高不厭塵泥，爲甚頂難置雨水，心萬法根，犀鬚月紋成角，境一心作珠承色，更無痕，根塵不到處，還有人合頭麼？記得枯木示衆云：知有佛祖向上事，方有說話分，諸禪德且道：作麼生是佛祖向上事？有箇人家兒子，六根不具，七識不全，是大闍提無佛種性，逢佛殺佛，逢祖殺祖，天堂收不得，地獄接無門，大衆還知是人麼？良久云：對面不仙陀，睡多饒寐語，大衆要看是人麼？拈出拄杖云：高著眼，要聽這漢寐語麼？卓拄杖一下云：夢中說夢。

上堂五嶽不是高，須彌自入芥子，微塵非是小，涓滴能吞月宮，應盡大千，證無相毘盧正體，宣一句子，開八萬陀羅尼門，當恁麼時，塵刹說虛空說，有情說無情說，更令生滅說終無間斷，舉當山初祖云：夫佛祖向上參學，先須觀無常迅速，莫敢以忘若忘，無常生滅者，職由常顛倒也，三世十方諸佛諸祖之法，元不在凡夫之常顛倒中也，兄弟須知：生生死死，輪迴之迹，無窮卓卓的，參學之機，不味白雲倚山，而以山爲父，箇中之功，至無功，明月栖水，而以水爲家，直下之住，無所住，離見聞覺知，而有智，非生滅之心，離地水火風，而有身，非和合之相，所以道：四大性自復，如子得其母，兄弟作麼生得恁麼會？良久曰：霜天月落夜將半，誰與澄潭照影寒，師曰：

大衆初祖開示如何領會，頌曰：嶺松老帶歲寒色，天月零洋流水漪，遮莫青山常運步，拋梭石女夜生兒。

解夏上堂：林蟬葉底作清吟，聚散有時嶺上雲，可惜三期殘影少，蠟人屢誡入精魂，時光疾於箭，賊過勿張弓，露命難繫風，花落何望朵，莫眼花莫眼花。

上堂吉祥峰頂不，人間笑月一聲何作關，青葉髻春樓至晚，家林曇蘂自斑斑，瑞鳳娟娟常棲梧竹，明珠轆轤稍轉，金盤莫動著，動著辜負先聖，勿休止，休止喪我兒孫，爲什麼道，逼塞太虛空，赤心常片片，片片底是什麼，荷葉團團團，似鏡菱角尖尖尖，似錐，還委悉麼？良久曰：水泄不通。

上堂紛擾擾中住，那伽定安閑，閑處遊化戲場，十字街頭更多知己，佛祖屋裏是甚怨讎，一拶拶破野狐妖怪，大方漏泄從上祖風，不見道，若立一塵，家國喪亡，不立一塵，野老妥帖，於此見得微，動靜二相了然不生，復舉玄沙因僧問：承和尚有言，盡十方世界，是一顆明珠，學人如何會得？沙云：盡十方世界，是一顆明珠，用會作麼？沙來日，還問其僧：盡十方世界，是一顆明珠，汝作麼生會？僧曰：盡十方世界，是一顆明珠，用會作麼？沙云：知汝向黑山鬼窟裏作活計，師頌曰：石舍皓玉本無類，泥水染蓮蓮卻鮮，莫怪黑山鬼窟計，鷄鳴鳴谷日輪圓。

上堂佛祖兒孫，專須勘辨道邪正，乘大小認楚鷄爲丹鳳，握燕石爲玉珍，底是多，一度落在邪坑小岐，歷劫難出，西天竺國，正像法時，猶有解脫堅固，禪定堅固，闢靜堅固，況於像季末法耶，又況於邊地遠島耶，雖然如是，進則得到，退則彌遠，佛言：上上因緣故，生於南洲，既受上上人

身幸值的的祖道不可虛度光陰就中當山初祖遙航萬里曠海親見天童淨和尚倒卻說轉身心脫落佛祖宗風始通扶桑國國之運也人之幸也其恩如山其德如海欲酬其恩德不可漏失祖師家業然則當門弟子莫以那裏閒消息亂自家古風流善星比丘于今在阿鼻底不可忘者歟復舉僧問文殊達磨是祖也不殊曰不是祖僧云既不祖何用西來殊曰爲汝不薦祖僧云薦後如何殊曰方知不是祖師曰喚爲祖則觸喚不爲祖則背超觸越背如何商量頌曰佛佛命根藤倚樹人人心地月開池春過百鳥不來處風馥殘梅微笑枝

開爐上堂火起地坑熾徧天方金佛不曾能經過處木佛是爲涅槃道場貧舍利丹霞令人屬煖落眉鬚院主教自招殃既有得失還有不落是非底麼四大性自復如子得其母復舉雪峰示衆云世界濶一丈古鏡濶一丈玄沙指火爐云火爐濶多少峰云如古鏡濶師曰這爐邊事如何商量頌曰寒風吹火著爐中猛熾亘天逼界紅箇裏縱橫如古鏡勿疑星向紫微宮

上堂雪布大地銀擎千峰枯林呈浩春之瑞人物迷一色之功可謂彌勒下生之先兆普賢發機之道風既得八面玲瓏誰滯千差岐路畢竟作麼生復舉長髯上曹溪禮祖塔廻參石頭頭問什麼處來髯云嶺南來頭曰嶺南一鋪功德成就也未髯云成就久矣但缺點眼在頭曰汝莫要點眼麼髯云便請頭垂一足髯便禮拜頭曰汝見什麼道理禮拜髯云據某甲所見如洪爐上一點雪師曰者一段因緣如何透得頌曰洪爐一點雪臘月水心蓮雙手承垂足爍迦羅眼圓

上堂拈拄杖云拈來渾身卓立黑漫漫放下分外抽枝蒙鬱鬱三世諸佛歷代祖師借者杖子

薰力出世度生現身說法大地有情草木國土承者杖子處分各在自位現瑞放光卓拄杖一下云怎麼也得不怎麼也得又卓一下云怎麼也不得不怎麼也不得諸人杖子歸者杖子用在體處老僧杖子混諸人杖子體在用處雖然與麼諸人杖子撞牆撞壁許多有力老僧杖子周體鈍置不直半文

上堂一蹊平坦無差路蹣跚又還滯半途莫向龍門惟三級月蟾不覺上珊瑚慈航和尚云參禪人第一鼻孔端正次眼目清明其後要宗說俱通誠夫鼻孔若不端爭辨它香臭獵犬何知靈羊蹤跡眼目若不明爭得見色明心誰知靈雲見桃花悟道若宗說不俱通爭得爲人垂手拄杖拂子亦難携如何是鼻孔端正底鼻與臍對不背前後不傾左右出息入息不短不長如何是眼目清明底目須對見鼻頭不閉不瞬不張不微如何是宗說俱通底以拂子打圓相又擊禪床右邊云此宗本自非促延一句了然超百億

冬至上堂天關掀動日月相從地軸撥旋海山共轉陰陽頭尾雪埋路長短交量線不藏文彩未彰文彩還顯買賣賤賤買賣貴賣一任汝斗量達磨杓白釋迦畢竟如何皓玉不瑕琢磨顯德頌曰寒風和雪扣松堂石女點頭舒線芒萬類翻身蟄龍動梅唇潛笑大方香

上堂禪心地耕犁如虛空無內外雷鳴電走一點沒痕天地不爲一人覆載日月非爲一人發明人人自有分忽地須薦取復舉趙州問僧什麼處來僧云雪峰來州云雪峰近日有何言句僧云雪峰道盡大地是沙門一隻眼諸人向什麼處屙州云汝若過嶺附箇鐵子去雪實云香僧不從雪峰來可惜趙州鐵子師曰三大祖師雖有出格商量永平欲質之雪峰是則是眼

裏生醫趙州老婆應病施藥雪竇忘客貧處妬它施物永平分上又且如何遮莫雲和明月白
只看松竹雪中青

臘八上堂三祇非是長遠打成一片剎那孰言短促直須萬年大功無待賞鬼徑象何遊眉間
蛛網繫得何物頂上鵲巢啐啄同時不登山爭逢猛虎入水便能見長人耐耐明星瞎卻瞿曇
老正法眼爲甚情非情與釋迦老子同參要會麼堅起拂子曰者毫頭建寶王剎若涉疑著試
舉看僧問忠國師教中只見有情作佛未見無情授記賢劫千佛就是無情佛耶師曰如皇太
子未即位時但一身耳即位後國土山河盡皆屬王有情受記作佛時無情作佛何有無情別
得受記宏智古佛拈云剎中之佛處處現身佛中之剎塵塵皆爾又云六國自清紛擾事一人
獨恣太平基永平門下又且如何一輪自轉十虛明破鏡無臺重不照今朝成道底又作麼生
頌云兀兀靜中鼻息高風刀快斷葛藤巢曉星失落眼睛裏忽地出頭舒白毫

斷臂上堂順行三千泥龍吟潭玉馬步雪逆行八百烏龜向火水老皺眉達磨不來東土面壁
九年二祖不往西天得髓三拜波瀾起平地勢高滔碧天舉震且第二祖昨夜立埋腰寒雪今
朝逢斷臂快刀當看庭雪痛切斷腸味且初祖問汝久立雪中當求何事二祖云願和尚開甘
露門廣度群品初祖云諸佛妙道曠劫精勤難行苦行非忍能忍豈以小德小智慢心癡心欲
求真乘徒勞勤苦爾時二祖潛把利刀斷左臂置于初祖前初祖知是法器使許入室改名曰
慧可可使問某甲心未安乞和尚與安初祖云將心來與汝安可思惟云覓心了不可得初祖
云與汝安了大衆須知相逢真善知識古之難今之難慕受無上大乘實火裏冰臘月蓮也從

使初祖航海西來二祖不斷臂得髓佛正法爭得傳今日其思如山兒孫可報謝者歟古人稱
法恩或捨國城妻子或捨頭目髓腦但約衲僧門下著手心頭辨道點足實地行李是則報謝
本分還要委麼頌曰雪試嶺頭松梅娟雪裏容定乾坤底眼坐斷六門蹤

上堂賊智勝君子三更過鐵門忠言還截舌好事不如無若又了達自心本際何有瞞自瞞他
羅葛倚松千尋外吐丹朧明月印水九折底涵碧天既得徹頂徹底何更關是關非諸兄弟此
日如矢命亦難留魚迫少水人易放遊年光自極新春自萌白髮老人誰復壯年於此退步子
細看白雲自靜長空何煩四山運轉還相應履踐麼莫怪當初沒腰雪至今梅葉自娟娟

上堂學道如大虛清廓不得邊量似大地堅牢生長萬物上山須到嶽頂不到不識宇宙寬荒
入海須究沙底不究爭測滄溟深廣到與不到只是由猛烈與鈍滯然則諸人莫強愛惜浮世
之身命須百尺竿頭進一步不可求覓空花之佛果金屑雖貴落眼成翳於此薦取有什麼難
入山不畏虎兇獵者勇入水不避蛟龍漁夫勇白刃臨前見死如生將軍勇作麼生是衲僧勇
良久曰曉天喫粥午時喫飯

上堂脩竹不知帶衝天綠矮松何悟有凌雪操塞壑填溝是法無高下穿嶺夷嶽大道方坦然
復舉調達以逆墮獄因佛令阿難傳說汝在地獄安否達云雖在地獄如三禪樂佛又令問汝
欲出否達云待佛入來我便可出阿難云佛是三界慈父豈有入地獄分達云佛無入獄分我
豈有出獄分師頌曰杲日未零地落花難上枝珊瑚撐著月香餌引魚龜

上堂清白傳家啓窓山月朗功業施外隔岸野花香雖然如是差之毫釐天地懸隔於此薦取

徧界不曾藏舉，仰山到東寺，寺問：什麼處來？仰云：廣南來。寺曰：承聞廣南有鎮海明珠，是否？仰云：是。寺曰：作何形段？仰云：白日則隱，黑月則現。寺曰：還將得來？仰云：將得來。寺曰：何不呈示？老僧仰云：昨到瀉山，被索此珠，直得無言可對，無理可伸。寺曰：真師子兒，大獅子吼。當山初祖拈曰：這箇因緣，叢林喚爲呈珠話。作麼生是珠？以拂子打一圓相云：不是這箇麼？這箇且致，那裏是呈珠處？乃云：飯足粥足，諸人日用著力處，直饒索到珠在處，大佛與備三十拄杖。師曰：初祖提唱是則是，猶用拂子力，借拄杖功，在山僧欲對諸人，顯出明珠。曰：圓如皓月，點清虛，非是缺，還無有餘，罔象端然進前處，元來黃帝不遺珠。

小參

結夏小參，九旬守制自安閑，雲白月明照碧巒，圓覺一輪非廣狹，十方通會我伽藍，以法爲界，何限涯畔，是爲本分道場，以道爲心，豈涉思量，是名平等性智，摩竭正令猶如披沙揀金，毗耶默然只似守株待兔，於此薦取，驅陝府牛不陰陽地耕種，與謝三郎無影樹頭同船，還委麼，行到水窟處，坐看雲起時，兄弟成恁麼事，但在時節因緣，雖然恁麼，是非促延，三月安居儀則，千佛處護念也，以古佛道爲今人心，以今人心通古佛道，所以道無心合人，人無心合道，要識箇中意，一老一不老，道與心既相合，老與不老如何甄窮，白雲倚青山，爲父爲子家業不可。

失墜松風拂明月，爲主爲賓相見威儀須親，僧問古德：洞山有三路學，如何是鳥道德云：應處無蹤跡，絲毫不礙身，問：如何是玄路云：圓同大虛，無缺無餘，問：如何是展手云：當機的用的，用的用當機，永平老漢如何拈頰，飛騰有路，足下無絲，未著邊際，阿誰敢窺，卽是鳥道，十方無壁落，四面絕門闔，上未作攀仰，下亦絕己躬，卽是玄路，拈來也徧，身手眼不會當，放下也手眼通身又多許，是法住法位，世間相常然，卽是展手，還有不涉三路，向上一路麼，仰之高鑽之堅，珍重。

冬夜小參，塵塵悉三昧門，何動何靜，法法是一心性，越境越人，外不見黑闇女，家誰用白澤圖，陰極而非去留，月面佛表裏，僉照陽生而無來論，日面佛應節舒光，於此薦得，日驅石牛耕一片不陰陽地，還植鐵樹看少室五葉花春，進前移步底作麼生，不許夜行，復云：林下禪衲子，先須鼻孔端直，若得恁麼端直，終不敢欺，誑於人，方知直下非兩段，所以道：不涉二邊，更無向背，又道：在千人萬人中，不向一人，不背一人，又道：說阿羅漢有三毒，不說如來有二種語，諸佛與衆生，元來同性，爲甚成諸佛，爲甚作衆生，觸處不曾誑人，言端語直，故曰：諸佛逐物自誑，落有落無，故曰：衆生以何爲同性，地是堅牢，鑽之彌堅，所以道：盡大地是一箇解脫門，水自濕冷，攪之不渾，所以道：水清月不現，火方熾熱，鍊鐵鍛金，所以道：三世諸佛，在火熾裏，轉大法輪，風常動搖，胃之不繫，故云：風性常住無處不周，諸佛與此性相應，諸人不會，缺此性，玄沙曰：釋迦老子與我同參，諸仁者今夜六陰已極，來朝一陽來復，闔國人合力推，也今夜不可到來朝，千鐵牛同身牽，也來朝不可來今夜，是知陰也實不去，陽也實不來，名之爲如來，亦名觀自在，譬如

滄溟上客泛蘭舟於月渚煙波隨情放曠記得藥山一夜無燈燭示衆云我有一句子待特牛生兒便向汝道于時有僧出云特牛生兒也自是和尙不道山曰把燈來其僧便歸衆師曰藥山龔祖心燈已朗爲什麼更索燈者僧未把燈來爲甚便歸衆明中有暗勿以暗相逢暗中有明勿以明相親明暗各相對比如前後步超明越暗如何運步良久云步步不迷方夜深久立珍重

除夜小參萬機休罷千聖不携雲橫谷口歸鳥迷棲年窮歲盡虛空老倒月迫影收玉兔懷胎雲中木馬嘶風去夜半烏鷄帶雪飛當恁麼究竟時條條無盡無盡條條年也無盡太歲在癸亥月也無盡端月是甲寅日也無盡朔旦三朝還委悉麼宗非促延一念萬年無在不在十方目前箇裏家訓是甚消息佛言欲知佛性義當觀時節因緣時節若至其理自彰過去已去未來未至現在不住觀箇什麼時節只惜寸陰分陰不虛度時光是則時節當觀也十世古今不出當念今時則空劫本基然則面前一著子勿亂放捨一時不浪蹉過十二時中不虛過一年始終十二月既過臘月小盡二十九則窮舊年既往新歲未來頭尾未分時如何措足欲向黑帝問庭際雪消沒跡欲向青皇問蒼外梅笑流芳是知前後際絕古今無間不見古人云十二時中不依倚一物然則物物不依倚底一物超長超短非色非空時時不依倚底一時非晝非夜超陰越陽三世諸佛住此一時轉八萬藏之法諸代祖師將是一物與五葉花之春是非人天識智之所及況又利名榮辱之所關乎船子和尙屬夾山云莫住城邑聚落於深山裏鏗頭邊接得一箇半箇嗣續我道是則避名利於山谷裏植道種於鏗頭邊底謂歟僧問雲居僧家

畢竟如何居云居山好僧禮拜起居云備作麼生會僧云僧家畢竟居山於善惡生死逆順境界其心如山不動居打一棒云辜負先聖喪吾兒孫居又問傍僧汝作麼生會其僧云僧家畢竟居山眼不見玄黃色耳不聞絲竹聲居又打一棒云辜負先聖喪吾兒孫拈云二僧見處已辜負永平門下如何相應行履居山好居山好從上祖宗皆一樣誰識丁丁伐木聲青原斧子振深奧夜深久立珍重

雲居膺和尚贊

郁芳鶯嶺拈華瑞端的新豐珍曲吟渡河會水波曾不濕燒庵母一法措智襟獨坐經年而天供更無缺日得旨以後而通眼窺不容針性潔蔑如碧潭秋月腳尖踏斷盡地黃金知見俱忘滅命脈連于今

謝監寺偈

胡亂已來通是事不虧鹽醬幾餘香任他夢裏語刀子庫內一靈雪上霜

永平禪寺鐘銘并序

夫永平者佛法東漸之曆號扶桑創建之祖蹤鶯嶽之一枝於是密密少林之五葉至今芬芬薙草以降年序幾乎一百棟薨粗列樓鐘空乎大家勸誘宏道者林禪人去歲孟夏發化方以遠近緇素助力今秋酉月成矣開山和尚在日鐘聲許多鳴山奧今夏結制後朝梵鐘忽爾響嶺頭先兆冥符可貴者乎昔青葉髻於竺土造青石大鐘化佛逐日放光今二禪人在吉祥鑄青銅寶器祖宗與時護念者也往時與今日函蓋乾坤不疑洪韻繼劫前劫後作銘曰

此吉祥山，方外深巒，帝都雲隔，峻嶺雪寒，受曹源派，湛洞水潭，殿堂年舊，樓臺未安，以他化功，得箇梵鐘，槌發有則，聲揚無窮，千佛同風，一音是從，前後際斷，緊漫相交，迎臨欄月，送度林風，債魚業淨，化蝶夢回，邪定牀幹，燒煮鑊摧，寶珠輝頂，長鯨吼胎，神諾空谷，響及當來。

永平正法眼藏品目頌并序

正法眼藏密傳密付，古之與今，嫡佛嫡祖，永平元祖，入宋穿鑿五葉之根蒂，歸朝能爲一天之蔭涼，忒煞婆心，以和字柔漢語，奇妙善巧，令人不累文言，如石含玉，似地擎山，聊綴卑語，述其大旨耳，後見此八字，不打開，妙心源未通徹，一大藏教，少林妙訣，夢也未見在矣，嘉曆四年中夏，曾孫義雲和南拜書。

第一現成公案 是什麼。

面前一著莫蹉過，空劫春容此早梅，一字入公門內了，九牛盡力挽無廻。

第二摩訶般若 照了綿密。

智燈照徹解陰空，什麼處人居暗室，徧界不藏誰敢疑，摩訶般若波羅蜜。

第三佛性 達彼達此。

威音世界非幽遠，直至今其理自彰，本分性光莫疑怪，大千界日出扶桑。

第四身心學道 飄巾斗。

玄豹霧融毛彩變，靈犀月朗角紋成，朝參暮請甚階級，曠古風流非缺盈。

第五卽心是佛 將錯就錯。

江西直說透波心，從此大梅卜絕岑，三十年來人不識，香風馥馥在而今。

第六行佛威儀 佛眼難窺。

了了無靈知可了，左旋右轉是風流，腳跟點處沒蹤跡，何向佛邊得逗留。

第七一顆明珠 不染不磷。

圓陀陀八面玲瓏，轉轉轉不留朕蹤，耐競頭馳赤水，進前罔象叶皇風。

第八三時業 雨過雲一抹。

現生後報誰疑著，猶若夜輪浮水中，照用靈靈絕三際，爲憐松竹引清風。

第九古佛心 撞牆撞壁。

山河大地星辰宿，空劫已前自己心，一念僅萌瑕作鏡，無爲道人在溪林。

第十大悟 徧界不藏。

世尊密語無人會，迦葉當初不覆藏，山嶽連天常吐綠，溪深和月轉流光。

第十一坐禪儀 枯木花開。

兀兀寥寥倚蒲團，龍吟雲起黑漫漫，箇中消息絕思議，利海三千祇一般。

第十二法華轉法華 被日照瓶月。

明月一輪吞萬象，卻還萬象發蟾華，任他順逆迷悟類，祇是法華轉法華。

頭尾不相諍，龍蛇互契，科虛空與萬象，法華轉法華。

第十三海印三昧 波波絕待。